6N49

北村季吟著

八代集抄

東京　國學院藏版

911.135 Ki295h

やまと歌の書數多かる中に、萬葉集はしばらく措一代の撰集をこそ本つ書とはすめれ。まことゝ貴き書にはあれど、後の十三代の集はいと下ちたる代の亂れたるが中に出で來しからに、心のみやびも言葉の花もいたく劣れる、更になべての人のたづさはり翫ぶべきにあらず。古今より始めて新古今にわたれる八代の集なんなほすべての歌の態を盡して此の道の源にはありける。こゝに北村季吟ぬしの解きあきらめたりし八代集抄は久しく世にもてはやされていとめでたき書なるを、學の道のいや開けに開け行くにつの書のいと稀らにして得がてなるくち惜しさに、こたび六合館の主人に謀りて、今樣のさうしに刷り

渡邊蔵書

かへつ、廣く世に行はむとす。いで此の抄よ、言葉つゞまやかにしてこちたからず、ことわりのよく聞えたるを、假字のもちゐるなんりのかみの例にまかせて違ひたる、さては如何にぞやうちかたぶかるゝふしのたま〳〵は見出でらるめる、うれかうがへ訂さむもさることなれど、さかしらせむも後めたし、且は古書の眞のすがたを傳へざらむぞなか〳〵に心うくて、さながらさしれきたる、まめならぬ心ごな思ひあやめそ。

明治三十四年十一月　國學院編輯局にて　宮西惟助　三矢重松

古今和歌集

古今和歌集　二十卷

歌員八雲御抄云千百首袋草子千九十九首

京極中納言入道定家卿御說云古今序云延喜五年四月十八日紀友則紀貫之凡河内躬恒壬生忠峯等撰之云々しかるに件集の中に延喜五年以後のうた多く入之若後日に加入らるゝ歟

愚案是假名序を用ひ玉ふなり。此集に延喜七年大井行幸のうた二首。同七年七條后かくれさせ玉ひし時伊勢長歌一首。同十三年亭子院歌合のうた二首あり。これら延喜五年の後の歌也

眞名序には卯月十五日に撰はるゝよしあり。然共諸說かな序のごとく十八日を用られ侍り

清輔朝臣袋草子云基俊云延喜五年四月十八日上奏の日也。序は貫之假名をもつて土代として。叔望をして草せしむ。ともに興あるをもつて優美に堪ず退入云々。又同草子云、貫之集云、延喜の御時やまとうたしれる人々をめして。むかしいまの人の歌を奉らせ玉ひしに。承香殿の東なるところにてうたえ

らはせ玉ふ。（愚本家集ニハ一ふくるまてト有て初日の字ナシ）初日の夜暮るまでとかくいふほどに。（愚本仁壽殿のもとのさくらの木にトアリ）御前なる梅の木にほどゝきすのなくを。四月六日なればめづらしがり玉ふて。めしいでてうたよませ玉ふにたてまつる「ことと夏はいかゝなきけん郭公此暮ばかりあやしきはなし」（愚本こよひばかりはあらんとさるにもふ）

是年號なしといへども四月十八日の儀にかなふ。六日は書寫のあやまりか。十八日と六日の字と相似たり。魚魯章草のあやまり是なり是まで袋草子但八雲御抄云古今集不入萬葉集歌云々。但誤りて七首あり上古の人は名を註さず。或は左に註す。當帝の御製を入す。延喜五年に仰せをうけ玉りて延喜の末に奏聞之云々。（愚案此御抄のごとくならば延喜五年よりのちの歌いる事無疑にや）

撰者

紀貫之は孝元天皇の御末武内宿禰より十七代の苗裔なり。父の名は紀望行紀氏系圖に委尭惠抄には文躬の男長谷雄の甥とあり可尋之

古今序には御書所預とあり。延長八年に土佐守に任ず。紀氏新撰の自序には玄蕃頭從五位下とあり此新撰の序は貫之のかき玉ひて本朝文粹に入たり。大井河の行幸の和歌のかな序貫之のかき玉へるを古今著聞にあり。彼土佐日記は女のしるせるやうに書なしてこれ又つらゆきの記なり。家集一卷三十六人集の中にあり。作者部類にいはく天慶八年三月廿八日任木工頭天慶九年卒

貫之和歌風躰

古今眞名序云先師柿本大夫云々。貫之は人丸と世をことにすといへども、其遺を繼。其風を學ぶゆへに師とすべき事たとへは。程子の孟子の傳を繼がごとし定家卿近代秀歌云むかし貫之歌心たくみにたけ及びかたし。詞つよくすがた面白きさまを好みて餘情妖艶の躰をよまず。これよりこのかた其流れをうくるともがらひとへに此姿におもむく云々

八雲御抄云俊頼抄云つらゆきは一首を十日廿日によみけるといへり。されもたとへばの事にや。貫之毎度に十日廿日によむにはあらじ。只それも歌は樂ずるがよき事をいふなり

公任卿新撰髓腦云貫之躬恒は中比の上手也。今の人のよむは此人のながれなり。貫之歌「おもひかね妹がりゆけば冬の河風寒み千鳥なくなり」みつね「我宿の花見がてらにくる人はちりなんのちや戀しからまし」　兼盛歌「かゞふればわか身につもる年月ををくりむかふと何いろぐらん」　此歌は

貫之がいはく歌の中の本躰にすべしといひけり

與儀抄清輔作云風ふけはれきつしらなみ立田山よはにや君か獨ゆくらん

此歌を貫之は歌の本といへり云々

順阿井蛙抄には俊成卿はつらゆきの「むすぶ手の雫ににごる山のゐのあかでも人にわかれぬる哉」これを本とすべきよしをの玉へり云々

袋草子云朗詠江註云四條大納言公任六條宮具平に被語云貫之は歌仙也宮云人丸に及ぶべからず納言云しかるべからずと。こゝに秀歌十首後日に合せらる。八首人丸勝。二首貫之勝。此歌持云々「夏の夜はふすかとすれば郭公なくこゑにあくるしのゝめ」

清少納言枕草子云蟻通明神貫之が馬の煩ひけんに此神のやまぜ玉ふとて歌よみて奉けんにやめ玉ひけんいとおかし。是すなはち貫之家集に「かきくもりあやめもしらぬ大空にありとほしをば思ふべしやはとあるうたの事也。誠にめに見えぬをにかみをもあはれとおもはせとかゝれし跡むなしからず名譽なるべし

凡河内躬恒凡河内は姓也。日本紀神代卷に。凡河内は天津彦根命の苗裔とあり。古今序には前甲斐小目とあり。後撰集詞書に延喜の御時御厨子所の預と見ゆ。作者部類五位部に延喜廿一年正月晦日に任淡路權掾云々。宗祇說には行氏が係譜利が子云々。家集卅六人集の中にあり。和歌は貫之に對して古來稱す。鴨長明無明抄云三條大相國撿非違使別當ときこえける時二條帥と二人。みつねつらゆきがをとりまさりを論せられけり。かたみにさま〳〵の詞をつくしてあらそはれけれどもことときるべきにもあらざりけれは。帥いふかしく思ひて。俊頼にかたられければ。俊頼聞てたび〳〵うちうなづきて。みつねをばなあなづらせ玉ひそ云々。まことにみつねがよみくちおもひ入たるかたはまたたくひなきもの也云々

紀友則古今序には大内記とあり。作者部類六位部にあり。宮内權少輔有朋が男にて。貫之從兄弟也紀氏系圖ニアリ撰集のなかばに身まかりける由此集の哀傷の部にあり。家集卅六人集の中に有

壬生忠峯泉大將定國の隨身なりし事大和物語に見ゆ。近衛番長なりしを衛門府生になりしと此集の短歌にみゆ「ちかきまもりの身なりしをたれかは秋のくるかたにあざむき出てみかきもりといへるこれなり。作者部類には六位の部に入て從五位下安綱が男云々。拾遺集の卷頭「春立といふはかりにやといふ歌忠峯也。此うた公任卿の和歌九品に人丸の「ほの〳〵とあかし

のうらといふ歌と双び入て。上品の歌云々。定家卿の秀歌躰大略にも巻頭也。古今著聞五云陰明門院中宮の御時。六字の題を出して人々にれもふ事をかゝせられけり。定家卿家隆卿などもれなしく召けるに。古歌に「有明のつれなく見えし別より暁ばかりうき物はなし。此歌を兩人同く書てまいらせられたり。同心の程優に興あるよし其沙汰有けるとぞ。玄旨法印の百人一首の抄には。後鳥羽院定家家隆俊成などに古今集の中の第一の歌撰出てまいらすべきよし勅なりしに。定家も家隆も此「有明のつれなくみえしのうたをまいらせられしに。俊成卿も此歌にかの貫之の「むすふ手の雫にといふ歌をうへてまいらせ玉ふよししるし玉へり。歌註密勘に定家卿此有明のうたの註に此詞つゝきを見るに。及ばず面白くもよみて侍かな是ほどのうた一つよみ出たらん此世のおもひ出に侍るべし云々。其作者のほどをおもふべし。忠峰和歌十體を述作していはく。先師土州刺史敘古今歌以自歸云々、土州刺史は貫之也つらゆきを先師といへり。家集卅六人集の中にあり

古今證本

定家卿御自筆の本先世に流布する所両様有後嵯峨院の嘉錄二年四月九日にかゝせ玉へるを嘉錄ぼといへり。これにはかな序ばかりにてまな序なし。

俊成卿用ひ玉へる本のとをりと也。又同御代貞應二年七月にかゝせ玉ひて。傳于嫡孫將來之證本と奥書の本を貞應ぼといふ。假名序口にありて。眞名序おくにあり。世に證本たるべし。師僚云嘉錄本は冷泉家貞應本二條家云々。袋草子云陽明門院御本貫之自筆。是延喜御本相傳也。後に顯綱朝臣申玉はる。其後輒々して故ゞ信朝臣のもとにて燒失す。此本序なし。小野皇太后宮御本貫之自筆假名序。宮におゐて燒失す。件之本之流通家朝臣自筆是也。其由表紙に書る花園左大臣の御本貫之妹自筆假名序。是閑院太政大臣の本轉々して來云々。玄旨詠歌大概抄云。故禪閤仰せられし。貫之が奏覽の古今とて正本と思へり。寶なからん望なきよしをのたまへり其故は定家卿本をさたむる時。諸本を取捨して了簡をくはへて。將來家の證本と奥書分明に見えたり。二條家を習はんともがらは。京極黄門以前の本は用べきにあらざるにや云々長明無明抄云中比古今の時花實ともに備りて其さまさまち〳〵にわかれたり

八雲御抄云歌のさまをひろく心得んためには古今第一也。詞につきて不審をもひらくかたには源氏物がたりに過たるはなし

阿佛房口傳云歌の本體には古今のうたを見れほえて本歌にもすべし

玄旨法印百人一首抄云古今集は花實相兼の集後撰集は實過半とかや拾遺は又花實相兼るのよし師說也よく一集〳〵の建立を見て時代の風をさとるべき事とぞ

古今和歌集の名目は此集の序にいにしへの事をもわすれじ古ふりにしことをもたづねしたづねて今も見るなはし後のよにもつたはれとて云々又云まんえふしふにいらぬふるき歌みづからのをもたてまつらしめ玉ふてなん云々これらの文意にて古今の二字の義きこえ侍にや はじめは續万葉集といひけるよし眞名序にみゆ眞名序に云献二家集并古來舊歌一曰二續万葉集一於是重而有二詔二部一令二撰所一奉之歌勒爲二二十卷一名曰古今和歌集云々此序の心も古來舊歌只今の人の家集など奉らせて其歌をあつめられし故古今和歌集と名付られたるよしは見え侍にや猶さま〳〵の准據等諸抄にあり諸抄に准據を用る事子細有口訣

和歌とはやまとうたとて我朝の風俗なればなり詩をからうたともろこしのうたともいふにて心得べし猶歌の字の字訓等あり

集はあつむる也いにしへいまのやまとことのはをあつめられし心なるべし

頓阿の傳之也高秀の假名序註云序は叙也一部のおもむきをついつるなり叙は緒也たとへは蠶の繭は圓かなれども其糸の緒の端をたつね出してくれはこと〳〵く糸になるかことし序を見て一書のおもむきを尋ね知へき也

此集は故金吾基俊朝臣より五條三位俊成卿に傳授の故ふかく京極黄門中院禪門より世々の深秘口訣二重三重に侍れは不審齋宗祇牡丹花老人なと其傳授の法とて十ケ條の制詞をしるしのこされき予ろのかみ靈瑞院清高法印の御かたより御傳授有て彼不審齋より九世の血脉を玉はれり然とも其師傳の抄は彼十ケ條の制詞をもれてみたりにせん事は住吉玉津島の冥慮恐有然に今此古抄は更に師傳の手すちにあらす飛鳥井の權大納言雅親卿ろのかみ將軍家慈照院殿に御講尺の旨とかや其抄のていたらく歌註密勘僻案抄なとをもとゝし其外後成恩寺殿の御說をましへなと尤此道にたよりあり先年予松永昌三にしたかひて飛鳥井一位殿雅章卿に御對面玉りつゝ廿年あまりまうてかよひてわつかなるこしおれ歌の御添削をもかうふりしかば彼御家風をしたふゆへも侍て此抄をもうつし見侍しに此度この七代の集を註してのゝちこの抄をかり用ひて八代集抄の數をとゝのへ侍し是も彼師傳のすちならはこそ猶かの制詞をも

るゝつみふかくも侍るへけれとこれは其かきりには侍されは也此抄の中に僻案抄歌註密勘等其外の抄物にてかける所々は其出所を傍に小書して學者のたよりとせり又此抄のうたの意味たかひぬへき所には口訣と書りへて見ん人を其說になつまさらしめんと也猶家傳の說は別に抄出して子孫にのこし侍しまゝ彼古抄のおもむき左のごとし

やまとうたはひとの心を　やまとのよみやうやまをさけてとなをあけてうたをさけてよむ也やまとゝは大和とも日本とも倭とも和とも書てやまとゝ訓す又山跡山止ともかく也是はむかし天地さきわかれて泥濕かはかさるによりて山にゆきかへる跡おほき故に山跡といふ又人山に止住したるによりて山止ともいふ兩說也野馬塵ともかけり野馬は蜻蛉也神武天皇高山にのぼりて國のかたちを見玉へは蜻蛉の兩翅をゝへたるかことくなるゆへにあきつ國とも野馬塵ともいへりあきつと蜻蛉をいへれは也うたは歌哥同定家卿自筆の懷紙に謌の字をかゝれたり尤和國の風なれは和歌といふ人の心をたねとしてとは心の種より歌の出生してよろつのことのはとなれりさかける貫之の筆舌玄妙なりことのはとは詞の端也言葉と書は音をかりて也言葉ハ說口訣有

世の中にある人　天地人の三才もとは一也清氣はたなひいて天となり濁氣はつゝいて地となる此天地の氣をうけてやはらける氣は神となる是すなはち人道の始め也人道のはしめは神也地神五代の始は天照太神八王の始は神武天皇にうつるこれにてしるへき也ことわさしけきとは四季の花鳥風月の詠嘆賀離別羇旅哀傷慰慕述懷釋教神祇おほやけの政事なきまてにことわさ也かくしけきことわさの見る物きく物につけて此言の葉をいひ出せると也其見出ておもふ事あるは心也かの心をたねとしてよろつのことのはとそなれりけるといへることはりを委いへる成へし

やまとうたはひとの心をたねとしてよろつのことのはとそなれりける

花になくうくひす水にすむかはつのこゑをきけはいきとしいけるもの

世の中にある人ことわさしけき物なれは心におもふことを見るものきくものにつけていひ出せるなり

花になくうくひす　假名にてかけるものなれと文のいきをひ有て花になく鶯に水にすむ蛙を對して書たる也或說に鶯のうた「初春のあしたことにはきたれともあはてそかへるもとのすみかに　蛙の歌「すみよしの涼のみるめし忘ればかりにも人に又とはれねる　此歌首の古事を思ひてかきたるといへと不用事也只花になく鶯水に住蛙のこゑまてもの歌謠を發することはりなれば生しいける物いつれか歌をよまさりけるといふ心なり眞名序には若夫春鶯之囀二花中一秋蟬之吟二樹上一雖レ無二曲節一各發二歌謠一物皆有レ斯自然之理也と同心也蟬をも歌謠を發すとあれは蛙と同しく心得へきにこうあらめかやうに鶯蛙も歌をよめは和國の人として歌をよまてはあるましきといふ心をこめていきとしいける物いつれか歌をよまさりけるといふ歌をよむは詠正字也詠は言を永うすといひてうたふ心也さて此有情のみならす非情のひゝきも皆歌とすといへり長能か記に和歌はか五行の眞詞に出す春の林の東風にうこき秋の虫の北露に鳴も皆昇和歌の跡也されは有情非情ともに非聲皆歌也といへり歌の五句を五行にかたとるゆへ也ちからをもいれすして　ちからをもいれすしてあめつちをうこかしめに見えぬをにかみをもあはれとおもはせおとこをんなの中をもやはらけたけきものゝふの心をもなくさむるは歌也

を木據としてかけるにや是は詩の德をあらはすといへと詩歌の道同心也鬼神とはたましゐ也天の魂を神といひ地の魂を祇といひ人の魂を鬼といふされは天地人の魂をあはれとおもはするとの德をかける也又千方といひし逆臣朝家をかろしめ伊賀の國を領し鬼神を使ひしに「土も木も我大君の國なればいつくか鬼のすみかならましとよめる歌にて千方を捨て鬼神さりしかは千方ほろふといふ事も侍にや伊勢物語に業平のうたにめて〳〵住吉の御神現形し玉ひて「むつましときみはしらなみとよみ玉ふ事あり男女の中をやはらけとは此集に「風ふけはおきつ白波たつた山とよみて夜更る迄琴をかきならしなさせしかは男あはれと思ひて河内へもいかす成にけるやうのたくひあけていひかたしものゝふの心をもなくさむるとは此序にいへるかつらきのおほきみみちのくにゝて國司のしわさをろうか也さて氣色悪かりしに采女あさくは人をわかおもはなくにとよみけれはおほきみの心とけし邪萬葉にあり又延喜の御時女藏人内匠車より紅のきぬを出しけるを撿非違使たゝさんとしけれは「大空にてるひの色をいさめてもあめのしたには誰かすむへきと讃しに正さす成し事新古今にあり是らのたくひ此集の後にも猶れはし（比千方事出所し惟ならすは用しかたき事なか古来いひ傳ふ事なれはさもこそ為坂玉武士といふへくもあらねどなにはをむしろなくさむ所はよくかしひ侍るにや）

このうたあめつちひらけ　天地開闢の時より歌はありといふ

あまのうきはしのしたにてめかみおかみとなり玉へる事をいへるうた也

このうたあめつちひらけはしまりけるときよりいてきにけり
あまのうきはしのしたにてめかみおかみとなり玉へる事をいへるうた也

しまりける時より出來にけりといふことの註也是は時代相違する也開闢は國常立尊化生し玉ひしより前の事也伊弉諾伊弉冉の事ははるかにのちの事也されとかやうの事は文章の習ひなれは大かたに見るへきにや（口訣）此註は貫之奏覽の本にはなし公任卿の所爲也と云宗匠家には貫之所爲といへる不審にや（是は伊弉諾伊弉冉の天の浮橋の上にたゝすみて天之瓊矛をさしおろして滄海をかきさくり玉ひし矛のしたゝり凝りて島となる事也磤馭慮島といふ潮の沫をのつから凝結ひて島となる自凝島といふ磤馭慮島といふ字は聲をかりてかく也國神此島にあまくたりおはしましてみとのまくはひして洲國をうみんとおほしてなのころしまを國の中のみはしらとなして陽神は左よりめくり陰神は右よりめくる陰神先となへて憙哉遇二可美少男一焉と云玉ふ陽神は憙哉遇二可美少女一焉とゝなへ玉へり是は歌とも成れと心に取もふ事を詞にいひ出る所即うたなれは歌のはしめにかくかけるなるへしみとのまくはひとは共爲夫婦と書或說に國神日本國をつくり玉ひし時いさなきのみことといさなみのみことによみて奉り玉へるうた「うは玉のわかくろかみもみたれすにむすひきためよさよの手枕われれても見ん此歌を兩神嫁娶し玉ひし時の歌といへり是は淡路國をつくりて八島といふ所にてとつきはしめ玉ふ時のうたなりといへり

憙哉の御詞は日本紀にありうは玉の歌の事雖二信用一なからしはらく本にまかせて書付侍る

久かたのあめにしてはしたてるひめ
にはしまも
しかあれとも世につたはることは久かたのあめにしてはしたてるひめ
したてるひめとはあめわかみこのめなりせうとのかみのかたちをかたにとつてかゝやくをよめるゑひすうたなるへしこれらはもしのかすもさたならすうたのやうにもあらぬことともなり

久かたのあめにしてはは久かたといふ古きなり　髓腦には天を久堅といふにより天象の物に皆久かたと枕詞に置て詠すむかしはやすゝ

さいふへき事にも枕詞ををくたさへは其德を先いひて後に詠をいふ心也したてるひめとはあめわかみこのめなりとは日本紀神代卷下云天照大神の御孫瓊〻杵尊と申すを此蘆原の國の主に下し玉はんとするに此國を邪神領したりしをにゝきのみことの御母かたのたほち高皇產靈尊の邪神をはらひて御孫をゝたし玉はんために天稚彦に天鹿兒弓天羽々矢を玉はりて此國にくたし玉へれはあめわかみこゝの國にて顯國玉のむすめ下照姫をめとりて我蘆原國をおさめんといひてかへりこと申さゝりけれはたかみむすひのみことあやしみ玉ひて無名雉をつかはして見せ玉ふに天稚彦かの玉はりし弓矢にて雉をいころしつ其矢雉の胸をとをりてたかみむすひの御前にきたりたかみむすひ御覽するに彼あめわかみこに玉ひし矢也血にぬれたり定めて國の神とたゝかひてかくあるにやさて其矢をなけれろし玉ふにあめわかみ

この胸にあたりてたちさころに死にけり醫輔卿歌に「さひくたる名なしの雉ん射さりせは天の羽々矢もなけさらましをさよめるこの事也あめわかみこ高原國に有しさき下照姫の兄味耜高彦根の神あめわかみこと友なひむつましかりけれは其喪を吊ひ來ましたるに此神のかたちあめわかみこのいけりし時のかたちに似て光儀花艶して二の岳二の谷のあいたにてはかゝやくにいもうさの下照姫是を歌によめり「あもなるやをさたなはたのうなかせる玉のみすまるのあな玉はやみ谷ふたわたらすあちすきたかひこね此歌を久かたのあめにしてはしたてるひめにはしまりさいへり此うたあもなるやさは天なるさいふゆ也せうさのたかひこねの神の形乙七夕のかされる玉のこさくなるさいはんさて也うなかせる玉のみすまるさはかされる玉さいふ心也みすまるも玉也かされ詞の心也あなたまはやみはあなある玉を手早に糸もて、つらぬける事也あちすきたかひこねのかたちを此玉に比する心也たに二わたらすは二谷にてりかゝやきわたる心也あめわかみこさねもひけれはせうさのたかひこねにてはしけりさの心也せうさゝは兄也又女の兄弟を通してせうさゝいふるひすうたさはかさらさるうた也日本紀には夷曲さ書てひなぶりさよむ鄙のこゑ詞にかはれるによりてひなふりさいふにやびなは遊士也此夷曲ゑひすうたさいふこれらは文字の數もさたまらすうたのやうにもあらぬさは下照姫のうた何もさゝのほらす詞もたしかならぬ事をいふ但此歌の躰短歌旋頭歌等の根源歌人の世さなりてもかゝる歌のたくひ聖德太子大和の片岡にて飢人に玉ふうたもかゝる躰拾遺に見えたり萬葉に亦おほし

あらかねのつちにしてはすさのをのみことよりうれてりけるちはやふる神代にはうたのもしもさたまらすすなをにしてことのこゝろわきかあらかれは土さいはんたかりけらし

枕詞也土よりぼり出したちを荒金さいふ

水にてゆりそろへ

蹈鞴にて吹わかしてこそかれさなぜるなれ汝の字をゆるさもろふさもよむすさのをのみことよりむこりけるさは此みことは日神の御弟也御心さかなくて根の國にやらひくたされ玉ふ時出雲の國簸川上にて八岐の大蛇をしたかへ國津神手なつちのむすめ稲田姫を妃さして素戔嗚さいふ地に宮つくりして住玉ふに其所に八色の雲のたつを見てかの八雲の歌をよみ玉ふ事をいふ也ちはやふる神代には歌のもしもさたまらすすなをにしてことの心わきかたかりけらしさは

貫名序には神世七代時カンヨナ、ロトキスナチニヒトアツカノヤウロクヲカツテ人淳情欲無レ分和歌未レ作イマタチコラさいへりまへにいふ所の兩神の意歟の御うたをさすにや此詞は心よくきこえたり下照姫の歌は事の心わきかたかりけらしさいふにはかなひたるにや此段口訣有

人の世となりてすさのをのみことよりろみろもしあまりひともしはよみける

すさのおのみことはあまてるおほん神のこのかみ也女とすみ玉はんとていつものくに〻宮つくり玉ふ時にろの所にやいろの雲のたつを見てよみ玉へるなりやくもたついつもやへかきつまこめにやへかきつくるろのやへかきを

人の世にはうたをよむさいふ心也すさのをのみことよりそさいふろの字にてまきれなし口訣卅一字をみそもしあまりひさもしさよむ此すさのをの八雲の御歌よりろ五七五七々の句はさゝのほりたりかくのこさく五句をさゝのへられける根源はかりかたし口訣句のやすくさ詠しやすき天然の事也眞名序には今の反歌の作也さ有

すさのをのみことはあまてるおほんかみの是はすさのをのみことの註也天照太神は姉にておはしませさも女躰なれはすさのをゝこのかみさかけるにや女は姉なれさも系圖には末につる習さいふ說にや口訣女さすみ玉はんさてさは稲田姫さすみ玉はんさて也出雲の國はかの八雲たちしによりてのわか心清々しさの玉ひしゆへの名也八雲たつさはかの八岐の大蛇の居る所に常に八色の雲あり〻其心也いつもやへかきさは其八雲立し出雲の地に八重に垣をして宮つくりし玉ふ心也つまこめにさは妻籠也姫さ此宮にすみ玉ふ也下句は記なし事をかされてよみ玉へり神代の歌の躰也北史相承則二有

かくてそ花をめて　前のすさのをのみこと　の卅一字の詠を讃てそと云花をめてけ花を愛する也鳥をうらやみは鶯の花になるゝをうらやむやうの心をいふ霞をあはれひは山のかすみをあはれとは見よなとの心露をかなしふは露のはかなくきゆるをいふたくひ亦いつれも詞白かりて云やうの詞也遊仙窟に可憐生と書てれもしろしと讀明詠に背レ燈共憐深夜月此あはれふも此心にや露をかなしふも悲哀にはあらすうらこくふれのつなてかなしもと同心なる也あはれひをみとよみかなしふをむとよむか習ひ也人の世となりて三十一字をよみてう花鳥霞露をもてあうふ心詞のさまゝになりしと也

とをきところも　白居易云千里始二足下一高山起二微塵一この和をかけるなり神代の八雲の一首の詠より人の世と成てさまゝの心詞出來たるたとへなりちりひち一醜はひちとよむへしと也宗匠家にはちりいちとよむへきと也宗匠家にもいちとよむと也口訣但日本紀湿土の註に于毗尼と付たり沙土の註に須毗尼と付たりされはひちともよむへけれと源氏をはしめて神ぬるゝこひちなと泥の字をこひちといへはいちとよみつけたりなにはつのうたは　此事をかく事口訣

とをきところもいてたつあしもとよりはしまりてとし月をわたりたかきやまもふもとのちりひちより成てあま雲たなひくまておひのほれるかことくに此うたもかくのことくなるへし

なにはつのうたはみかとのおほんはしめなり

たほさゝきのみかどのなにはつにてみことをきこえけるとき東宮をたほさゝきのみかは是は難波津の歌はといふの註なり　大鶴

かひにゆつりてくらゐにつきたまはてみとせに成にけれは王仁といふ人のいふかりおもひてよみてたてまつりけるうたなりこの花は梅の花をいふなるへし

鶴門とは應神天皇の第四の皇子仁德の御事也應神の御子あまたはします末の御子に菟道稚郎子と號す宇治に住玉ふ故に宇治の宮と申す今離宮といひ奉る此御神也此御子應神の愛子にて崩御の砌に御位を宇治の宮にゆつり玉ふ仁德は父の命なれはとてかたく辭し玉ふ仁德は難波に住玉ひ弟は宇治におはしてたかひに位につき玉はて三年國王にはしまさす然るに宇治宮崩し玉ふ仁德ふかく歎き玉ふ此國君の御心有かたき賢君にてはします爰に王仁とて百濟國人にて我朝に來て仁德の御學問の師にて侍し人今は御位ないなとの玉ふへき事にあらすとて歌にうへて難波津に冬こもりせしこの花も今は春へと咲たり位につき玉へと卅一字のうたにてすゝめ奉るによりて御位につき玉ふめてたき歌の德也君の御在所なれは難波津とよめりこの花を孫姫式に大根の花といふ異説あれは梅花をいふなるへしと註せり此歌を本據として皇子をこの花といふと八雲御抄にも注し玉ふ難波津を梅の名所とすさて御位につきて難波に都を立玉ふを高津宮と號す大鶴鶴とは仁德御誕生の時御産屋へ此鳥きたる故にさゝきと名付奉る御位につき玉ひて貴ひて大の字をそへて大鶴鶴御門といひ奉る孔子のまうけ玉ふ子の産屋へ鯉を人の送るに孔子孔子を鯉と名付玉ふ和漢これなし

あさかやまのことはしうねめのたはふれよりよみて

あさか山のことのは　安積山は奥州安積郡にある山の名也

かつらきのおほきみをみちのおくへつかはしたりけるに國のつかさかつらきのおほきみ　是はあさか山の歌の註也葛城王をみちの奥へつかはさる昔は國司在國して普政をなをなふへしとの格式をなかれたれとも猶勅使をつかはして國々を檢知ぜられける是を平城御宇に察使巡

ことをろかなりとてまうけなとしたりけれとすさましかりけれはうねめなりける女のかはらけとりてよめる也これにろれほさみの心とけにける

祭使なども民者使なども云峻峨の御時までも此事あり其後はたゝねて狩使なども折々有き萬葉に此あさか山の歌あるを今の註にはのせたる也葛城王は橘諸兄の本名也諸兄は敏達天皇の六世の孫也聖武につかへて天平八年に叙二従三位同十年に正三位任二右大臣一十一年正月従二位十二年正月始て橘を玉はりて姓とす御歌に「橘はみさへ花さへ其葉さへ霜はをくとも只ときはなれとあそはされたると也此歌萬葉に入たり萬葉ははしめ此左大臣攝政也國の司をろそかなりとは祖承聚名なりとていかれる色の冷しければ采女盃とりて「あさか山かけさへ見ゆる山の井のあさき心はわがおもはなくに此歌に心さしにけれは其德のすぐれたる歌也萬葉に此歌も入て此女を前采女町といふ所有てここにて食料なと玉はれり六年過て國々に歸りたるを前采女といふ也

此ふたうたはうたの父母　難波津淺香山の二首は歌の父母の様にてあると云むかしは手習ふはしめにもいろは習ふ事なく此ふたうたを習ひけるにや源氏若紫卷に源氏中將北山にて紫上ささなきを見て文つかはし玉ひしに祖母の尼公また難波津をたにはかくしつゝけ侍らぬといへるに源氏「あさか山あさくも人を思はぬになと山の井のかけはなるらんとよみ玉へり其頃は難波つのうたを習ひけるとしられたりいろはは只四十七字を連れてあるへきほとの文字をつくしたれは近代はいろはを習ふなりいろはは無常の歌なれはとて物いむ人はならはすといふ

ふたつにはかろうたにもかくろあるへきろのひくさのひとつにはろうたおほささのみかとをろうたてまつれるうた

そもゝ〳〵歌のさまむつなりからのうたにもかくろあるへきろのひくさ抑は今更に筆を立る間也歌のさま六なりとは風賦比興雅頌の六也からのうたにも

ふたつにはかろうたなにはつにさくやこの花冬こもりいまははるへとさくやこのはなといへるなるへし

かくそあるへきとは六種六義の事也ひとつにはそへ歌とは第一風のうた也風の字をそへと讀そへはようへ也其事をいはて其心をさとらする也難波津に冬籠りせる梅を今は春へと咲といふ表は梅花のうへと見えて裏は難波のみこの御位につき玉はぬ事を冬こもりといひ梅の春をむかへてさくことをはや御位につき玉ふへき時そといへる歌也王仁は百濟國の人なれはなもてにはあらはにはいはす詩の風の心を和歌によりかちのうたにもかくそある今きといへるにかなへり貫之難波津の歌をそへうたに出せる公任卿も同心にや是非の詞なし風の色は見えねとも外の物にふれてしるかこさくにもふ事をこと物よりあらはす歌也かくれたるたとへうた也餘の所にはかろへうたなすらへうたなとのせたるにろへ歌はかりおほさゝきのみかとをたへ奉れるうたとか貯りかやうにかハすは只難波つに冬こもりせし梅の春に成て咲ぬる心を斗心得へき

愚案此抄風の歌こと長く註したりといへと猶傳授の說の委にしかす

ふたつにはかそへうたさく花におもひつくみのあちきなさ身にいたつきのいるもしらすてといへるなるへし

第二賦をかそへ歌と云毛詩に云賦は直陳其事といへり物にたとへすして心を一偏にさいまる事なくよめる歌を云歌の心は花を面白しとつよく思ひて辛勞を忘れて見ることのあちきなさと云心也此歌拾遺集物の名につくゝみを隱し題によめる大伴黒主か歌也いたつきは勞の字をも頼の字をもよめりあちきなさは無端無爲ともかく又既ともひつくゝさは愛する心也花におもひつきて時をうつし日を送る程さに身にいたつきのいるもしらさるかあちきなきと云愚案賦の歌の註又傳授の說に委

ふたつにはかろうたさくはなにおもひつくみのあちきなさ身にいたつきのいるもしらすてといへるなるへし

これはたたことにいひてものにたとへなともせぬものなり此うたいかにいへるにかあらん其心をかたしいつゝにたゝことうたといへるなんこれにはかなふへき

これはたゞことにいひて　此註公任卿は「いつはりのなき世なりせばの雅に出せる歌を賦にかなへりといへり是もたゞふ事をありのまゝにいふされと賦は猶れかひゑなとのやうにはかなき事をいふなり

愚案此抄の義委からす貫之の引歌もかそへうたにかなはさるにはあらす古註にかくもとけるももとつくよりさころあり傳授せすは知かたからん註者口訣

みつにはなすらへうた

君にけさあしたの霜のおきていなはこひしきことにさゑやわたらん

といへるなるへし

これは物にもなすらへてろれかやうになんあるとやうにいふ也此うたよくかなへりとも見えすたらちめの親のかふこのまゆこもりいふせくもあるか妹にあはすてかやうなるやとれにはかなふへからん

これは物にも　此註君にけさの歌なすらへうたにかなはすいふせくもあるかのうたかなふへきさ也なすらへうたといふは物をなすらへてろれかやうにあるといふへきに引歌はあしたの霜のおきていなはと物に引よせていひたれとたしかになすらへたると見えさるをうたかふ歌なすらへ歌は一切の物になすらへていふ妹にあはねいふせさのおやのかふこのまゆこもりのやうにいふせくあるとなすらへていへりいふせきはおほつかなきをいふ爵の字也書札に稽爵とかけるにあなしかふこは銅雀とかく愚案君にけさあしたの霜のうたも此にてなすらへうた也古註にかなはすといふも故有毛詩の疏なとの見うる所なり〳〵なるにて此たかひあり傳授ならてはよく知へからす

よつにはたとへうた

わかこひはよむともつきしありろ海の濱のまさこはよみつくすとも

といへるなるへし

これはよろつの草木とりけた物につけてこゝろを見する也此歌はかくれたる所なんなきされと初めのろへうたとおなしやうなれはすこしさまをかへたるなるへしすまのあまのしほやくけふり風をいたみおもはぬかたにたなひきにけり此うたなとやかなふへからん

第四興たとへうた也是は一切の物をそはにをきて思ふ事をなすらへていふ濱の浜砂の數おほきを我戀のよむともつきすましきにたとへたる也花を雪にまかへ月を氷にたとふる皆たとへ歌也定家卿云此歌の我戀はを君か代はといふ本ありろれは今すこしよろしきやらんされとも故金吾の本に我こひはと有これを用ゆ是はよろつの草木鳥けた物に　是は物と我とをふたつに見せたる也すまのあまのうたの是も風のうたのごとく字面にたとふる所の事をいはすしてたとへはかりをよめる也但風の歌は大義の事にいひ興は戀なとのいたつら事にもよめる也愚案是も貫之の引歌まことのたとへうたなり古註にいへるも毛詩序註にもとつきたれは尤故あり明辨有といへと實に傳授の事なるへし瞎抄いつれも正歌をしるさゝれはよくわきまへたる人世にすくなきにや

いつゝにはたゝことうた

いつはりのなき世なりせはいかはかり人のことのはうれしからまし

といへるなるへし

これはことのとゝのほりたゝしきをいふなり此歌の心さらにかなす　此註爲のなき世

此歌の心さらにかなは

の風かなはすとめう
たとやいふへからん
とは覓歌也認趁同此
字をもかく求めたる歌といふ也是はたゝことにいふへくは誠ならはうれしからましといふへきに僞のなき世ならはと
いへるか物を求たるやうなりと云雅は物にたとへすよせすすく〳〵とよめる也此山櫻のうた是をかなふへきといふ此
歌は平能盛か歌なれは一定此註公任卿付られたるといふへきにや但一條禪閤伊勢物語愚見抄に山さくらの歌清慎公の
歌と註されたりいつれにてかあらん尋ぬへし「僞のなき世なりせは」歌賦の鉢のやう也賦は花鳥風月のいたつら事に
もいへる也山さくらのうたも賦に似たり雅はまことしき事にいへり　愚案此抄猶さま〳〵いへりといへとも的當の義に
あらすたゝことうたといふには僞のうたを本とすへし古註は毛詩序によりていへり是も故有所詮其本意を註せされは
見る人わきまへかたからん明師に傳へて習ふへし

むつにはいはひうた

このとのはむつにはいはひうたもとみけりさき草のみつはよつはにとのつくりせり

第六頌いはひうた也
此歌は催馬樂に詠ふ
この殿のうた也むへ
もとみけりとは尤寓
けりと云宜諾の二字
いつれもむへと讀ま
きくさとは檜を云三
葉四葉とは三棟四棟
と書此殿の棟をあまた作たる也
これは世をほめて　此註はいはひうたは世をほめて神につくる也此とのゝ歌は神に告る心なし猶註野の歌すこしかなふ

はすとめうたとやいふへからん山さくらあくまていろを見つるか
なはなちるへくも風ふかぬよに

このとのはむつにもとみけりさき草のみつはよつはにとのつくりせり
といへるなるへし
これは世をほめて神につくる也此歌いはひうたとは見えすなんあ
るかすかのにわかなつみつゝよろつよをいはふこゝろは神ろしる
らんこれらやすこしかなふへからんれはよろむくさにわかれんて
とはえあるをしきことになん

べしと也此殿のうたは一向に祝言をよめる斗也かすかのゝうたは毛詩序に頌美盛德形容以成功而告神明也とあ
り祝言なから神祇によせたるをいはひうたとする也　愚案　いはひうたの本は此とのゝうた也かすかのゝうたも毛詩の頌
の心にすこしかなへる也非傳授は難能知
おほよそむくさに　むくさは六種六義也和歌に六義にさまをかへて委分りきかたきといふ心也毛詩には風雅頌の三は備
賦頌興の三は缺也然に和歌は春夏秋冬戀雜を篇とし六義みな缺となれり六義の名目はかりを歌にかりて貫之たてたれ
とも毛詩とはひとしからす然に此序にかくわかつ事を甘心せすして公任卿かくかけるなるへし　愚案　六義の事古今
諸抄あるか中に高秀抄の委きにむくはなしされとも實理は猶あらはさゝれは世にしる人まれなるへし
いまの世の中色に付
世くたりて人の心花
になりゆくにより
哥の道をさろへつ〳〵
好色のたよりとする
道さのみ成しと也難波津安積山のむかしは心詞すなをにして人を感せしめしなりさやうの事もなき世となりてこの心
也理木は人しれぬといはん枕詞也人しれぬ戀路のあたなるいたつら事のわさと哥をするといふ也まめなる所は實法な
る所也花すゝきはほに出すの枕詞也ほに出すとは實法なる所にあらはし出さん事かたき心也此次にむかしは歌道の王
道のたすけなりし事をいはんとて也
そのはしめをおもへは
哥い始めを思へは戀
路のなかたちとのみ
すへき道にはあらす
と也

いまの世の中いろにつき人の心花になりにけるよりあたなる歌はかな
きことのみいてくれは色このみの家にむもれ木の人しれぬことゝなり
てまめなる所には花すゝきほに出すへき事にもあらすなりにたり

ろのはしめをおもへはかゝるへくなんあらぬいにしへのよゝのみかと
春の花のあした秋の月の夜ことにさふらふ人々をめしてことにつけつ
ゝうたをたてまつらしめ給ふ

いにしへの世々のみかと　時代をさいす上古賢王の時正しく歌の姿も花のみにあらさりし世をいふ花月の折をすくさす

哥ゝ奉らしめて見給ふと也是は持統文武二代をそれとはさゝすいへるにや此御時人丸出現して哥聖なりし也雷口訣眞名序古天子毎二良辰美景一詔二侍臣一須二宴筵一者献二和歌一君臣之情由レ斯可レ見賢愚之性於レ是相分所レ以随二民之欲一擇レ士之才一也顕昭は此詞意を用て秋の月の夜毎にさよめり教長卿は秋の月の夜さよみて句を切てここにさよめり口訣

花をうふとて　花をさ
うふとて也花を尋求
る心なり花の歌をよ
むに吉野初瀬なとを
よまさるをたよりな
き所にまとひい妙賀の歌に更級姨捨を詠せす思ひもよらぬ所をよむなしるへなきやみにたとれる心々を見給ひさかしをろかなりとしろしめし
正意をうしなへる心なるへし「此里に旅れしぬへし櫻花ちりのまかひに家ち忘れて」月夜にはこぬ人またるかき曇雨
もふらなん作つゝもれん
さかしをろかなりと　花月にたよりある所をよめるをさかしとしたよりなゝ所をよめるををろかなりとして人の賢愚を
知玉ふと也
しかあるのみにあらす　しかあるのみにあらすさゝれいしにたとへつくは山にかけて君をねか
加之　とも加以と　ひよろこひ身にすきたのしみ心にあまり
も書かくのことくあ
るのみにあらすとい
ふ也此次には本歌を引よせて書り
さゝれいしにたとへ　綱育をかく「我君は千世にやちよにさゝれ石のいはほとなりて苔のむすまて君か代はとかける本
もあり此歌は拾遺集には安法々師か歌也此集にはおをあらはさす是より以下皆歌人のさまなり
つくは山にかけて　「つくはれのこのもかのもに陰はふれと君か御かけにまさるかけはなし
よろこひ身にすき　「題しさを何につゝまんから衣秋ゆたかにたてといはまし
ふしのけふりによそへ　「富士のれのならぬ想ひにもえはもえ神たにけたぬむなしけふりを
まつむしのれに友を　「君恋ふ草にやつるゝ古郷は松虫のれそ侘しかりける
たがさこすみの江の　「かくしつゝ世をやつくさん高砂のおのへにたてる松ならなくに「我見ても久しくなりぬ住吉の
きしのひめ松いく世へぬらん高砂住の江は播州摂州両國の松の名所をよひ出て兩所の松を相生のやうにおもはゆるさ也
基綱口訣　拾遺「あまくたるあら人神のあひ生を思へは久し住よしの松は住吉の神木に相生の松といふをよめるにや又
播州の高砂ならて高砂といふは山の惣名にて砂つもりて山さなるといふ心にていへり後撰集に「山守はいはゝいはな
ん高砂の尾上の櫻たりてかさゝん者哉」この歌詞書に花山にてよめるさあり
おさこ山のむかしを思ひ出て女郎花の一時をくれる　「今こうあれ我もむかしは男山さかゆく時も有こし物を」「秋の野に
なまめきたてるをみなへしあなかしかまし花も一時此兩首の心にて男に女を對してかけりしかも男山は女郎花の名所
なれは引よせたるなり男山の歌は遊世の身のむかしを思ひてよめり女郎花のうたはなまめき立てみゆれと只一時のほ
さにてあるそゝ女のさかりの程なき事を男のそれみいひたるよし也男山の昔を思ひ女郎花の一時をくれるにも歌をい
ひてそ心をなくさむると歌人のありさまを此集に入たる歌の詞にていひつゝくる也くれるはそれみふすふるやうの心
あゝ詞也女によせある詞にてかけるなるへし
又春のあしたに　飛花落葉の無常をかける
にや春の朝に秋の夕暮花のちるに木葉の

ふしのけふりによそへて人をこひまつむしのねに友をしのひたかさこ
すみの江の松もあひおひのやうにおほえおとこ山のむかしを思ひ出て
をみなへしのひとゝきをくねるにもうたをいひてうなくさめける

又春のあしたに花のちるを見秋の夕暮に木の葉のおつるをきゝあるは
としことにかゝみのかけに見ゆる雪と波とをなけき草の露水のあはを
見てわか身をおとろき

落る假名にてかける物なれと對してかけり此詞耳目に見聞所を哀に物さひたる文章也「空蟬の世にもにたるか花櫻さくと見しまにかつちりにけり」「秋風にあへすちりぬる紅葉はのゆくゑさためぬ我そかなしき此歌なとを思ひて書るにやあるはとしことにかゝみの「うは玉のわかくろかみやかはるらんかゝみのかけにふれるしら雪」鏡のかけの雪は白髮也「波はなもてのしは也」明詠に太公望蓮に周公「渭濱波」「醫」而さあり草の露水のあはを「露をなとあたなるものと思ひけん我身も草にをかぬはかりを「うきなからけぬるあはともなりなゝん流れてとたにたのまれぬ身は此兩首の心露泡なさのはかなき事をなめり是らの歌によりてかける詞にやあるはきのふはさかへ　あるはきのふはさかへをこりて時をうしなひ世にわひしたしかりしも「世の中は何かつれなるあすか河きのふの淵そけふはせとなる　うとくなりあるは松山の波をかけ野中の水をくみ秋はきのした葉をなゝ盛者必衰とてさかりなれはをとろふ習ひ也　かめあかつきのしきのはねかきをかろへしたしかりしもうとく「あま雲のよそにも人のなりゆくかさすかにめには見ゆる物から夫婦兄弟朋友の中も疎くなる習也　あるは松山の波をかけ野中の「君を置てあたし心をわかもたは末の松山波も越なん「古のなかのし水ぬるけれとも」「さの心を知人そくむ　秋萩の下葉を踏め曉の「秋はきの下葉いろつく今よりや獨有人のいねかてにする「曉の鳴の羽かき百羽かき君かこゝはは我を數かく　あるはくれ竹のうき　あるはくれ竹のうきふしを人にいひよしの河をひきて世の中をうらみ「世にふれはことのはしけき奥竹のうきふしをきつるに　ことに驚を鳴

よしの川をひきて「吉野川よしや人こうつらからめはやくいひてし事は忘れす「なかれてはいもせの山の中におつる吉野の川のよしや世の中　いまはふしの山の（是政長朝臣）は世の中むかしにかはる事を云富士の山は煙のたえすたてる　いまはふしのやまのけふりもたゝすなりなからの橋もつくるなりとき　く人はうたにのみうこゝろをなくさめける

に今はたゝす長柄の橋は古て朽たるか新く作る也と開人は何事も昔にかはりたれは歌にそ心を慰めけるさいはん料也（口訣）ふしの山の煙もたゝすといふに不立不斷の二の心あり不斷をたゝすといふ證歌（拾遺）一ひらにしき枝に一村のこれるは秋のかたみをたゝねなりけり（顯昭）猶證歌なほし今はふしの煙絶る時あれと歌には不斷とよみ習ひてふしの煙の立事世に殘れは歌にのみ心を慰むと也此儀に付て猶口訣有なからの橋も作る也とは（伊勢）「つの國のなからの橋も作る也今は我身を何にたとへん但拾遺に天暦の御時御屏風になからの橋の橋柱わつかに殘れるかた有けるを藤原清正歌に芦間よりみゆるなからの橋はしらむかしの跡のしるへなりけりとよめり延喜御時つくられたらんをはかくは詠すへからす但此序伊勢か歌になからの橋も作るとあれは記錄なくとも其分なるへきにや　いにしへよりかくつたはるうちにもならの御ときよりひろまりにけならの御時とはいつれときこえれと（公任卿）文武の御歌に立田河紅葉みたれての御歌を註せり是は貫之此序に立田川になる　るかのおほん世や歌の心をしろしめしたりけん

かるいもみちをはとかける文武の御歌なれは也定家卿も此說に同心して此序のならの御時といふ所にも立田川の御歌の所にもをして文武天皇と註し付られたり奈良の御時は文武の御次元明の御時なるを文武の御歌をさしてかけりし故あるへきにや貫之夏部にも奈良の石上寺にて郭公をきゝてよめるとて素性「いそのかみふるき都の郭公こゑはかりこそむかしなりけれといふ歌をかけり石上はならにあらさるをならのいそのかみと書今の京より前代の都なれと大和同

國の事なれは奈良の御時と書たる也此際目とかくいへる邪あやなき說也持統文武二代を藤原御門と申奉る二代此所にて崩し玉ふ文武の御次元明の帝和銅三年三月に藤原の宮よりならにうつり玉ふ時「さふ島のあすかの里をたにさていなは君かあたりは見えずかもあらん萬葉又新古今にいれりかの御代やうたの心をしろしめしたりけんといへるは文武をさしてかきたる也

おほきみつの位かきの
本　文武の御時人丸
歌のひしりなりとい
ふ歌仙は歌の柿樂

かの御時にあはさみつのくらゐかきのもとの人丸なんうたのひしりなりけるこれは君もひとも身をあはせたりといふなるへし

といふ心也柿本は姓氏錄云家門の前に柿木あるによりて柿本臣氏とす天足彦押人命の後也と云人丸正三位の事日本紀萬葉集等其外古來の叙位歌名にも見えすされと此集にかけるうへは其分たるへきにや飛鳥井榮雅將軍家御講尺の時六位をみつのくらゐとかけるにや陸奥をみちのくといふむつをみつといふ五音通すれはかけるにやと也歌林良材口訣是は君もひとも身をあはせたりといふは君臣合躰をかけり持統文武の聖朝につかへて新田高市の王子にあへりといへり猿澤の行幸にしたかひて「わきもこかれくたれかみをさる澤の池の玉もさみるろ悲しきと讀る拾遺集に人丸入唐の事あり不審にや萬葉集に石見國にて臨死の時よめる歌「かも山のいはねしまける我をかもしらすて妹か待つらんあらん「石見かた高津の山の木の間よりうき世の月を見はてつる哉」此萬葉に見えす此人丸は妙音菩薩の化現とやらんいへると其後俊成卿に大事とて傳られたりと定家卿の筆にあり秘口訣

秋のゆふへたつた川に
秋の夕春のあした立
田川紅葉錦吉野山櫻
雲對してかけり春の
朝を初めにかくへけ
れとも秋の夕よりかけ初は春の紅葉の歌のある故也みかとの紅葉の錦の御歌は出せるか人丸か心には雲かとおほえけ

秋のゆふへたつた川になかるゝ紅葉をはみかとのおほんめにはにしきと見たまひ春のあした吉野の山のさくらは人丸か心には雲かとのみなんおほえける

るといふ歌は見えす口傳水無瀨殿に人丸の贊に一條禪閤かき給ふ歌に「事とはん吉野の櫻雲と見しやまことことはゝあり」やなしやと是も彼人丸かめには雲かとみし事のうたなきときこえたり又集に見えぬ事をも序には文章にかける事もあれはあなかちにあるへきにしもあらす新古今の序に夏は蟲こひする神なひ山の郭公とかけるも集に歌見えすして天章をもて後に「なのかつまこひつゝなくや五月やみ神なひ山のやま郭公と讀人不知にいれられたるとなり

又山のへのあか人と
赤人は聖武天皇につ
かへて神龜三年秋九
月播州印南野にみゆ
きの時よめる歌萬葉
に有人丸のゝちまて
存生の人といへり官
位分明ならす上總國
山邊郡の人也彼所に
廟有と彼所の人申す
旅客歌一卷付るとな
り彼所に笹栗さてた
け一尺はかりあるに
栗のなるとそあやしくたへなりとは奇妙也と褒美する也人丸をは此道の先師と貴とふる故に無上の歌仙とすそれにを

又やまのへのあか人といふ人ありうたにあやしくたへなりけりひとまろは赤人かかみにたゝん事かたくあか人は人丸かしもにたたんことかたくなん有ける

ならのみかとの御うたたつた川紅葉みたれてなかるめりわたらはにしき中やたえなん人丸梅の花それとも見えす久かたのあまきる雪のなへてふれゝはほのとあかしのうらのあさ霧にしまかくれゆく舟をゝろ思ふ赤人春のゝにすみれつみにとこし我ろ野をなつかしみ一夜ねにけりわかの浦にしほみちくれはかたをなみ蘆へをさしてたつ鳴わたる

さらぬあか人と也
立田川紅葉みたれて　奥に委註
梅の花それともみえす　奥に委註
ほのゝくとあかしの　奥に註

春の野にすみれ　春野にすみれつみに來てあかぬ名殘に野をなつかしくたもひて一夜れたるとなり
わかのうらにしは　若の浦にしほみち來て潟なくなれは蘆邊をさして田鶴のなきわたるとも也或説かたな波とてかのうら
の波なと一向用ましき儀なるへし
此人々をたきて　人丸
赤人を置て又すくれたる人も世世に聞え時々に絶す有と云吳竹は世々かたいとはよりよりといはん料也

この人々をゝきて又すくれたる人もくれたけのよゝにきこえかたいとのよりよりにたえすありけるこれよりさきのうたをあつめてなんまんえふしふとなつけられたりける

これよりさきの歌を　これよりさきは萬葉よりさきをさして萬葉を撰ばるゝ時の事をいふ萬葉集は聖武の御むすめ孝謙の御時井手左大臣諸兄勅をうけて撰するなり一世に首尾せすして擬帝稱德光仁桓武五代過て平城の御時大伴家持撰ひをはれり眞名序に昔平城天子詔二侍臣一令レ撰二萬葉一自レ爾以來時歷二十代一數過二百年一とかけり然は平城御時撰定無疑口訣アリ八雲御抄に四平三百十五首長歌二百五十此内也但萬葉有二兩説一奥五十首或無云々然に孝謙御時撰しはしむるといふ事は序に見えす平城御時首尾せしをのみ撰と面にかきて賀之萬葉は孝謙の御時より年は百とせあまりと勘へ選定せし平城の御時より延喜まて世は十代なゝつゝさかけりよくあたりたる事也孝謙より延喜までは十五代也孝謙の御代のはしめ天平勝寶より延喜五年まて百五十六年也然るを五代の間五十六年をあまりときゝよくやすくゝと書たる賀之の舌安妙也平城より延喜までを十つゝさかけるは平城治世四　嵯峨十四　淳和十　仁明十七　文德八　清和十八　陽成八　光孝三　宇多十　醍醐御在位のゝち八年合せて十代也年は百年なるなもゝとせあまりといふ所に孝謙よりの年數を合せてかくなるへし眞名序にも數過百年とかけり此集に貞觀御時文屋有季を召て萬葉はいつはかりにつくれるそと問せ玉ふに「神な月時雨ふりをけるならの葉の名にはふ宮のふることそこれと奏すれは萬葉は奈良の御時の撰なりとよめり孝謙の御時なれは此歌相叶ふ物也孝謙より清和までは十代をへて百年あまりの事なれは問せ玉ふこと也又世繼物語にむかし高野の女帝の御代天平勝寶五年に左大臣橘卿諸兄諸卿大夫等あつまりて萬葉集をえらはせ玉ふとかく國史の正文

にはあらされとも世繼物かたりは赤染衛門書たる物なれは空事(ソラ)といふへからす此物語に諸卿大夫なといへるは家持なとにや諸兄は天平寶字元年に卒す撰し初めより五年ゝ也家持は參議中納言(ノヒ)まて昇たれとも萬葉には左大辨まへの歌也萬葉に帝王の歌を入る事十四代に及へり前十二代は謚號をのせ奉る聖武孝謙をは御製御歌なとかけり延喜の頃まて八さまて遠からす然を萬葉をよみ失ひて人の見さる物になれり假名は嵯峨の御時弘法大師かき出し玉ふといへり此假名出來てのち貫隱皆かなを好み用る故に萬葉かきの物よみ絶たる也古今集の時代にもあきらかに萬葉をよみ知人まれなりけるか村上御時源順文道に家をおこす名儒にて和歌にも名望他にこなりけれは後撰の撰者として梨壺の五人の隨一たる也萬葉をよみときて帝に奉る猶よみかたき所々少々のこりて後代の人のよみし所もありといへと皆順か闕尾に付たる事なるへし是より萬葉人のよみわきまへたる物とそなれる萬葉代代撰草子定家卿萬時其外家々之說奏

こゝにいにしへのこと

是は萬葉を選ひたる諸兄家持なとを名をいはすしてひとりふたりとかけるか是も得たる所えぬ所あれば十分にはあらぬといふ心也口訣

こゝにいにしへのことをも歌の心をもしれる人わつかにひとりふたりなりきしかあれとこれかれえたるところえぬ所たかひになんあるかの御とき(ヨリ)よりこのかたとしはゝとせあまり世はとつきになんなりにける

かの御ときより　彼御時とは孝謙の御宇をさす萬葉を撰するはしめは孝謙萬葉首尾するは平城の御時也天平勝寶五年より延喜五年まて百五十餘年也委は先段に注先段口訣

いにしへのことをも

前段には一人ふたりといひえたる所えぬ所あると得失をいひて爰には古の事をも歌をもしれる人不多と云

いにしへのことをもしれる人よむ人おほからすいまこの事をいふにつかさくらねたかき人をはたやすきやうなれはいれす

いま此事をいふに　高位高官の人にも其得失あるへけれとも恐てのせすと也
ちかき世に　延喜の御時より近き世也貫之此序に力をつくして古人の歌の躰をさまくのたとへをとりて判せらるよく是を見て心を得は其得失をしり道の本意にかなふ歌をよみ出ぬへき也いくたひも見て了簡すへし

遍昭は歌のさまは　給にかける女の姿形すくれたるやかなるはえたる所まことすくなき事をよめるかいたつらなるといふはえわ所なるへし漏昭俗名良峯宗貞也父安世は桓武の御子也然を閑院左大臣冬嗣に給ひて其子とす姓を給ふて良峯と云大納言大將にいたる其子宗貞は仁明御時左右なき近臣五位少將にて蔵人頭也仁明崩ト給ふ悲しみにたへすかつ二君につかへん事を忍ひすしてひそかにひえの山にのぼりて出家して慈覺大師の室に入天台密宗にわたる又勅して惣持院におゐて座主圓珍に三部灌頂をうけしむ講殊世にきこえたりみつからほとりて慈覺の寂安然の師といへり元慶三年に僧正となる延暦寺に僧綱を任せらるゝ始めなり仁和の帝七十の賀を給ひ封戸百戸を給ふ元慶寺といふ寺に住す此所を花山といへは花山僧正ともいふ也歌の躰心をとゝめてよくみるへきなり
あさみとり糸よりかけて　柳を淺みとりの糸に見なして露を玉につらぬきたるといつはりかさる所歌のさまをえて誠なし

あのほかにちかき世に其名をゆる人はすなはち僧正遍昭はうたのさまはえたれとものこころすくなしたとへは花にかけるをうなを見ていたつらに心をうつかすかことし
淺みとり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か
はちすはのにこりにしまぬ心もて何かは露をたまとあさむく
さか野にて馬よりおちてよめる名にめてゝおれるはかりをみなへし我おちにきと人にかたるな

はちすはのにこりにしまぬ　蓮葉の何心なき露の玉を何かはあさむくと心をつくる所歌のさまはえて誠すくなし
名にめてゝおれる斗そ　女郎花の名にめてゝ馬よりおちたりにわれ出家の身なればたちたると人に語るなとをみなへしにいひかけし也是も歌のさまをえて誠すくなき所なり貫之此遍昭をまことすくなしと書たるに此三首の歌をあて合せられしよく吟味すへし此段口訣

其心あまりて詞たらす
しほめる花の色なけれと匂ひ殘たるは詞たらすして心あまれるたとへ也得失あれとも歌のさま幽玄に餘情有也業平は好色の心深く人に知るゝ事にはかりき斎宮に密通二條后をたはかるにもつかふまつらぬほと密通しけるをはしめ此人のふるまひ伊勢物語に委くみゆ

ありはてのなりひらはろの心あまりてことはたらすしほめる花のいろなくて匂ひのこれるかことし
月やあらぬ春やむかしの春ならぬわか身ひとつはもとの身にして
大かたは月をもめてし是ろこのつもれは人の老となるもの
ねぬるよの夢をはかなみまとろめはいやはかなにも成まさるかな

月やあらぬ春や　獨見る月なれは月も春も見し夜の月春にあらぬか我身は本の身にてあると時宜かはりし事を讃り
大かたは月をもめてし　何の上にても物に若しぬる事のつもりぬれは老となれは大かたに月をも見よと也大かたは十の物七八はといふ心也月をもめてしとは愛すましきと也口訣
ねぬるよのゆめをはかなみ　そと人にあひたるかれぬる夜の夢のやうなるを誠の夢にも見ゆるやとまとろめは夢にも見えさるをいよくはかなくなりまさると也右三首心あまりて詞たらすといふにあてはせられたる也心を付へし口訣
うのさま身にはは　身に相應せすと也商
人なとはよき衣裳き　ふんやのやすひてはことはたくみにてうのさま身にはは
人のよさゝぬきたらんかことし

たるか似合すといふ
眞名序に文琳さかく
〻頃名序奏覽の本には
なしといふ所見には
〻遷昭を花山僧正とか
き業平を在原中將とかき此康秀を文琳とかく是らを其證とするなり詞はたくみなるはえたる所其さま身にたはぬはえぬ所也商人は詞巧なる物也

吹からにのへの草木のしほるれはむへやまかせをあらしといふらん

吹からにのへの草木しほるれは尤山風をあらしといふと也山風を嵐の文字の心によろへいふともいへり此歌詞たくみにてといふにあたれり秋の部には秋の草木のことあり

深草のみかとの御國忌　一條禪閤御說には御國忌をみこつきとよむへし濁てよむは惡き也云々飛鳥井家にはみこきと讀へき也

深草のみかとの御國忌に　草ふかき霞のたに〻かけかくしてる日のくれしけふにやはあらぬ

草ふかき霞のたに〻かけかくし　仁明の崩御を照日のくれて天下くらやみになりたるとなり仁明を深草にたてまつりしゆへ深草の帝と申奉る也草深き霞の谷に影かくしなとよめり是ら此歌を詞巧なるにあてられたる也

宇治山の僧させんはことはかすかにしてはしめをはりたしかならすい
宇治山の僧させん　或說喜撰宇治山に隱居の由はみえたれとい
かなる人とはきこえす但光孝仁和帝の勅
をうけて和歌式を作

は〻秋の月を見るにわかつきの雲にあへるかことし

わかいほは都のたつみしかるすむ世をうちやまと人はいふなり

よめるうたおほくきこえねはこれかれがよはしてよくしらす

〻りて奉るといへり然は歌仙勿論の事也貫之も詞幽にして始終たしかならすとはいひながらこゝによひ出したるは歌仙〻の撰れあるゆへなりとしられたりよめるうたはからぬ事不審なり又其名に付ても假名序にはきせん眞名序には撰喜

さかく異說あるにや孫姫歌式をつくるに撰喜基泉といふ人を二人に出して撰喜か歌には「我庵はの歌をのせ基泉か歌には「木の間より見ゆるは谷の螢かもいさりの舟の沖へゆくかも又樹下集に喜撰歌とて「けがれなんたふさはふれし極樂の西の風ふく秋の初花とあり高撰かうたといふ事古來の說あれとも定說なし或說喜撰は橘諸兄孫子奈良丸か孫周防守良植か子也醍醐法師後隱二居宇治一也

我いほはみやこの辰巳　我庵はみやこの辰巳に其ま〻取つくろはすすむを世をうち山と人はいふと也我は世を思はて住たるをといふ心也しかうすむは然也さそすむ也俗口訣

よめる歌はほくきこえれは　貫之かやうにかける上は我庵はの歌の外はあるましき也續古今集撰るゝ時「木のまよりの歌をいるへき由撰者各いへるを爲家卿貫之か筆むなしくなると嘯きけれはいれさるを爲兼卿玉葉集に喜選と治定して木のまよりの歌をいれたり故實なきの至りとそ

そとをりひめの流也
流なりとはやうなる
〻さいふ流の字をたく
ひなりとよむ說あれ
〻とりうなりとよむへ
し

をの〻こまちはいにしへのろとをりひめの流なりあはれなるやうにて
つよからすいは〻よきをうなのなやめるところあるにたりつよからぬはをうなのうたなれはなるへし

つよからぬはをうなの
歌はつよくよむかよ
けれとも小町はつよ
からぬもくるしから
すをうなの歌なれは
ここはる也或說を
んなは女也をうなは老女也各別といふ說あれと只女也五音通用也小野小町か事不分明仁明承和の頃の人也出羽郡司か

おもひつ〻ぬれはや人の見えつらん夢としりせはさめさらましを

色見えてうつろふ物は世の中のひとのこ〻ろの花にそ有ける

侘ぬれは身をうき草のねをたえてさそふ水あらはいなんとそおもふ

ろとをりひめのうた　わかせこかくへきよひなりさ〻かにのくものふるまひかねてしるしも

むすめ好色無双と云老後は沈淪して奥州にて死去するに百二條禪閤の愚見抄に在中將二條后を狂し奉らんはかりごとに出家せしかは後髪を生さんとて陸奥八十島に至りて小野小町か髑髏の秋風の吹につけてもあなめ〳〵と吹る聲を聞付たる事江次第十四卷にあり匡房の説尤證據とすへし云々長明無明抄には業平この聲をとめ行てみれはとくろの目より藤生たりしを人にとへは小町かなれる果と聞て哀と思ひでなのさはいはじ藤おひたりと下句を付扱とくろをうめたりといへり或抄にあなめ〳〵とはあな目痛〳〵と云云々

たもひつゝねれはや　夢と知たらはさめましき物をとはかなきひ事なれと歌はかやうによむ事と也是哀なるやうにてつよからぬ所なる也

色見えてうつろふ物は　色見えてすみてよむ説も有奥に註

わひぬれは身をうき草　是は文屋康秀か三河掾にて下る時さそひけれはわひたる身なれは根なき浮草のさそふ水につるゝやうにさそはれゆかんと也右の三首にて哀なるやうにて强からぬを可知

わかせこかくへき背　衣通姫の流なりといふに付て此歌を出せり衣通姫は允恭天皇の妃也此歌はそとをり姫獨居てみかさを戀てよみ玉へり我背子か來へき夜にてあり物のさがりてかれてしるしをしらすとよみ玉ふ靡飼止聞云蜘蛛掛則必有吉兆乾鵲鳴而留二行人一小尙有レ瑞大　焉　無レ瑞といふ釋あり蛛のふるまひの本文これらにや衣通姫は玉津島の明神とあらはれ玉ふ小町か歌を此流といふ事面目の事也或説衣通姫は熊神天皇の御孫二流皇子の女也容顔絶妙にして其色衣にとをりてテりかゝやく故に衣通姫と號すはしめ姉君允恭の后に立給ふに又そとをり姫をめしけれは姉后の御心をおほして七たひまてまいり給はす御使中臣の烏賊津といふ人七日不食して庭中に伏て憂へ歎き申けれはまいり給へりさてみかさをこひて此歌をよみ給又帝に奉給ふうた「とこしへに君もあへやもはとこしなへに君もあひ給へと也いさなとりは磯菜取也涙漠は名のりそ也そとをり姫此歌をよみ給ふ時天皇此歌を他人にきかすへからす后阿給は〳〵必うらみ給はんとの給ふ放にはまもを名のりそといふと日本紀十三にあり光孝天皇御字に和歌の浦に垂跡云々「立寄り又も此世にあさたれん名も面白きわかの浦浪是も玉つしまの神詠とかや住吉四所の神殿の中に玉津嶋其一所とすもとより和歌をこのみ給へはいまも此道をまもり給ふ。

たき〳〵をおへる山人の黒主歌は樵夫のたもさに休めるか所もこうあれ花の陰なれは其さまはいやしなから心あるに似たりと也志賀黒主ともいふ

圓城寺の地主なりと也仁明の始めつかたより寛平の比迄存生す猶委

おもひ出て戀しき　此集戀の四には人しるらめやと有心は奥に註

かゝみ山いさ立よりて　鏡山といへはとて年へぬる我顔のうつるへきにはあられとかゝみといふ名に付て立よりて老のるか見てゆかんと也遍昭より黒主迄六人を近き世に其名きこゆると云

このほかの人々の名　前に出せる六人の外に其名世にきこゆる人々もほかれと六人の人々には及ましくみつから歌とのみ思へと歌のさまはしるましきと云

おほとものくろぬしはろのさまいやしいはゝたきゝをおへる山人の花のかけにやすめるかことし

おもひ出て戀しき時はつかりのなきてわたると人はしらすや

かゝみ山いさ立よりて見てゆかんとしへぬる身は老やしぬると

このほかの人々りの名きこゆる野へにおふるかつらのはひゝろこりはやしにしけき木の葉のことくおほかれと歌とのみれもひて其さまはしらぬなるへしかゝるに今すへらきのあめのしたしろしめすことよつのときこゝのかへりになんなりぬる

かゝるに今すへらきの　延喜此集を選ぜられしことはりをのへたり皇　天皇とも當上古にはたふとみてみこと〳〵申す人の世となりて後すへらきと申す　あめのしたしろしめすとは御宇とかく天下を知玉ふ事也寛平九年御とし十四にて御位につき玉ふよつのときこゝのかへりとは四時九回也御位につきたまひて九年めに此集をえらはせ玉ふ御とし三十二なり聰明叡智にれはしまして萬葉より此かた選集相續する事なきを今選ひて後代の龜鏡となし玉ふ萬葉は上古

の集にて珍重すべきなれと世あかり人もすなをにして歌のさま今の世にあはぬ事なれ和歌をまなけんには此集を見あきらめて本とするにはしくへからす此中にとりて寛平以後の人の樣子をこひねかふへきよし定家卿も口傳にのせられき口伝

おほんうつくしみのなみ　延喜のあまれき

あまねきおほんうつくしみのなみ八島のほかまてなかれひろきおほん

御慈愛八島のほかまて流布すると云御

めくみのかけつくは山の麓よりもしけくおはしまして

慈愛と書八島は日本國をいふ也民に慈愛の御心日本國の外までもあまれくといふ心也

ひろき御めくみのかけ　ひろく萬人をめくみ給ふ事は筑波山の陰よりもしけく數たほきと也筑波山は陰しけき山に云

「つくは山このもかのもに陰はあれと君かみかけにます陰はなし此歌にてかける也此面彼面とも此方彼方ともかく眞

名序には仁流三秋津洲之外二惡茂三筑波山之陰一とかけり秋津洲も日本國の名也是も君の仁惠を嘆美していへる詞也此詞

名譽なるゆへに公任卿の則詠にのせられたり此句絶妙也今も和歌の序をかゝは此詞をおもはへてかくへしと也此詞淑

望かきかたし父長谷雄卿子息の名をかりてかくかと云あまり名譽の文章なれはなり八嶋とは日本紀神代卷上に淡路

大日本　豊秋津洲　伊與嶋　筑紫洲　壹岐　對馬　隠岐　佐渡これをいへり筑波山の麓とは常陸國にある山

也上に陰とあれは麓とかける也八嶋の條に御うつくしみの波といへる心はへとおなし

よろつのまつりことを延喜の帝萬機の政九きゝ給ふいとま諸事を捨給はぬあまりに萬葉集のあとをつきすたれたる選集をおこし給ふと也

よろつのまつりことをきこしめすいとまもろ〳〵のことをすて給はぬあまりにしへのことをもわすれしふりにしことをもおこし給ふとていまも見るなはしのちの世にもつたはれとて延喜五年四月十八日に大内記きのとものり御書の所のあつかり紀の貫之さきのかひのさう官

ツキ　チヂコスタレタルヲ
櫛レ絶　興レ廢　古語也

いまも見そなはし　今も見給ひ後の世にも

傳んとて延喜五年四月十八日に此四人に仰出されて萬葉にいちぬ古き歌選者の歌をも挙らしめたまふとなり

友則は當集秋の部までの選者にて身まかりぬ「誰にか見せん梅花」「誰ための錦なればかなと名歌と也貫之は初瀬の觀

音に申子なれは常にはつせにまうつと也「人はいさ心もしらすの歌此ゆへと也定家卿百首の色紙にも此歌をかゝれた

る名歌なるべし「櫻ちる木の下風の此集のゝちによめるにや拾遺集に此歌いれり躬恒は「春のよのやみはあやなし「我

宿の花見かてらにの歌忠峯はもと定國の大將の隨身なるに「有明のつれなく見えしの歌仕りて公方のみやつかへ人と

なれる名譽たるうへに此集の選者となる冥加といひ高名比類なき事也「春たつといふはかりにやみよしのゝうた是も

當集の後によめるにや拾遺の卷頭にいれり是亦高名也公任卿の九品の上に此歌人丸のほの〳〵とあかしのうらの歌と

二首を出されたり四人の選者は時にとりて此道の達者なれは職位にかゝはらす其選に應したる也されと選定する事は

貫之一人か所爲也此集は大うちの承香殿の東の御殿にて選す和歌所とて後代にかるゝも此例とかや此集延喜七年十

三年等の歌をいれらるゝによりて五年四月十八日は仰せをうけし始めにて奏聞は後年の事とう俊成卿の說に基俊云四

月十八日上奏の日也後の歌いる事は優美なるにたへすして追いれらるゝよしとう

おふしかうちのみつねう右衛門の府生みふのたゝみねらにおほせられて

萬葉集にいちぬうたみつからのをもたてまつらしめ玉ひてなん

より此集の部立也梅

おかさすは春部也

「鶯の笠にぬふてふ

梅花折てかさゝむ老

かくるやと梅より前

に立春霞殘雪鶯なと

のうたあれとも梅は

うれかなかにも梅をかさすよりはしめて時鳥をきゝ紅葉をれり雪を見

るにいたるまて又つるかめにつけて君をれもひ人をもいはひ秋萩夏草

を見て妻をこひわふさかやまにいたりてたむけをいのりあるは春夏秋

冬にもいらぬくさ〳〵の歌をなんえらはせ玉ひけるすへて千うたはた

卷なつけて古今和歌集といふ

ごとに色香も艶なるにとりて是一つをあけて梅なかさすよりさかむり次々の部も是に准すへし
郭公を聞　夏部也「時鳥初聲きけばあちきなくぬしさたまらぬ思せらるはた
紅葉をたり　秋の部也　雪をみるにいたるまて　冬の部也
又つるかめにつけて　賀部也「鶴かめもちさせの〳〵ちはしらなくにあかぬ心にまかせはて〳〵ん
秋萩夏草につけて　要をこひ　戀部也引歌に及はす
相坂山にいたりて　離別部也旅人の道祖神に手向する故也
あるは春夏秋冬にもいらぬくさ〳〵の　種々雑　雜旅　哀傷　物名　雜躰　なとの事也部をたつる次第は前後不同なれ
とも大綱をとりて書たる也ちうたは千首はたまきは廿卷也歌は千百首いれたれともき〳〵よきやうに大數をかけりから
の文にも千字にあまりたれとも千字文と銘をいへり和漢の文法これをなし紀氏新選とて貫之えらへる物に自序あり昔
延喜之御宇盛二世之無爲一因二人之有慶一令レ選二萬葉外古今歌一千篇云々然は大數なれとて千首とかく事前後の說おな
し

かくこのたひあつめえらはれ　此集えらはれて歌の數はほくつもりぬれは今は飛鳥河のふちは淵にかはる恨も聞えすして悅ひ斗りあるへきと覩百ないひて上の段々の心を結する也山下水とは絶する流の底砂は數おほくさいはんため也あすか川の瀨になるうらみさ〳〵れ石のいはほとなるよろこひは兩首の歌の心をかけり「世の中は何かつねなるあすか川きのふの淵そけふは瀨となる」我きみはちよにさ〳〵れ石の——
ろれまくら詞　貫之以下選者の歌の事也讖名序に臣等詞とかけ

かくこのたひあつめえらはれて山した水のたえす濱のまさこかすおほくつもりぬれはいまはあすか川の瀨になるうらみもきこえすさ〳〵れ石のいはほとなるよろこひのみうある〳〵き
ろれまくら詞は春の花にはひすくなくしてむなしき名のみ秋のよのなかきをかこてれはかつは人のみ〳〵にをろかつは歌の心にはちおもへ

り枕詞にあらす臣をまくとよむ心は我等か詞也我らか詞句すくなく虛名はかり長きをかこつけれは人の聞耳を恐れ歌道の心に耻思へき也まくらとよみ切て詞は春の花匂ひすくなくとよむへき也春の花は匂ひすくなく　秋の夜はなかきさいはん料也苦卑下したる詞なり
たなひく雲のたちゐ　立居起伏貫之以下の四人此御代にはなしく生れあひて此選集の時にあふ事をよろこふ心也たなひく雲は立居　なく鹿はにきふしさいはん料也此事の時にあへるをなんよろこひぬるさいふまて皆自謙の句つ〳〵き也
人まろなくなりにたれ讖名序にも嗟乎人丸既沒和歌不レ在レ斯哉此ことは〳〵論語子罕篇云文王既沒文不レ在レ茲乎といふ詞をうつしたる也口訣
たとひ時うつりことさりロ訣　世はさま〳〵
うつりかはるとも此歌の文字と〳〵まりなはと也陳鴻か長恨歌傳時移事去樂盡悲來云々この序の此詞公方へむけたる事なとには今の世にはかくへからすむかしはかやうの事おほやうなりしと也序にかきらす歌を拳らんにも詞毎に能く思慮すへしとそ

とたなひく雲のたちゐなくしかのねさふしは貫之らか此世にむまれてこの事の時にあへるをなん悅ひぬる
人まろなくなりにたれとうたのことと〳〵まれるかな
たとひ時うつりことさりたのしひかなしひゆさかふとも此うたのもしあるをやあをやきの糸たえす松のはのちりうせすしてまさきのかつらなかくつたはりとりのあと久しくと〳〵まれらは歌のさまをもしりことの心をえたらん人はれはるらの月を見るかことくにいにしへをあふきていまをこひさらめかも

此うたのもしあるなや　歌の文字也
あをやぎの糸たえすさいはんため松の葉はちりうせすまさきのかつらは長くさいはんため鳥の跡は
久しくさゝまらはさいはんため也むかし黄帝の時倉頡といふ人鳥の足砂にふめる足跡を見て文字をつくりし事也此歌
の文字の絶す久しくさゝまりてちりうせすつたはらは歌のさまをしり事の心をさとりえたらん人は大空の月を見るこ
とくに古をあふきて延喜聖代の今を戀しく思もはさらんやと也古を今をとは古今の二字を取もはへてかきたる心とろ

ふるとしに春立　年内立春
也
としのうちに春はきに　一
年定あるに春のくるは
こゝろ今年いかれとかいは
んと也この歌年の字四有
今はかくはあるましき也
作者元方は業平孫棟梁子
也當集の巻頭面目比類な
き事也
春たちける日　是は立春也
袖ひちてむすひし水　夏む
すひし水の程なく氷れる
を春立けふの風にとくると云也月令云立春日東風解氷といへる心朗詠云池氷東頭風波解とも云「此歌の心こもる所
なしひちてはひたして也此詞當集にはほし後撰にすくなし拾遺になし今の世に詠すへからすとそ俊成卿定家卿もいへる
業説
題しらす　誠にしらぬも有知てかゝぬも有へし後撰には題不知よみ人もと有拾遺には當集に記なし口訣
よみ人しらす　是も誠にしらぬも有高位の人をは隠してかゝす下位の人をは名をあらはさす當集何も如此
春かすみたてるやいつこ　霞の立たるはいつくう吉の山には雪の降物を春の立といふもまことしからすとかめてよめり此たてる
やいつこといふ詞尤優也と古人いへり三吉野の芳野の山とつゝけたるは同し事をかされたる也三吉野は郡の名也よしの山
は其内の山也春霞のかもと清てよめると也一説は聞よからすにこりてよむへし山櫻秋紅葉なとのごとし

古今和歌集巻第一

春歌上

ふるとしに春たちける日よめる　在原元方

としのうちに春はきにけり一年をこそとやいはんことしとやいはん

春たちける日よめる　紀貫之

袖ひちてむすひし水の氷れるを春たつけふのかせやとくらん

題しらす　よみ人しらす

春かすみたてるやいつこみよしの〳〵よしの〳〵山に雪はふりつゝ

二條のきさきの春のはしめの御うた　高子中納言長良卿女清和后陽成院世后也

雪のうちに春はきにけり鶯のこほれるなみたいまやとくらん

よみ人しらす

題しらす

梅か枝にきゐるうくひす春かけてなけともいまた雪はふりつゝ

雪の木にふりかゝれるをよめる　素性法師　良峯宗貞子歳八頭少將

春たては花とや見らんえんそ月之しら雪のかゝれるえたにうくひすのなく

題しらす

こゝろさしふかくそめてしおりけれはさえわへぬ雪の花と見ゆらん

讃人しらす

ある人のいはくさきのおほきおほいまうちきみ　太政大臣也のうたなり

素性法師　素性は遍昭の俗の時の息也法師のよみやう世流布に出家をは皆ほうしと云勅撰なとには皆ほつしとよむへし

春たては花とや　春立くれは花とや見るらん雪の降かゝる枝に鶯の鳴と也見らんは見るらんといはゝ文字おほかれはるか畧したる也見らんといふ詞萬葉におほくよめり　昌蔭案抄略註

心さしふかくそめてし　花に心をふかく染て折れは消やらぬ雪のはなと見ゆると也折けれはを一説に居けれとよむへしといふ折けれはにて下句の心たかふへからす物思ひをれはともうちふれをれはともよめと此歌は居の詞うけられす折けれはを用ゆへし　昌蔭案抄略註

さきのおほきおほいまうちきみ　是は忠仁公の事也白河の太政大臣ともいふ近代は前官を前といふ是は前官にあらす其頃忠仁公昭宣公の外前後に太政大臣なし仍忠仁公を前といひ昭宣公を後と號す

雪のうちに春はきに　歌枕說

古年の雪はいまたきえぬに日數は春になれは淚の氷雪にとられて有し鶯もなをか時待出て花に木傳ふ心もつきて淚の氷もとけねらんとよめり鶯の氷れる淚既々あれと鳴といふによりて淚といひ淚あれは氷ると知へきと也

梅か枝にきゐる鶯　圖註の義

春になり梅か枝に鶯は來居てなけとも猶冬のやうに雪はふると也春かけてとは春に成て冬の近いをいへり

春たては花とや　春立くれは花とや見るらん雪の降かゝる枝に鶯の鳴と也見らんは見るらんといはゝ文字おほかれはるか畧したる也見らんといふ詞萬葉におほくよめり　昌蔭案抄略註

心さしふかくそめてし　花に心をふかく染て折れは消やらぬ雪のはなと見ゆると也折けれはを一説に居けれとよむへしといふ折けれはにて下句の心たかふへからす物思ひをれはともうちふれをれはともよめと此歌は居の詞うけられす折けれはを用ゆへし　昌蔭案抄略註

春の日のひかりに　春の宮の御めくみにあへる我なれとかしらの雪となるろ陀しゝと只今ふる雪を老て白髮にようへよめる也わひしきは近代よむへからすとそ

霞たちこのめもはるのすみの立て春の雪ふれは花のなき里も花のちるとも也木の葉のめくみ出るを木月萌といふを木日も春のといひなせる也春といはん料に云つゝけたり

春やさき花やをそきと聞わかんうくひすたにもなかすもあるかな　依春宮母儀也

春やさき花やなをそき　春のさく立たるか花の遲く咲かされほつかなきに鶯のなかは春になりて花の遲く咲と思ひ分ん其鶯もなかすあると也春に成たれと鶯もなかす花もいまたさかすと待陀る心也春の立は日數に知へけれは春の疾きさも花の遲きさもいふへきにあられと歌はかやうにはかなく讀事いみしき也　昌蔭註密勅の略義

春きぬと人はいへとも　春きぬと人はいへとも鶯の鳴ぬほとは春にはあらしと思ふといへる是も鶯を證跡にしていへるはかなき事也

二條の后のとうくうのみやすん所ときこえける時正月三日おまへにめしておほせ事あるあひたに日はてりなから雪のかしらにふりかゝりけるをよませ給ける　依春宮母儀也　庶務を召し仰有也

春の日のひかりにあたる我なれとかしらの雪となるろわひしき

雪のふりけるをよめる　ふんやのやすひて　文屋康秀號文琳三河掾先祖不見

霞たちこのめもはるの雪ふれは花なきさとも花ろちりける

きのつらゆき

春のはしめによめる　藤原のことなを　言直安繩三男内豎因幡權掾

春やとき花やをそきと聞わかんうくひすたにもなかすもあるかな

みふのたゝみね

春のはしめのうた

春きぬと人はいへともうくひすのなかぬかきりはわらしとそ思ふ　七條后溫子少納言

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　源まさす　宇多　當澄近院ノ右大臣息

谷風にとくる氷のたに風にとくる氷の隙々打出る波は春の初花にてあるかと也波やと疑ふにて花かと云心也谷風は東風也毛詩の註に有花のかを風のたより　梅は匂ふに鶯のきこえは遲しと思ふ由也梅かゝの風に匂ひゆけは風の便といふたくへてはくはふる心也

谷風にとくる氷のひまことにうちいつる波や春のはつ花

紀とものり

花のかを風のたよりにたくへてうくひすさそふしるへにはやる

大江千里　音人男兵部大丞伊豫權守

鶯のたによりいつるとゐなくは春くることをたれかしらまし

在原棟梁　業平男

鶯のたによりいつる　鶯の谷より出る聲は春のくるしるしなれは鳴すは誰か春をしるへきと也

春たてと花も匂ひぬ山里は物うけに鶯のなくと也物うかるとはうきと云心はかり也物くさきともいふ心也

春たてと花も匂はぬ山さとはものうかるねにうくひすのなく

題しらす

よみ人しらす

のへちかくいへゐしをれは　野へ近く家住すれは鶯の聲を朝ことに聞と悅ひたる也家居也しは休め字也あさな〳〵は朝〳〵也

かすか野はけふはなやきそ　春は野を燒事のあれは野遊の人の春日野はけふはなやきそ妻も籠れりといへる歌也若草のつまとは草の萠出るはしめをいふ是を人の妻によせて若草の妻とつゝけたり古き和歌式に妻を若草と云然は若草の妻は重詞也

春日野のとふひの〳〵もり出てみよいまいくかゆりてわかなつみてん

みやまには松の雪たにきえなくにみやこはのへのわかなつみけり

あつさゆみをしてはる雨けふふりぬあすさへふらはわかなつみてん

仁和のみかとみこにおはしまし〳〵ける時に人にわかな賜ひける御うた

きみかため春の野に出て若なつむわかころもてに雪はふりつゝ

當集撰せらるゝ時歌をめす事也

歌奉れとおほせられし時よみて奉れる

つらゆき

春日野の飛火の　春日野に烽火野といふ有其野を守る者を野守といふ一說春日大明神御影向のはしめ飛火をあけて瑞相をあらはし玉ひけれは飛火野と云是は春日緣起に分明に有とかや國史に大和國春日野に烽をあけて平城に通すと註せり高山にこそ烽火をあくへけれ野にてあれは緣起の說實儀たるへき歌也

みやまには松の雪　深山には松の雪たに消ぬに都は春めきてのへに若菜つむと也遠山の雪は松を眺望の興ぞする和漢の流例也詩に滿山松雪　驪ニ誰人一と云諸木あれと松の雪は閑よき也

あつさゆみをして　春雨のけふ降てさはりとなる明日さへふりて晴すはゐれ〳〵若菜をつまんと也弓をはをしてはれは梓弓押て春雨とつゝけたりさへは副の字也あすもといふ心也

仁和のみかと　光孝天皇也小松の帝とも申仁明天皇の御子也古き帝をは年號をつけ奉る春のはしめつかた若菜を便りにて賀をいはふ事有此御歌も賀の御歌也

君かため春の野に　君かためなれは我袖に降雪をしのきて野に出て若菜つむとの御心ざしの深からぬよし也衣袖ともは此御歌心もふかく殊勝の御詠也

かすかのゝわかなつみ　野

の若菜つみにあまたの人の白妙の袖をうちはへて行さ也白妙は白きをほめたる詞也（柳註密默之論）ふりはへて打はへて同し詞也袖うちふりてといふもあなかちたかはす振延と書

かすかのゝわかなつみにや白たへの袖ふりはへて人のゆくらん

題しらず　在原行平朝臣（阿保親王一男　正三位中納言）

春のきる霞のころもぬきをうすみやまかせにころみたるへらなれ

寛平御時きさいの宮の歌合（の歌イ）によめる　源宗于朝臣（右京大夫正四位下　是忠親王子　光孝帝孫）

春のきる霞の衣　春の着る霞の衣のぬきのうすきによりて山かせに亂るゝと也（國註の略）霞の衣は霞の立わたれるを衣にたとへたり絹布なるにぬきの濃きかよはき物なりへらなれ今は詠すへからす

ときはなる松のみとりも春くれはいまひとしほのいろまさりけり

歌奉れとおほせられし時よみて奉れる　つらゆき

きさいの宮の歌合　背の歌合は左右に方を分て時のうたよみに歌を詠せしめて歌を番（ツガ）ひて能否にかゝしめ其日に至りて講師是をよみあくるを左右に聞て勝負を付し也其儀式種々の風流なし洲濱を作り木草をうへ金銀にて花をつくりて此花葉なとに歌をかく事もあり如法の大營なり白河院の御時までは此非有其後は絶たり

わかせこかころもはる雨ふることにのへのみとりいろまさりける

ときはなる松のみとりはうすみとりの柳の色也柳かは柳（ミトリ）に緑め糸をよらせて白露を玉につらぬきかけたる也（國註之論）淺みとりはうすみとりの柳の色也柳かは柳（ヒイロクリスダウ）哉也詩にも背絲繰出陶門柳なと有

あをやきのいとよりかくる春しもろみたれて花のほころひにける

もゝちとりさへつる　古今

三島の一也

をちこちのたつき　たつきもしらぬとは便も知ぬと云よふこ島は三島の一なり（譯口訣）

あをやきのいとより　青柳の糸みたるゝ比の春に花のほころひぬるさま也糸のみたるゝといふに付て花のほころひぬると云

春くれはかりかへる也　鴈

の歸るに白樂の道行つゐてに越へゆきたる人にこゝつてやせむと也蘇武か鴈書を題跡として也（柳註之論）道行ふりは道ゆかん次手也道行觸と書ふりふれ五音通用也越前越中越後を三越路といふ

春かすみたつを見捨　霞の棚引還山の美景なと心なく見捨て行鴈は花咲ぬ里に住ならへるかと也

おりつれは袖こそ匂へ　枝折つる我袖の匂ふを花の有とやこゝに螢のなくと也

背やきは背やなきといふへきを中略したる也春しもそは春そ也

あさみとりいとより　春の柳に緑（ミトリ）め糸をよらせて白露を玉につらぬきかけたる也（國註之論）淺みとりはうすみとりの柳の色也柳かは柳（ヒイロクリスダウ）哉也詩にも背絲繰出陶門柳なと有

もゝちとりさへつる　古今

三島の一也

をちこちのたつき　たつきもしらぬとは便も知ぬと云よふこ島は三島の一なり

春くれはかりかへる也　鴈

の歸るに白樂の道行つゐてに越へゆきたる人にこゝつてやせむと也蘇武か鴈書を題跡として也（柳註之論）道行ふりは道ゆかん次手也道行觸と書ふりふれ五音通用也越前越中越後を三越路といふ

春かすみたつを見捨　霞の棚引還山の美景なと心なく見捨て行鴈は花咲ぬ里に住ならへるかと也

おりつれは袖こそ匂へ　枝折つる我袖の匂ふを花の有とやこゝに螢のなくと也

あさみとりいとよりかけて白露をたまにもぬけるはるの柳かな　僧正遍昭（俗名良峯宗貞　大納言安世子）

題しらす

もゝちとりさへつる春は物ことにあらたまれともわれろふりゆくをちこちのたつきもしらぬ山中にたほつかなくもよふことりかな

かりのこゑを聞てこしへまかりける人をおもひてよめる　凡河内躬恒

春くれはかりかへるなり白雲（雪イ）の道ゆきふりにことやつてまし

歸鴈をよめる　伊勢（大和守淵薩女　七條后女房）

春かすみたつを見すてゝゆく鴈は花なきさとにすみやならへる

題しらす　よみ人しらす

たりつれは袖こそ匂へ梅の花ありとやこゝにうくひすのなく

いろはりもかこそ哀さ　色ゆ　いろはりもかこそけりあはれとれもほゆれたか袖ふれし宿の梅ろも
香何れもなれと取分香は　宿ちかく梅の花うへしあちきなくまつ人のかにあやまたれけり
猶あはれに覺れは是は誰　梅の花たちよるはかり有しより人のとかむるかにそしみける
袖ふれし宿のうめろと也
あはれとは愛する心也隣　梅の花をおりてよめる
字のあはれ也期詠但憐　東三條の左のおほいまうち君源常嵯峨源氏
大慶萬株梅なと云憐むも
愛し加白き心なり漢仙記
に銀公の袖の香梅花にう　うくひすのかさにぬふてふ梅の花おりてかさゝん老かくるやと
つりて匂ひをとゝめたり　題しらす　素性法師
といへりおもほゆれの詞　よろにのみあはれとうみし梅花あかぬいろかはれりて成けり
今は詠すへからすと也長慶　梅の花をおりて人におくりける　とものり
漢仙記銀公事可考　きみならて誰にか見せん梅のはないろをもかをもしる人ろしる
宿ちかく梅花うへし　あち
きなくはかひなくの心也今はあちきなくの詞不可詠
梅の花たちよる斗　花の陰に立よる程に有しに人の君はさとかむるはかりに梅の香の袖にうつりたると也口訣
うくひすのかさに　是は催馬樂に「青柳をかた糸によりて鶯のぬふといふ笠は梅の花かさといふ歌を本にてよめり　青柳之糸花
の姿を笠に似せて鶯や笠にぬひてきるらんと思ひよそへたり笠をはぬふ物なれは柳の糸してぬはせたる也扨此歌は鶯の笠
にぬふといふ梅花を折てかさゝんわか老らくの隱るゝやとゝ也
よそにのみあはれとう　よろにのみ愛して見し梅のあかぬ色香は折て猶まさると也
きみならて誰にか　梅の色をも香をも知人ならてはしらぬを君の外には誰にみすへきそと也心をしらぬ人に物をみするはか
ひなき心也

梅の花にほふ春へば　梅の匂ふ春は暗部山を闇にこゆれと香はかくれすしらるゝと也梅の匂ひを賞して也暗部山ふをにこりてよむ也山城の名所也春へとは春部也春といふ詞也へはたすけ字也むかしへといふも昔といふ詞也但萬葉には春部春敏とも書たり彼集の字本字のごとくかゝぬ邪れほかる　萬葉「うちのほろるさほの川原の青柳けいまは春部と成にけるかも　同十六「春敏さく藤のうらはのうらやすゑさぬる夜そなきころをしれもへは見緒之のゆ也離註時

月夜にはそれとも　闇にこそ物はかくせ月夜にはそれとも梅の花のみゆへきなみえすといふは香を尋てしるへきといはんとてにや白梅にて見わかすといふ心也

春のよのやみはあやなし　春の夜の闇はかひもなし梅花の色なはみせれと香なはえかくさぬといへり　解紫抄之説　あやなしとはたとへはかひなき事をあちきなくなといふやうなる詞也又あひなしといふも同しさまの邪也「あやなくけふや詠暮さん」「何かあやなくわきていはむなといふ同無益無詮何もあやなしとよむ」

くらふ山にてよめる　つらゆき

梅の花にほふ春へはくらふやまやみにこゆれとしるくそ有ける

月夜に梅の花をれりてと人のいひけれはをれるとてよめる　みつね

月夜にはそれとも見えす梅の花かをたつねてそしるへかりける

はるの夜梅の花をよめる

春のよのやみはあやなし梅の花いろこそ見えねかやはかくるゝ

初瀬にまうつることにやとりける人のいへに久しくやとらてほとへてのちにいたれりけれはかのいへのあるしかくさたかになんやとりはあるといひ出して侍けれはそこにたてりける梅花ををれりてよめる　貫之

人はいさ心もしらすふるさとは花ゝむかしのかにゝほひける

水のほとりに梅花のさけりけるをよめる　伊勢

春ことになかるゝ川を花とみてれられぬ水に袖やぬれなん

としをへて花のかゝみとなる水はちりかゝるをやくもるといふらん

家にありける梅の花のちりけるをよめる　貫之

くるとあくとめかれぬ物を梅花いつの人までにうつろひぬらん

寛平御時きさいのみやの歌合のうた　宇多　讀人しらす

梅かゝを袖にうつしてとゝめては春はすくともかたみならまし

人はいさ心もしらす　貫之　は父文屋朝臣の聞の中子なれはつねにまうつる宿のあるしの久しく音つれぬとて恨るをそこなる梅をたりて花ゝむかしの香に匂ふと我心中を花にあらはしいへる玄妙のうた也いさは不知とかけり此歌口訣アリ

春ことになかるゝ川を　春ことになかるゝ川にうつりたる花を見てれられんとするにれられぬ水なれは袖やぬれなんと也　口訣アリ

としをへて花の　鏡は古くなれは曇る物なれと是は年をへて花の鏡となるなる水は花の散かゝるかくもるにてあるさ也歌には兩首ともに花とはかりよめれと詞書に梅とあれは梅也　此歌口訣

くるとあくとめかれぬ　暮ると明ると目もかれす見る花のいつ人のみぬ間にうつろひぬるうと也　晩明（クルトアク）といふめかれぬ物を　は目もはなれぬにや目不離と書夜かれと云ひ又人の中絡るをもかろゝといふ　離駐之義　うつろふは色のかはりてちりかたになる　おをいふ　衰（ウツロフ）の字也此歌の詞書に梅花のちりけるをとあれは是は衰ひて且散とみゆ

梅かゝを袖にうつして　香を袖に移（ウツ）しとゝめたらは春は過るとも此句ひか形見にてあるへきさ也

ちるとみてあるへき　散花のおしきのみにてあるへき物をうたてしき匂ひの袖にとまれるきとの執心也題詩之義　うたてはうたゝ也轉と書たとてと五音通也うたゝ過るなといふはあまりに過るといふ心也此歌はうたてしきといふ心也「花と見ておらんとすれは女郎花うたゝあるさまの名にこそ有けれ」心こそうたゝにくけれそめさらはうつろふ事もおしからましやうたゝ轉題はうたてき事也あまりになといふはすこしそしる心によれる也

素性法師

ちると見てあるへき物を梅花うたて匂ひの袖にとまれる

題しらす　よみ人しらす

ちりぬともかをたにのこせ梅花こひしき時のおもひてにせん

人の家にうへたりける櫻の花さきはしめたりけるをみてよめる

つらゆき

ことしより春しりそむるさくら花ちるといふことはならはさらなん

題しらす　讀人不知

山たかみ人もすさめぬさくら花いたくなわひそわれ見はやさん

又は　里遠み人もすさめぬ山櫻

ちりぬとも香をたにのこせ梅花こひしき時思ひいつへきと也

ことしより春知初る　咲初て春しり初るさくらちるといふ事は習ひうと視育なり

山たかみ人もすさめぬ　春はいつこの山の花をも人の尋るにこの櫻さひしく愛する人もなけれはな佗そ我見でもてはやさんと花を慰めたるなりすさめぬは不レ愛也すさむは愛する心也世俗にはかはる也題出處莊　手遊と書てすさみとよむいたくよみ切てな佗そとよむへし歌の左の又は里遠みは異説あれは捨かたくてかけり當集の歌にあさた所有いつれも是におなし此歌は摂丸大夫家集に山里にまかりけるに花咲たりけるを見てとあり「おふれとゝ駒もすさめぬあやめ草かりにも人のこぬかわひしき」「香をとめてかる人あるをあやめ草あやしく駒のすさめさりけるいつれも駒のくはぬをすさめぬといふ雨ふ

りすさむ荒の字也
山さくら我見にくれ　山櫻
を見に來る折ふしにしも
霞のかくすあやにくなる
さまやと也口訣
染殿の后　は文德の后清和
の母后昌泰三年正月一日
崩七十二太皇大后宮忠仁
公の御むすめ
としふれはよはひはたひ
かめにさせる櫻を后の容
顏美麗なるに比して父自
愛のあまりに老てわれと
見れはものゐもひなしと
よめり此歌文字あまりた
れと聞あしからすかやうにあるは宜き也
なさきの院　は淀河のほた天河原の近所也惟喬親王の山莊也河内交野に有
世の中にたえて櫻の　此歌　斷と不斷との二つの心有斷の心は中〳〵なくはよからんといふ不斷六條宮乳母伊勢物語　は本來なくはの心
也不斷の心は花をゐらふ心猶まされるにや　伊勢物語有此歌「ちれはこそいとゝ櫻はめてたけれうき世に何か久しかるへ
き」ありて世の中はてのうけれはなと返しのやうによめれは業平櫻のちるを執着しだれはとみえたり口訣
石はしる瀧なくも哉　峨々たる岩間よりほとばしる瀧をへたてゝ花のあれは此瀧なくも哉手折て見ぬ人にみせたき志也
見てのみや人にかたらん　人に語るはかりはゐろうかにあるへけれは花を手ごゝに折て家つとにせんと也家つとは土産也世
俗にみやけと云也萬葉に裏と書つゝみてくる物なればいふ也山つと演つと都のつとなどこの物を云聞書

さくらわか見にくれは春かすみみねにもおにも立かくしつゝ
うめとのゝさきのおまへに花かめに櫻の花をさゝせたまへるを
前のおほきおほいまうち君忠仁公
見てよめる
としふれはよはひはおひぬしかはわれと花をし見れは物おもひもなし
なさきのゐんにて櫻をみてよめる　在原業平朝臣阿保親王子
世の中にたえて櫻のなかりせは春のこゝろはのとけからまし
題しらす　よみ人しらす
石はしる瀧なくもかなさくら花たおりてもこん見ぬ人のため
山の櫻を見てよめる　素性法師
見てのみや人にかたらんさくらはな手ごとにおりていへつとにせん

見わたせは柳さくらを　柳はみどりに花はくれなゐに咲ましりて見ゆれは都そ春の錦を織かけたるこさくなると云柳櫻こきまぜてせは混亂したる也掘雜と書柳櫻の咲ましりたるをこきまぜてといふへくもなけれど遠くみれはこきまぜたるやうにあるなり亭子院御息所の歌合に「みゆきふる春日の野への櫻花えこう見わかれこきまぜにして是は雪と花とをこきまする也基綱註略

花さかりに京を見やてりよめる

見わたせは柳さくらをこきまぜて都ゝ春のにしきなりける

櫻の花のもとにて年のおひぬる事をなけきてよめる　きのとものり

いろもかもおなしむかしにさくらめとしふる人ゝあらたまりける

紅れる櫻をよめる　つらゆき

誰しかもとめて折つる春かすみたちかくすらん山のさくらを

歌奉れとおほせられし時によみてたてまつれる

さくらはなさきにけらしな足引の山のかひより見ゆるしら雲

詞の助なり　誰しかもとめて折つるといはんとするに文字のすくなけれはたれかもといふ猶たられはしをぐして誰しかもさいふ然といふ説は僻事也ふるき歌にはかくいたつらなる文字をうふる也然の字ならは誰かしかさそいふへきもとむるか略してとむといふ　兎也「雪くにわかたちまつにもしくもや君きまさすはくるしかるへしもしくもやはもしもといふ詞也古の体也基綱註略

さくらはなさきに　櫻のさきにけり山のかひより白雲の見ゆるさ也さくとほりもなくさはやかにいひくたしたる歌なり足引

の山久かたの空といひつゝくるとばかり心得へし定家卿密勅に足引なさよむ人侍れと只莖ひきさのみ申されきさありとりてよしと一條禪閤御說也かひは峽の字也山のゆきあひ也 御說 よみくせ口傳

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　ものり

みよしの〻山へに咲る　山へに花の白く見ゆるか雪かとあやまたるゝと也

みよしの〻山へにさけるさくらはな雪かとのみうあやまたれける

やよひにうるふ月有けるとしよみける　伊勢

さくらはなはるくはゝれる年たにも人のこゝろにあかれやはせぬ

櫻の花のさかりに久しくとはさりける人のきたりける時によみける　よみ人しらす

さくらはなはるくはゝ　櫻花

きよひ出して春のくはゝりてあるさしたにも人の心にあかれぬかはあかれよと歌たる也顯註密勅に此歌俊賴朝臣家本にあかれやはするを執せられけると俊惡はいひけるとあるを定家卿是は咲にけらしなあしひきのなとやうの櫻花のをきやうにはあらす此歌はさくらはなをよびてたとへはいちへきたらんに春の久しき年たにも人にあかれよとむかひていはんやうに歌へたる詞なれはあかれやはせぬこそ叶ひて侍れ此さくらはなを只のをきやうと同し事に心得てあかれやはせぬはいはれすあかれやはするとこういはめといへる無下に放埒の事也かやうの事をよく心得わくへしといへり同つかひ同しきうた

櫻花としにまれなる人もまちけり

返し　業平朝臣

あたなりと名にこうたてれ

「ことならはおもはすきやはいひはてぬなを世中の玉たすきなる弱多し

あたなりと名にこう　花はちりやすくあたなる名こそたてかくまれなる人をも得れはあたにはなしといへり

けふこすはあすは雪と　花はあたならぬ由をいへれと我けふ來れはこそあたになきやうなれあすは雪と降て消すは有さも花

さは見ましきさ也玄妙の問答と申也口訣

よみ人しらす

ちりぬれはこふれと　櫻のかきりと見ゆれはおるなちは折らすると也口訣

ちりぬれはこふれとしるしなき物をけふころさくらおらはおりてめ

おりとらはおしけにもあるか櫻花いさやとかりてちるまてはみん

れは花のれしきに宿かりてちるまてみんといへり　きのありとも 有朋友則父宮内少輔

あるかは哉なり

さくらいろに衣はふかくさくらいろに衣はふかくめてきん花のちりなんのちのかたみに

ちりなん花のかたみに櫻色に衣はふかく染てきるへしといへり櫻色の衣はれもて白くうらはあか花也れもて白くうら花田色を花櫻といふ也口訣

題しらす

櫻の花のさけりけるを見にまうてきたりける人によみてをくりける　みつね

わかやとの花見かてらにくる人はちりなんのちのこひしかるへき

わかやとの花見かてら　花のちらぬほとは又もとひくへきとおもふにちりなん後そ戀しくあらましといふ花見かてらは花見んためなり此說密口訣

亭子院歌合の時よめる　伊勢

見る人もなき山里のさくらはなはかのちりなんのちのさかまし

見る人もなきやまさとの　人めまれなる山里のさくらに外のちりなん後にさけをしへたるなり源氏に藤の宴のさきのちにと敷られしさくらひと木ふた木と有これ花にをしへたるこゝろなり

古今和歌集卷第二

春歌下

題不知　讀人不知

はるかすみたなびく山のさくらはなうつろはんとや色かはりゆく

まてといふにちらてしとまる物ならはなにをさくらにれもひさまし

のこりなくちるうめてたきさくら花ありて世の中はてのうけれは

此さとに旅ねしぬへしさくらはなちりのまかひにいへちわすれて

うつせみの世にもにたるか花さくらさくと見しまにかつちりにけり

はるかすみたなびく　かすみひく山の花のさかり過

うつろはんとてや色のかはりゆくといへり密勘之義

哀　花のうつろふはちるにあらす盛なる時にかはりて散ぬへき色のつくをいふ白菊の紫にうつろふに同し梅山吹も譬にうつろふなり此歌密口訣

まてといふにちらてし　しはしまてといふにちらすは櫻に思ひます物あらしと也まてといふにはしはしまてといふ也やよやまての心も是也定家卿此歌を本にて「山櫻まてともいはしちるとても思ひますへき花しなけれは」密勘之義

のこりなくちるそ　誰も世中に有て住果ましけれは花の殘なくちるう愛らしきと云はてのうけれはといへる心尤人の思ふへき所也十吟抄歌

此さとに旅ねしぬへし　むしき花のちるまきれに家路を忘れてこの里に旅ねをすへきといふちりのまかひは花の散まきれといへり密勘

うつせみの世にも　空蟬のはかなき世に似たる花さくら哉咲とみれはやかてかつちると也空せみの世ははかなき世をいふうつせみはもぬけをいふ又當果患苦長歌に夏はうつせみ鳴くらしとあれはたゝ蟬の名ときこゆいつれにもうつせいふはむなしきといふ事也うつせみといふも身のなきから也花櫻とは櫻花をうちかへしたる也 羅陛之義「あさみとりのへのかすみはつゝめともこほれて匂ふ花さくら哉」

惟喬親王　文德第一王子母
從五位上紀静子名虎女

さくらはなちらはちら　櫻
花ちらはちれちらすとても故郷人の來てみる事
もと花に述懷の御歌也　栢口訣

そうく　承均せうくなれと
もいなかきなれはかく書
り貫之甥也

さくらちる花の所は　櫻ち
る花の木蔭は春にて有な
から露のふりてきえかた
くすると也　貫之「櫻ちる
木の下風はの同意なる故
に當集にいれさると也櫻
ちるの五文字よむましき
よしあり　此歌栢口訣

花ちらす風の宿り　花ちらす風のやとりを知たる人あらは我にをしへよあまりにつらけれは行て恨むへきにさ也
いさ櫻我もちりなん　いさや櫻我もちりてむ一盛有なは人にうきめやみえなんすれはといへり花の人にむしまるゝなうちや
みていへり　口訣
ひとめ見し君もや　花をそと見て歸る人の又きたりやすへきけふは待て來すはちらはちれと也

僧正遍昭によみてをくりける　これたかのみこ

さくらはなちらはちらなんちらすとてふるさと人のきても見なくに

雲林院にて櫻の花のちりけるをみてよめる　うらく法師紀望行孫行庶子

さくらちる花のところは春なから雪ふりつゝきえかてにする

櫻の花のちり侍けるを見てよみける　うせい法し

花ちらす風のやとりは誰かしる我にをしへよゆきてうらみん

うりん院にて櫻の花をよめる　うらく法し

いさ櫻我もちりなんひとさかりありなは人にうきめ見えなん

あひしれりける人のまうてきてかへりにけるのちによみて花にさして遣しける　つらゆき

ひとめ見しきみもやくると櫻はなけふはまち見てちらはちらなん

山のさくらを見てよめる

春かすみなにかくすらんさくら花ちるまをたにもみるへき物を

こゝちりこなひてわつらひける時に風にわたらしとてをろしこめてのみ侍けるあひたにおれる櫻のちりかたになれりけるをみてよめる

藤原よるかの朝臣（内大臣高藤女典侍）

たれこめて春の行衛もしらぬまにまちしさくらもうつろひにけり

東宮雅院にて櫻の花のみかは水にちりてなかれけるを見てよめる

すかの〳〵高世（菅野延喜比人）

枝よりもあたにちりにし花なれはおちても水のあはとこそなれ

さくらの花のちりけるをよめる（見れイ）（よみけるイ）

つらゆき

ことならはさかすやはあらぬ櫻花見るわれさへにしつこゝろなし

春かすみなにかくす　花の名殘にしきなも思はて只隱すへき事とかくすあやにくなる霞のありさまや散間なもみん物なと也此歌貫之也イホふかやふさあり

たれこめて春の行ゑ　たろしこめて春ともおもはて有けるに待し櫻のさてもうつろひたる事よ此春は、花をみて打過たるなと思へるよし也乖籠と書たるしこめて也（論註義）

雅院　待賢門の内中御門の北壬生の東也御溝水と云（ミカハ）

やり水をかしつく心也

枝よりもあたに　あたにちる花なれは落ても水のあはとなるといへり

ことならはさかすやは　かくのことくならはさかすあれ花のちるをみる我さへにしつかなる心なきにといへり（論註義）

くのことくならは也さかすやはあらぬは咲すあれといへりしつ心なしはしつかなる心なしといへり　後撰に「ことならは折つくして櫻花わかまつ人のきても見なくに

櫻のことのくちる物はなしと人のいひけれはよめる

さくらはなとくちりぬともおもほえすひとのこゝろ風も吹あへぬ　紀のとものり

さくらの花のちるをよめる

久かたのひかりのとけき春の日にしつこゝろなく花のちるらん

春宮のたちはきのぢんにて櫻の花のちるをよめる　藤原のよしかせ好風散位正師子

春風は花のあたりをよきてふけこゝろつからやうつろふと見ん

櫻のちるをよめる　凡河内みつね

雪とのみふるたにあるをさくら花いかにちれとか風のふくらん

さくらはなとくちりぬ　花はさく頃ときちる頃ちる物なれはとくちりぬともおほえす櫻の如くとくちる物はなしと思へるは人の心を風も吹ぬにといへり風も吹あへねはふかぬ也北枕帋口訣

久かたのひかりのと　空の日かり長閑なる春の日になとて花はしつかなる心もなくちるらんといへり

久かたとは空の物をつゝくる詞也鬼魂か式に月をは久堅といふ天をはなかとみといふ月を久堅とたしかにいふ証歌常集十八卷に桂に伊勢かすめる時に七條中宮の間せ賜へる御返事に「久かたの中におひたる里なれは光りをのみそ頼むへらなる中宮を月にたとへ奉る故に光なたのみ奉るといへり帋口訣

太刀帯は　立巻の始つかた近衛府の鞬（トモガラ）を分て巻宮の警固とす其後帯刀に補せらるゝ也弓箭をもて警固し奉る也左右方に有

北老をは先生といふ也

春風は花のあたり　風は花のあたりなのそきてふけ心からうつろふと見んと心なき風に人に物いへるやうにいへりよきては（歴史之義）のそきてといふ也心つからは心から也あまつ沖津なとのことく津の字をくはへたりうつろふは花も何も色のなさろへかはりゆくないふ言葉（此抄）にはちるをとあるを歌にうつろふとあれはちるをもうつろふとよむへきにこそ

雪とのみふるたに　雪のことく花のちるたにむしく思はるゝに風のはけしく吹はいかなる事ろと也

山高み見つゝわかこし路　ゆくにのぼりて歸りまうてきてよめる　つらゆき

らす見ねであれはさて風の心あるべきにあられと跡をゝもひやりていかに心に任せてちらすらんさ也

山高み見つゝわかこしさくら花風はこゝろにまかすへらなり　一本大伴くろぬし黒主園城寺院主

題しらす

はるさめのふるはなみたか櫻はなちるをおしまぬ人しなけれは　つらゆき

はるさめのふるは涙か　人ことに花のちるをゝしむ思はゝはなけれは春雨の降は涙かさ也人しのしは詞の助也

亭子院歌合歌

さくらはなちりぬる風のなこりには水なきそらに波そ立ける

さくらはなちりぬるかぜにさはきて空に波の立さみえたる也　日映

ならのみかどの御歌　平城天皇大同天子

ふるさと成にしならのみやこにも色はかはらす花はさきけり

ならのみかどの　平城天皇大同天子定家公自筆に付られたり

ふるさと成にしならの　古里となるならの都にも色はかりはかはらす花はさきたるこ也　日映

春のうたとてよめる　よしみねのむねさた

花のいろはかすみにこめてみせすともかをたにぬすめ春のやま風

花のいろは霞みに　あやなく霞みの花の色をは見せすとも香をは山かせぬすみ出せといへりこれは當集に筥の歌に「花のゆは雪にまゝりてみえすとも香をたに匂へ人のしるへく是を本とす」　日映

寛平御時きさいのみやの歌合のうた

花の木もいまはほり　春のたちゆけはうつろふ色に人の習ひて見えこれば今はほりうへじと花をうらむる由也花の木は櫻也ロ訣

春のいろのいたり至ぬ　春の至り至らぬ里はあるまじきに咲さかざる花の見えぬると不審したる也

みわ山をしかもかくす　三輪山をさもかくす霞哉人にしられぬ花や咲て有なちんと也しかもかくすかは然も也さもかくすかと

いふ也簪紐抄義也

いさけふは春の山へに　引卒けふは春の山へにましばりて有なん暮なばなかるへき花の陰かはと也いさはさうふ心也なけのけふ清てよむ也「なけの紅葉のよるのひかりかも」「あれはありとなけらのように見し人をさよめるも心なし」題目之義也定家卿常にはなけのなさけと

いふはなをさりといふ心也習日秘

いつまでか野へに心　いつまてかのへに心のあくかれんすらん花のかきりあるうらめしきちらてあるならは千世もあかす

常見で有へきといへりあくかるゝはあちこちゆく也浮岩と書

素性法師

花の木もいまはほりうへじ春たてはうつらふいろに人ならひけり

よみ人しらす

題しらす

春のいろのいたりいたらぬ里はあらしさけるさかさる花のみゆらん

つらゆき

春の歌とてよめる

みわ山をしかもかくすかはるかすみ人にしられぬ花やさくらん

常康親王仁明皇子

うりん院のみこのもとに花見に北山のほとりにまかれりける時に

よめる

そせい

いさけふは春の山へにましりなんくれなはなけの花の陰かは

春のうたとてよめる

いつまてか野へに心のあくかれん花しちらすは千代もへぬへし

春ごとに花のさかり花はあたなれと毎春にさけは盛りあらんつらめともゐひ見ん事は命にて有といふ人間不定なれもひてよめり

花のことよのつれ　花はちりても又さけは花のごとく世の常住ならましかは過つるむかしは又もかへり來へきといふ「賢のをたまきくりかへしなとの心也口訣

ふく風にあつらへ　花をちらす事のせんかたなけれは世の習ひを思ひ出たして吹風にあつらへ付る物ならは此一本はのうけといふへきと也是は花ともいはて此一もとといへり「吹風も心しあらは此春は櫻をよきてちらさならんとある此歌を讀うつしたる也此は霞と慣に讀り

まつ人もこゐ物故に　待人もこゐに鶯のひとくとなきつるか空たのめなれは今はと花を折たるといへり「ことならは折つくしてん梅花我まつ人のきても見なくにとある同心也

さく花はちくさなから　咲花はいつれもあたに見ゆれと春をさりて誰も恨果たるものはなきといへり人を思ふやうに花をあたなれどといひ春を恨はてたるなと心を盡していへりちくさは千種也さま〳〵に也伊物にもみちのちくさに見ゆるといふは色々なるといへり是は櫻ひとつにとりてかれこれをちくさとよめり次の歌春霞色の千種に同心也

たいしらす

春ことに花のさかりは有なめとあひ見んことはいのちなりけり

花のことよのつねならはすくしてしむかしは又もかへりきなましふく風にあつらへつくる物ならはこのひとものはよきよといはまし

まつ人もこゐ物ゆへにうくひすのなきつる花をおりてけるかな

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　藤原おきかせ　興風遠成子清成四代孫

さく花はちくさなからにわたなれとたれかは春をうらみはてたる

讀人不知

春かすみいろのちくさにみえつるはたなひくやまの花のかけかも

在原元方

霞のたなひく色のさま〳〵見えつるは花の陰のうつろひたるかと也

かすみたつ春の山へ　かすむ山邊は遠く見ゆれと風にさそはれて花の匂ひくると也

霞たつ春の山へはとほけれとふきくる風は花のかろする

花みれは心さへにそ　あたなる花に心をうつすは實法になき心なれはさのみ花をおしむ心を色には見えト人のしるにと也

うつろへる花を見てよめる　みつね

うくひすのなくの〳〵こゑにきてみればうつろふ花にかせろ吹けるうくひすのなくの〳〵こゑにきてみればうつろふ花にかせろ吹ける

花みれは心さへにろうつりけるいろにはいてし人もころしれ

題しらす　よみ人しらす

ふく風をなきてうらみよ鶯はわれやはなに手たにふれたる

典侍沿子朝臣　參議章綱女或孫

花に手ふれてもちらすと也口訣

ちる花のなくにしとまる物ならはわれうくひすにおとらましやは

仁和中將のみやすん所の家に歌合せんとてしける時によめる　藤原後蔭　中納言有穆子藏人右少將

花のちることや侘しきはる霞たつたのやまのうくひすの聲

春かすみ色のちくさ　山の霞のたなひく色のさま〳〵見えつるは花の陰のうつろひたるかと也

かすみたつ春の山へ　かすむ山邊は遠く見ゆれと風にさそはれて花の匂ひくると也

花みれは心さへにそ　あたなる花に心をうつすは實法になき心なれはさのみ花をおしむ心を色には見えト人のしるにと也

うくひすのなくの〳〵こゑにきてみれは　のへことに鶯の鳴もことはりにて有けるようつろふ花に風さへ吹ぬると也

ふく風をなきてうらみよ　鶯は風をなきてうらみよ我は花に手ふれてもちらすと也口訣

ちる花のなくにし　はかなき鶯の鳴こゑ哉散花のさまる物ならは我ゝとゝろへきかさ也劣と書

花のちることや　立田の山の鶯の聲は花のちる事か侘しさにこそなくらめと也春霞は立田といはんため也

こつたへはなのか羽風　なのか羽風にちる花を誰かしわさにおほせて物わひしけにおほくはなくうさいへり歌には何のなくさも見えれと例の言書にゆつる此葉にたくひおほしこゝらはおほく也億多と書みる物聞物に付ていひ出せるよし也

しるしなきれをも　花のちるをなきさむるしるしのなきはかれて鶯の知へきをこしはしめたる事かとなり

駒なめていさ見に　花のちる頃いかに故郷は雪とのみちるらんと思ひやりていさ駒ならへて思ふこち見にゆかんさいへり駒なめては駒ならへて也うちつれたる由也萬葉に駒並と書屬詩書勸

ちる花を何かうらみん　世のならひをれもひ取てちる花をもうらむましきさ也

花のいろはうつりに　花さかは尋れ見るへきと思ひつるにいたつらに我身世にふる事の隙なく打過るさに長雨さへ降ねれは花の色のうつろひぬると也下の心はいたつらに我身世に人をうらみかこちうちなかめ過る間に花の色なりしかたちのなさろへぬると我身を花によそへてよめり

鶯のなくをよめる　うせい

こつたへはなのか羽風にちる花をたれにおほせてこゝらなくらん

鶯の花の木にてなくをよめる　みつね

しるしなきねをもなくかな鶯のことしのみちる花ならなくに

題しらす　よみ人しらす

駒なめていさ見にゆかんふるさとは雪とのみこそ花はちるらめ

ちる花をなにかうらみん世中にわか身もともにあらん物かは　小野小町　出羽郡司女　仁明時承和比人

花のいろはうつりにけりないたつらにわか身世にふるなかめせしまに

仁和の中將のみやすん所の家に歌合せんとてしける時によめる　うせい

れしさおもふ心は糸に　れしさ思ふこゝろは糸によられよちる花をつちぬきさゝむへきにさ也心緒さいふ詞あれは心はいさにさとよす

あつさ弓はるの山へ　春の山へをこえくれは道もさりやらす花のちるさ也花を女によそへていへりさりあへすは過やらす也不致なり

春の野にわかな　若菜つみにさて春の野に出たる物を故花を見て道まさひたるさ也若菜つみえぬ心也ちりかふはちりまかふ也

春つめは若菜さいふ七日はかりにかきらす　聞記口訣

やさりして春の山へ　うつゝにある事を夢にはみる物なれは花のちるさ見ゆるさなり

ふく風さ谷の水さし　いつくさもしらぬ花の谷川に流れ出たるを見て花に風はうき物なれさ風の川谷にちらさすはいかてか深山かくれの花を見るへきさ也見ましやは見ましき也

おしとおもふ心はいとに　おしとおもふ心はいとによられなんちる花ことにぬきてとゝめん

しかの山こえに女のおほくあへりけるによみてつかはしける　つらゆき

あつさ弓はるの山へをこえくれはみちもさりあへす花ろ散ける

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

春の野にわかなつまんとこし物をちりかふ花に道はまとひぬ

山寺にまうてたりけるによめる

やとりして春の山邊にねたるよは夢のうちにも花ろちりける

寛平御時きさいのみやの歌合のうた

ふく風と谷の水としなかりせはみやまかくれの花を見ましや

志賀より歸りけるをうなともの花山にいりて藤の花のもとに立よりてかへりけるによみてをくりける　僧正遍昭

よろに見て歸らん　よそに見捨て歸らん人にはひまさはれよ枝はれるとも
家に藤花さけりけるを人のたちとまりてみけるをよめる
　　みつね
わかやどにさける藤なみ立かへりすきかてにのみ人のみるらん
題しらす　　よみ人しらす
いまもかもさき匂ふらんたちはなのこしまのさきのやまふきのはな（可用之云々書脚）
春雨に匂へるいろもあかなくにかさへなつかし山ふきの花
やまふきはあやなさきそ花みんとうへけん君かこよひこなくに
よしの川のほとりに山吹のさけりけるをよめる
　　つらゆき
しつみしも忘れぬ物をこりすまに身をなけつへき宿の藤なみ（源氏）
いまもかも咲匂ふらん　むかしにいまもかはらす橘の小島の崎の山吹の花咲匂ふらんといへり橘の小島崎山城の名所也宇治川にあるにや或抄云山吹は醉醉（ドヒ）なり欺冬を山吹といふは誤也本草欺冬は蹈（フキ）なり朗詠に「欺冬誤綻（テホコロブ）ノ春春風」と清慎公醉醉（ドヒ）を誤ていふにや此歌此歌口訣
春雨に匂へる色も　雨に色もうるはしく見あかぬに香さへなつかしき山吹の花と也長恨歌に梨花一枝帶（タリ）ノ春雨（ノヲ）さあるおなし心也歌謡口訣
やまふきはあやなく　山吹はかひなくなさきそ花みんとてうへつる君かこよひこれはと人に向ていひたるやうにいへりあやなはあやなしのし文字を畧したるなりあやなしはかひなし也

吉野川さしの山吹　岸の山吹のさかりに見えつるを吹風のしわさにや底の影さへうつろひぬるとふかくおしみたる也口訣
かはつなくねての山吹　蛙のなく井手のわたり山吹の散敷てあはれに見ゆれはいかに花の盛はさうあるらんと見ぬ事を後悔したる也又是は橘諸兄（モロエ）井手に寺を立て堤に山吹をうへ池に蛙をはなちて花を見蛙の聲をきかれしなり存命ならは花の盛を見らるへき物をといふ心さう山吹と蛙とをもろこしより取よせらるゝと也されは名所也歌謡口訣

吉野川さしの山吹ふくかせにうつろひにけり
題しらす　　よみ人しらす
かはつなくねての山吹ちりにけり花のさかりにあはましものを
このうたはある人のいはく橘のきよとものか歌なり清友脚太政大臣嵯峨后父諸兄公孫也
春のうたとてよめる　　ろせい
おもふとち春の山へにうちひれてろことともいはぬ旅ねしてしか
春のとく過るをよめる　　みつね
あつさ弓春たちしより年月のいるかことくもおもほゆるかな
やよひに鶯の聲のひさしう聞えさりけるをよめる　　つらゆき
なきとむる花しなけれは鶯もはては物うくなりぬへらなり
やよひのつこもりかたに山をこえけるに山川より花のなかれけるをよめる　　ふかやふ（深養父房則子内匠大允）
おもふこと春の山へに　思ふ同志春の山へに打つれてそこともさだめす旅れしてかなと也旅れせはやされかふ心也歌謡口訣
あつさ弓はる立し　年月のはやくすくるは矢をいることくたほゆると也矢とはいはれとも弓といひいるかと也
なきとむる花し　鳴とむる花なけれは老の鶯のこゑつねにものうく成ぬへきと也

花ちれる水のまに〳〵　谷川に花のちりて水にしたかひてなかれ出るを求めゆけは山には其色もなくさひしく見ゆるを春もなく成たるを也まに〳〵は隨意と書　隨　字はかりもよめり又物の間々をまに〳〵ともよめり

花ちれる水のまに〳〵とめくれはやまにも春はなくなりにけり　　もとかた

にはは

おしめともさいまら　おしめさゝ春さいまらす霞さへ春歸る道に立ぬると也　日論

春をおしみてよめる

おしめともと〳〵まらなくに春かすみかへるみちにしたちぬと思へは

こゑたえすなけや　一させに二たひくへき春かはこゑたえすなけ鶯名殘おしきにさいへり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　　れき　かせ

こゑたえすなけや鶯ひと〳〵せにふた〳〵ひとたにくへき春かは

花つみより　花つみは花摘と書春の名殘をおしみて花を手折來る也

さゝむへき物とはなしに　さゝむへき物ならぬにはかなくもちる花ことに名殘をおしみてそふる心かなとなりたくふは加字也伊勢物語に「行水と過るよはひとちる花といつれまてとふことをきくらん」習日訣

やよひのつこもりの日花つみよりかへりける女ともを見てよめる　　みつね

とゝむへき物とはなしにはかなくもちる花ことにたくふこゝろかぬれつゝそしぬて　三月けふはかりなれは春の別花の名殘とりあつめたれはぬれつゝしぬて折つるといへりぬれつゝ花をおるは心さしの淺からぬ由也「我衣手に露は降つゝとある同心也雨とも藤ともいはすぬれつゝしぬておるとよめる例の言書にゆつるなり春はいくかもなといへる歌はかやうにある事也

やよひつこもりの日雨のふりけるに藤の花をおりて人につかはしける　　業平朝臣

ぬれつゝそしぬて折つる年の内に春はいくかもあらしとおもへは

けふのみと春を思はぬ　けふはかりの春とおもはぬ時たにもたつ事やすからぬ花の頃なれは殆名殘のおしくあるといへり

亭子院の歌合に春のはてのうた　　みつね

けふのみと春を思はぬ時たにもたつことやすき花の陰かは

わかやとの池の藤波　春過夏の來り池の藤なみ咲かゝりたれは郭公を思ひ出して初音をいつか聞んといへり藤は春より夏に咲かゝる物なれは夏の卷頭に入たり藤亜(フヂナミ)とかけと波によせて池のとよめり柿本人丸と歌にもてにのせす註するは萬葉に入たる上古の人をはおもてにかゝさるなり

あはれてふことを　獨あはれといはれんとて春の花のにほく咲あひたるにはさかて夏に成て此一木咲たるやらんと也あはれはにもしろきといふ心也花のあはれををのれにならふ色あらせしとやと也此歌遲櫻をよめれとひとり咲らんと斗いへり是も言霊にゆつる古歌の體なり圓証按勅撰註なるへし

さつきまつ山郭公　五月をさかりになけは五月待山郭公うら羽ふきて去年のふる聲を今もなけといへりうちはふきは蟬(ハフキ)と書羽ふりともいふ鳥はなく時羽をふるなり

さつきこはなきも　なきふるさはかひもあらしさく聲をきかはやと也

古今和歌集卷第三

夏歌

題不知　　讀人しらす

わかやとの池の藤波さきにけりやまほとゝきすいつかきなかん

この歌ある人のいはくかきのもとの人丸かなり

うつきにさける櫻を見てよめる　紀としさた(利貞彈正弼元慶五年卒)

あはれてふことをあまたにやらしとや春にをくれてひとり咲らん

題しらす　　讀人不知

さつきまつ山郭公うちはふきいまもなかなんこゝろのふるこゑ

いせ

さつきこはなきもふりなんほとゝきすまたしさほとのこゑをきかはや

さつきまつ花たちはなの香をかけはむかしの人の袖のかうする

いつのまにさつきゝぬらん足ひきのやまほとゝきすいまろなくなる

けさなきいまた旅なるほとゝきすはなたちはなにやとはからなん

音羽山をこえける時に郭公の鳴をきゝてよめる　　きのとものり

をとは山けさこえくれはほとゝきすこすゑはるかにいまろなくなる

郭公のはしめてなきけるをきゝてよめる　　ろせい

さつきまつ花たちはな　五月を待て橘は花さく其香をかけはもと知たる人の袖の香そするといへり橘の袖の香此歌より證初たると也伊物に此歌業平字佐の勅使に下りて祗承官人の女もと知たる人なれはかはらけとらせて肴成ける橘を取てよめる此物語の外に心あるへからす橘は(圓証紀日本紀云)垂仁天皇九十年に田道間守(チマノモリ)を常世國(トコヨノ)につかはし非時の菓をもとむるに此橘を求て來るといへり萬葉「常世もの此橘のいやてりに我はほきみは今もこんかもと有田道間守か袖につゝみて此國へきたれはむかしの人の袖の香といふ」へるを定家卿は橘の香何袖にても侍りなんといへり(圓証按勅略)

いつのまにさ月　時のうつるをおほえす過るに郭公のいまなくにあとろきていつのまに五月きぬらんとなりむさきなきいまた　今朝來鳴旅の空なる郭公なれは花橘に宿はかれと旅人なさに宿ををしゆることくにいへりけさきなき好(コノム)まゝと也

をとは山けさこえ　音といふ文字をいたつらになさてありのまゝによめり口訣

ほとゝきす初こゑきけはあちきなくぬしさたまらぬ戀せらるはた

ならのいそのかみてらにて郭公のなくをよめる

いそのかみふるき都のほとゝきすこゑはかりこそむかしなりけれ

題しらす　よみ人しらす

夏やまになく郭公心あらはものおもふわれにこゑなきかせそ

ほとゝきすなくこゑきけは別にしふるさとさへそこひしかりける

ほとゝきすなかなく里のあまたあれはなをうとまれぬおもふものから

ほとゝきす初こゑ　郭公の初こゑきけは何となくあちきなくなり心すみて兆人を思ふとしもなけれと人なとの戀しき心のあると也ぬしはわし定らぬ戀せらるゝといふはたとは將當いつれもかくまさにといふ也萬葉に郭公ならねと「神なひのいはせの森のよふこ鳥いたくなきそ我戀まさる「さよ中に友よふ千鳥物思ふと侘をる時になきつゝもとな 頭注此歌今はよむへからす

ならのいそのかみ　奈良を過てまかれは遥からぬに思ひわたりてならの石上と書て侍る也 頭注

いそのかみふるき都の　舊き都の物毎にかはり果たるに時鳥の聲はかりむかしのごとく也とよめり 石上は玉ほこの道あし引の山といふやうにふるといふ文字に付ていふ昔賤女河のほとりにて布をあらふ水上より一つの劔流れ來るか岩なと當る物きれぬ此劔賤女の布にとゝまりされは布留といふ大和布留明神是也石上ふるき都とは廿一代安康天皇廿五代仁賢天皇此二代の皇居なれはふるきみやことよめり 石上より以下頭注

夏やまになく郭公　物おもふ折郭公のなけはあちきなく猶いやましになるに心あらはこゑなきかせそといへり

ほとゝきすなくこゑ　郭公のこゑをきけは古郷の戀しく成といふは郭公は歸るにしかしとなけは也されは不如歸と異名をいふ 頭注口訣

ほとゝきすなかなく　郭公の許多の里をかけてなけは思へ共猶うとまるゝといへりなかなくは汝鳴也なれかなくといふ心也思ふ物からは思ふ物なから也伊物にては戀の心也心のおほき女にたとへていへり汝鳴里のおほけれは猶疎く覺るといへり長鳴にあらす伏見修理大夫俊綱朝臣亭にて五月五日の會に其還か歌に「宿ちかくしはし長鳴け郭公けふのあやめのねにもくらへんとよめるを懷圓あさけりていはくほとゝきすなきはしめてきすと詠するにやと云々懷圓は歌人也道濟か子也 北京抄草子にあり

おもひ出るときはの山の郭公からくれなゐのふり出てそなく

こゑはして泪はみえぬほとゝきすわかころもてのひつをからなん

あしひきの山郭公をりはえてたれかまさるとねをのみそなく

いまさらに山へかへるなほとゝきすこゑのかきりはわかやとになけ

みくにのまち　三國町作者部類名高女虎女云々紹運錄倫

やよやまて山郭公ことつてんわれ世のなかにすみわひぬとよ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　紀友則

さみたれに物おもひをれは郭公夜ふかくなきていつちゆくらん

夜やくらき道やまとへる時鳥わかやとをしもすきかてになく

をもひ出るときはの　郭公むかしをこふる鳥なれはをもひ出るときはの山とつゝくれなゐを布に染付てたろして染る時ふり出す物なれはふり出てそなくと時鳥によせたりから紅にふり出てうなくは紅涙也常盤山山城の名所也 頭注口訣アリ

こゑはして泪はみえぬ　郭公は聲はかりにてあれは則我衣手のひちたる泪をかれと也ひつはぬれたるを云也

あしひきの山郭公　時鳥の折はへて數數なけは誰かまさるとあらそひてねをなくやうに聞ゆるといへり折延と書

いまさらに山へ歸るな　郭公の物きけるやうに今更に山へ歸るな聲の限りは我宿にてなけといへり口訣

やよやまて山郭公　やあしはしまて郭公はしてのたをさといふ鳥なれは此世に我住わひぬ我をさそへといふことつて也やよやまてはやあまてといふ心也一禪御説やよやはよひとゝめて物をいふ心也誹諧歌の「いくはくの田をつくれはか の歌は賤田長とよめるにや催馬楽の妹か門の歌是も賤の田長と云伊物「名のみたつしてのたをさよめるは郭公の異名也源氏明石巻「いふせくも心に物をなやむ哉やよやいかにとゝふ人もなみ返し「思ふらん心の程ややよいかにまたみぬ人の聞かなやまん

さみたれに物おもひ　五月雨に物思ひをる折ふしのつれ／＼に時鳥の夜ふかく鳴ていつちかゆくらんと跡をしたひたる也

夜やくらき道や　我宿を郭公の過かたけになくは夜のくらきか道まとへるにいと也くらきにも郭公の道まとふへきならねと人間の習ひになそらへていへり過かていれかてれなし過かたくいれかたく也 頭注之説

やとりせし花たちばなも
やとりし橘も枯ぬに何とて時鳥のなとつれぬならんとなり

夏のよのふすがと　夏のよのいかに短けれはとて郭公の一聲に明る事あるましけれと短夜の感をいはんとて也七夕の歌に「天の河あさ瀬しら波たとりつゝ渡りはてれはあけそしにけるわたりはてぬ心ちのしたる也一聲に明る心ちのしたる同心也篠目はあかつき也いなのめといふもおなし萬葉に「あひ見まくあきたられともいなのめのあけゆきにけりふなてせんいも」重昭註密勘義くるゝかと見れはあけ　暮るかとみれは順て明ゆる夏のよを飽すとや郭公の鳴と也

夏やまに懸しき人や　郭公の夏山に高くなくは懸しき人や入たるならんと也郭公の人こふる事あるましけれと鳴物なれはなそらへていへり聲ふりたてゝは高く鳴と云から紅といはれとこゑふりたてゝといへり

こその夏なきふるし　郭公はおなし聲なれは是は去年の夏なきふるしたるにてあるかあらぬかこゑのかはらぬはと也重茂之義

さみたれのそらも　五月雨の空也うごくはかりに郭公の何をうしとてか夜もすからさはきなくらんといへりさゝろは動也響也夜たゝはよるもしつまらすさはきなくといふ心也終夜なく也「あまのはらふみさゝろかしなる神もの心おなし」

やとりせし花たちはなも
やとりし橘も枯ぬに何とて時鳥のなとつれぬならんとなり

夏のよのふすがと　夏のよのいかに短けれはとて郭公の一聲に明る事あるましけれと短夜の感をいはんとて也七夕の歌に「天の河あさ瀬しら波たとりつゝ渡りはてれはあけそしにけるわたりはてぬ心ちのしたる也一聲に明る心ちのしたる同心也篠目はあかつき也いなのめといふもおなし萬葉に「あひ見まくあきたられともいなのめのあけゆきにけりふなてせんいも」重昭註密勘義くるゝかと見れはあけ　暮るかとみれは順て明ゆる夏のよを飽すとや郭公の鳴と也

夏やまに懸しき人や　郭公の夏山に高くなくは懸しき人や入たるならんと也郭公の人こふる事あるましけれと鳴物なれはなそらへていへり聲ふりたてゝは高く鳴と云から紅といはれとこゑふりたてゝといへり

こその夏なきふるし　郭公はおなし聲なれは是は去年の夏なきふるしたるにてあるかあらぬかこゑのかはらぬはと也重茂之義

さみたれのそらも　五月雨の空也うごくはかりに郭公の何をうしとてか夜もすからさはきなくらんといへりさゝろは動也響也夜たゝはよるもしつまらすさはきなくといふ心也終夜なく也「あまのはらふみさゝろかしなる神もの心おなし」

ほとゝきす聲もきこえす
待に郭公のこゑもきこえれは山彦は外になくれなとこたへぬそといへり山彦は木靈也樹神とも天彦なし

ほとゝきす人まつ山　人待山に時鳥の鳴は來るましきやうにあれはやかて我懸のまさるといへり松を待によみなせり松山はさぬき也崇德院の住せ玉ひて身は松山にとよませ玉へる此所也日缺

むかしへやいまも懸しき
昔や今も懸しくあれは郭公の古郷に來て鳴ぬらんといへり不如歸となく心は故郷を懸て也むかしへは昔といひて文字たられはむかしへといふ歌案

ほとゝきす我とはなしに　我にてはなきに憂世中に鳴といへり卯花のうき世とうけていへり口缺

はちす葉のにこりに　蓮葉の濁りにしまぬ清淨なる心を持なからなと露を玉と見するそ正直にこうあるへけれといへりあさむくは詐字也偽すかしたる心也法華經云不レ染二世間法一如二蓮華在一水と有

大江千里

やとりせし花たちはなもかれなくになとほとゝきすこゑたえぬらん
きのつらゆき

夏の夜のふすかとすれはほとゝきすなくひとこゑにあくるしのゝめ
明詠
みふのたゝみね

くるゝかと見れはあけぬる夏のよのあかすとやなく山ほとゝきす
紀秋岑

夏やまにこひしき人やいりにけんこゑふりたてゝなくほとゝきす
よみ人しらす

題しらす

ころの夏なきふるしてし郭公うれかあらぬかこゑのかはらぬ
つらゆき

時鳥のなくを聞てよめる

さみたれのうちもとゝろに郭公なにをうしとかよたゝなくらん

ほとゝきす聲もきこえす
待に郭公のこゑもきこえれは山彦は外になくれなとこたへぬそといへり山彦は木靈也樹神とも天彦なし

ほとゝきす人まつ山　人待山に時鳥の鳴は來るましきやうにあれはやかて我懸のまさるといへり松を待によみなせり松山はさぬき也崇德院の住せ玉ひて身は松山にとよませ玉へる此所也日缺

むかしへやいまも懸しき
昔や今も懸しくあれは郭公の古郷に來て鳴ぬらんといへり不如歸となく心は故郷を懸て也むかしへは昔といひて文字たられはむかしへといふ歌案

ほとゝきす我とはなしに　我にてはなきに憂世中に鳴といへり卯花のうき世とうけていへり口缺

はちす葉のにこりに　蓮葉の濁りにしまぬ清淨なる心を持なからなと露を玉と見するそ正直にこうあるへけれといへりあさむくは詐字也偽すかしたる心也法華經云不レ染二世間法一如二蓮華在一水と有

殿上也
さふらひにてれのことものさけたふへけるにめして郭公まつうたよめとありけれはよめる　みつね

ほとゝきす聲もきこえす山ひこはほかになくねをこたへやはせぬ
山に郭公のなきけるを聞て　つらゆき

ほとゝきす人まつ山になくなれはわれうちつけにこひまさりける
はやく住ける所にて郭公のなきけるをきゝてよめる　たゝみね

むかしへやいまも懸しきほとゝきすふるさとにしもなきてきつらん
ほとゝきすの鳴けるを聞て讀る　みつね

ほとゝきすわれとはなしに卯の花のうき世のなかになきわたるらん
はちすの露を見てよめる　僧正遍昭

はちす葉のにこりにしまぬ心もてなにかは露をたまとあさむく
月のおもしろかりける夜あかつきかたに讀る

夏のよはまたよひなから
曾なから夏の夜は明るを
いつくの空に月やとるらん
んと月に尋る心也口訣

ちりをたにすへしとう　我
ぬる床の妹を思ふかこと
く咲しよりむつましき花
なれは塵をたにすへしと
思ふと也床塵ゐ床に添て
床には塵のゐる物なれは
いへり口訣

夏と秋とゆきかふ空の　秋註
は片方と云

夏の夜はまたよひなから明ぬるを雲のいつこに月やとるらん　ふかやふ

となりより常夏の花をこひにをこせたりけれはおしみて此歌をよみてつかはしける　みつね

ちりをたにすへしとう思ふ咲しよりいもとわかぬるとなつのはな

みな月のつこもりの日よめる

夏と秋とゆきかふ空のかよひちはかたへすゝしき風やふくらん

夏と秋とゆきかふ空の道にはかたゝ涼しき風や吹らんといへり秋の方は涼しかるへき理也かたへ

秋來ぬとめには　秋に形なけれは來たるか目には明らかに見えれとも昨日吹たる風の音にはことなれは驚るゝと也一禪御說さやかは清也明也さたか也此集「秋萩をしからみふせて鳴鹿のめにはみえれと音のさやけさ同心也顯昭說にさやかにはあさやかにといふを略していへりさたかにといふ詞をさやかといふかといへるを定家卿さやかさたか大略は同候忽ささやかにといふ詞也清字をも用歟あさやかに鮮字也

河かせの涼しくもあるか　波とともにや秋はたつらん河風の涼しきと也風には波のたつ物なれは秋のたつによせていへり

わかせこか衣のすそを　秋の初風のめつらしきといはんとて我かせこか衣のすそを吹返させてうらめつらしきとつけたり我せこ夫妻に通して用此歌は妻ないふ男の衣のすそを吹かへすといふへからす定家卿云我背子我妹子夫妻通用勿論のよし存する也うらめつらしとはいつれの詞にもかよひてうらかなしなとよむ同事也萬葉十三「みさこゐる洲にゐる舟のこきていなはうら戀しけん後はあひぬとも　萬「我せこに見せんと思ひし梅花それともみえす雪のふれゝは一禪御說うらめつらしきうら悲しき同しうらは心ないふ　萬五「舟人も誰をこふとか大島のうら悲しけにこゑのきこゆる

古今和歌集卷第四

藤原敏行朝臣　富士丸子從四位上右中將大内記

秋歌上

秋立日よめる

秋來ぬとめにはさやかに見えねとも風のをとにろれとろかれぬる　雲客也

秋立日うへのおのことも賀茂のかはらに川せうえうしけるともに　河邊　荒川あそひ也

まかりて讀る

河かせのすゝしくもあるか打よする波とゝもにや秋はたつらん　つらゆき

題しらす

わかせこか衣のすそをふき返しうらめつらしき秋のはつかせ　よみ人しらす

きのふこうさなへとりしかいつのまにいな葉うよきて秋かせろふく
早苗とりしはきのふとおもふにいつのまに稲葉と成て秋風のそよくそと也是は時節の早くうつる事（聞註）をいふ「あすからはわかなつまんとかたをかのあしたの原はけふそやくめ（密勘）」ろといふ歌のことくきのふ早苗とりし心ちのしたる也（聞註）そよきてはそよめきて也いなはもそよといふ本ありそよきてを猶考したり公任卿此歌を九品のうち下にいれてすこし思ひたる所あるなりといへり

秋風のふきにし日より久かたのあまのかはらにたゝぬ日はなし
ひさかたの天のかはらの渡しもりきみわたりなはかちかくしてよ
あまの川もみちを橋にわたせはやたなはたつめの秋をしもまつ
こひ〳〵てあふ夜はこよひ天川きりたちわたりあけすもあらなん

秋風の吹にし日より　一年に一度あふ織女なれは逢夜は定りたれと待かねて秋の風吹日より天河原にたいぬ日はなしと也万葉に「秋風の吹にノ日より天河瀬に出立て待とつけこせなといへり待心也

ひさかたのあまの河原　舟には梶か肝要の物なれは渡し守君渡りたらは梶をとりかくしをけといふ是も人間の習ひをよそへいへり日訣

あまの川もみちを橋　天川に紅葉を橋にわたすか七夕つめの秋をまつはとうたかひよめりつめは妻也（聞註）崇徳院御本には橋にとかゝれたるをなをして舟とかゝれたり但實方集に「天川かよふ浮木に事とはん紅葉の橋はちるやちらすや是此集の紅葉を橋にとある本に付て詠すると見えたりといへるを定家卿舟橋只兩說也舟とも橋とも風情のよりこん時に詠すへき也といへり是忠密勘　天河かよふうき木といへるは漢武帝張騫に天河の水上を見せにつかはすに浮木にのりて天川に至るに織女にあひて此ふしをいひてしるしをこふに七夕はた物の石をとらせたりもちてきたり此よしを奏するに帝信せす庭上に捨をかれたるを東方朔見ていかなれは織女のはた物の石はきたれるそといふに帝信し給ふと也浮木は此張騫に紅葉の橋の事をとはんといふ。實方の歌也實に紅葉を橋に渡したるやうには詠すへからす

こひ〳〵で逢夜はこよひ　戀〳〵で今夜あへは天の川霧立渡り夜の明すあれと也

天川あさ瀬しら波　うと逢たるかあまりほとなさにあはぬ心ちして淺瀬をたとり渡り果れは夜の明ぬるとよめり淺瀬（聞註）ら波は淺き瀬の白波を渡んとたとる也年に一夜を待付て淺瀬をたとりて渡りも果す夜の明はほいなき事なちん伊勢大輔か自筆の本にはわたりはつれはとかきたるとて隆綱は渡りは（長元聞註）てれはといふ詞をうけすわたりはつれはも只あはれは同事也（長元聞註）織女の歌は「詞」の橋よりわたり淺瀬をわたりむかへ舟にのりなとよみて風情にまかする事也明そしにける明ろしにけんなと今は詠すへからす

ちきりけん心そつらき　織女のとしに一たひと契り定つる心そつらきと也

とし事にあふとは　必年ことに織女はあへと一夜はかすのすくなきと也

七夕にかしつる糸の　七夕にかしつる糸打はへて年なかく願ふ事を我乞わたるへきと也是は乞巧とてたくみをこふといふ事なれはひの糸といふ乞巧奠に竹の竿をわたして糸をくりかけてれかふ事をいひあくる也七日の夜さま〳〵の物を七夕にかす事也今も内裏に乞巧奠に机の上に「竿」火取なとをかる〳〵也（聞註）うちはへては打延と書折はへてとおなし年のをは年緒心緒別緒愁緒なといふ只年といふ事に緒をそへたり

寛平御時なぬかのゝうへにさふらふれのことも哥奉れと仰られける時人にかはりてよめる　とものり

天川あさ瀬しら波たとりつゝわたりはてねはあけろしにける
ねなし御時ささいの宮の哥合のうた　藤原興風

ちきりけん心うつらき七夕のとしにひとたひあふはあふかは
なぬかの日の夜よめる　凡河内躬恒

とし事にあふとはすれと七夕のぬるよのかすろすくなかりける
七夕にかしつる糸のうちはへて年のをなかくこひやわたらん

こよひこん人にはあはし
織女の一年待ほどの久し
けれは今宵來る人にあは
しといへるあらま／事也
今こん人にはいひかたし
此歌口訣あり

いまはとてわかるゝ時は
今はと別る時は天河を渡
ぬに袖のぬるゝと也
けふよりはいまこん年　後
朝には又いつあはんなと
契るに是は定れる日なれ
は明年の昨日を待へきと
なり此歌師說口訣

木のまよりもりくる　木の
間よりもりかれたる月影をみれは心つくしなる秋は來にけりといへり心つくしの秋はきにけりは木葉かくれの月の心つくしのみにあらす秋の感をよせていへりすちくる月と書たる本月おつるとは山に入月也おちくるとはいふへくもあらす月にかきらすすちくるといふ詞このみよむへからす是皆師說

大かたの秋くるからに　大かたの秋のくるに付て我身を悲しき物と思ひ知と也大かたは十の物七八斗の事をいふ口訣
わかためにくる秋　我ためにくる秋にもあらぬに虫の愁ふるなきけは物悲しきと也
物ことに秋そかなしき　紅葉しもて行てうつろふを限りと思へは物ことに秋そ悲しき時なるといへり以一知万といふ心也
口訣

題しらす　ろせい

こよひこん人にはあはしたなはたのひさしきほとにまちもころすれ
なぬかの夜のあかつきによめる　源むねゆき

いまはとてわかるゝときは天の川わたちぬさきに袖ろひちぬる
やうかの日よめる　みふのたゝみね

けふよりはいまこんとしのきのふをろいつしかとのみまちわたるへき
たいしらす　よみ人しらす

木のまよりもりくる月の影みれは心つくしの秋は來にけり
大かたの秋くるからにわか身ころかなしきものとれもひしりぬれ
わかためにくる秋にしもあらなくにむしのねきけはまつろかなしき
物ことに秋ろかなしき紅葉つゝうつろひゆくをかきりと思へは

ひとりぬる床は草葉　獨れの床は草葉なられとも秋の來る夜は露しけきと秋の感をよめり
是貞のみこ　仁和第二右中將母同二寛平一

いつはとは時はわかれと
いつはとは時はわかれと秋の夜長くて物思ふ事の限なると是も秋の感をよめり
いつはとはいつとは也
かんなりのつほ　内裏鶯芳舍是也神鳴の時主上此壺へ出御なり

かくはかりおしと思ふ　秋のよをねしむ人のねしまぬ人を思へる心也
しら雲にはねうち　秋の夜の月のくまなくて白雲に羽をましへて飛鴈の數さへ見ゆると也此歌數さへ影さへむかしより諸說
又二首の歌なといふ明月至れる時物の影なきを本意とすはるかにとふ鴈の數さへたゝかに見えんこそ月のくまなき心にかなふへけれは諸說ありとも數さへを用ゆ義理師說也故六條左京兆の〻給ひしは世に山戸兎田集といふ文は諸の一座の會
をかけるに秋夜月といふ題にてよめる詩に秋の夜の月といふ句を末に置て一つは影さへみゆるとよみ一つは數さへ見ゆるとよみて上三句は此定にて侍れは古今には數さへをまさりたりと思ひていれたるにや勝負は人の心にまかすへしとこうたほせられしか朔詠江註には此歌の作者見えすして兎田集には伊衡か詠也義理註俊頼は影か執せられけるにや基俊のかゝれたるは數に心ひかると見え侍しかは古賢も各別に思はれけり義理註打かはしの打は詞のたすけ也一説御說かはすはましへたる心なり

ひとりぬるとこは草葉にあらねとも秋くるよひは露けかりけり
これさたのみこの家の歌合の歌
いつはとは時はわかねと秋のよろものおもふことのかきりなりける
かんなりのつほにて人々あつまりて秋の夜おしむうたよみけるつね　みつね
かくはかりねしと思ふ夜をいたつらにねてわかすらん人さへうらき
たいしらす　よみ人しらす
しら雲にはねうちかはしとふかりのかすさへ見ゆる秋のよの月

さよ中と夜はふけぬらし雁かねのきこゆるうちに月わたるみゆ

是貞のみこの家の歌合に讀る　大江千里

月見れはちゝに物こそかなしけれわか身ひとつの秋にはあらねと

たゝみね

久かたの月のかつらも秋はなをもみちすれはやてりまさるらん

在原元方

月をよめる

秋の夜の月のひかりしあかけれはくらふのやまもこえぬへらなり

人のもとにまかれりける夜きりさりすのなきけるをきゝてよめる

藤原たゝふさ　忠房信濃掾是嗣子四位少將

きり〳〵すいたくなゝきそ秋のよのなかきれもひはわれろまされる

是貞のみこの家の歌合のうた　としゆきの朝臣

さよ中と夜はふけ〻月の中天をわたるを見て鴈かれの聞ゆるは小夜中と夜は更ぬらんと也月わたるといふ詞鴈金にはせたり夜わたる月といふは終夜の月の事也

月見れはちゝに物　月は陰氣なれは打詠れは心すみ哀を勸めて千々に物悲しけれは我身一つのやうに覺るを我身一つの秋にはあらねとと云秋來只爲ニ一人ノ長

久かたの月の桂も　月の桂も紅葉するか影の照まさるを也此歌を後撰に貫之歌「春霞棚引にけり久堅の月の桂も花や咲らんと有月の桂は春花咲紅葉すと見えたるに以前詩に桂花秋白と作るは秋花咲と見えたるを問昭いべるを定家癖云桂花は月の名也桂の花にはあらすよの常の花紅葉になすらへてよめり歌にはさしもあらぬ事をも思ひあてをしてよみ侍るめり細註

秋のよの月の光りし　月のあかけれは暗部の山も道たとらてこゆへきと云ひかりしのしはやすめ字なり優なるしといへり

きり〳〵すいたくなきそ　蓋のわか身ひとつといふやうにいたくはなきそ秋の夜の長く明しかたき思ひは我こそまされと

秋の夜の明るも知す　我こそ物や悲しかるらん長き夜の明るも知す虫の鳴はと我心よりをしはかりたる也

秋萩も色付ぬれは　萩の色付比久長くて紅葉かちなるに　蓋の愁ふるは我れぬ如くゝる悲しきにやとなり

秋の夜は露こそ　露の珠更に秋の夜楽にあるらし草村ことに虫の愁ふる聲の茂きはと也千字文露結成レ霜なとい

きみ忍ふ草にやつるゝ　君忍ふ草のみ茂くおひてある〻古郷は松虫のなくれう悲しきと也やつるゝは憔の字なりやふるゝともよむ也口訣

秋のゝに路もまとひぬ　分暮す秋の野に路まとひぬれは松虫の鳴するかたにゆきて宿やかるへきと也はかなきいひ事也口訣

秋の野にひとまつ虫　秋の野に人待といふ虫の聲するは誰とさしても聞えれは我かと行ていさ訪んと也

もみちはのちりてつもれる　紅葉の散積り道も分ぬ宿に誰をまつ虫さのみ鳴らんといふ巨々等と書おはくなく也細註

ひくらしのなきつる　日晩の鳴つるからに秋の日ほとなゝ暮ぬと思へは山の陰にてあると也なへにはからにといへり日是仁密勘

くらしはらいさきせみ　也定家卿云西山の陰夕鳴の程なき事當時顯密に侍る事故家の本には思へは山のとそ祈侍る源氏に

かことがましき虫のこゑ　とあるは日晩也日くらしは夕暮になく物なれは入日のかけろふ山に涼しき聲をきゝ心すむよしを

秋のよのわくるもしらすなく虫はわかこと物やかなしかるらん

讀人不知

題しらす

秋萩もいろつきぬれはきり〳〵すわかねぬことやよるはかなしき

秋の夜は露こそことに寒からし草むらことにむしのわふれは

きみしのふ草にやつるゝ古さとはまつむしのねろかなしかりける

秋のゝに道もまとひぬ松虫のこゑするかたにやとやからまし

秋の野にひとまつ虫の聲すも　也われかとゆきていさとふらはん

もみちはのちりてつもれる　我宿にたれをまつむしこゝらなくらん

ひくらしのなきつるなへに　日は暮ぬとおもふはやまの陰にろ有ける

くらしはらいさきせみ　也定家卿云西山の陰夕鳴の程なき事當時顯密に侍る事故家の本には思へは山のとそ祈侍る源氏に

かことがましき虫のこゑ　とあるは日晩也日くらしは夕暮になく物なれは入日のかけろふ山に涼しき聲をきゝ心すむよしを

日くらしのなく山里の　山里の秋の夕は何となく物悲しくさびしきに日くらし鳴て風の身にしめる外にとふ人なしといへり

まつ人にあらぬ物から　待人ならぬ物ながら初かりかれのめつらしきなり

秋かぜに初かりかれ　初鴈の空に聞るは誰か事傳の玉章をかけてきつらんと也鴈かれの玉章と云は蘇氏が胡國にとらはれし時鴈の足に文をつけて故郷にことつてたる事のある也伊物に秋風ふくと鴈に告こせといふも秋風のひやゝかに吹比鴈のくれは也又報恩經に舊友太子の父文を鴈につけてつかはす波斯國にて太子にあふてとゝけて歸りし事ある也又鴈書といふ事は鴈の飛つらなるか文字に似たれはいふとゝいへり詩に水底移し字鴈渡時といふ

わかかとにいなれほせ　稲負鳥古今三鳥の一也傳授なられは難知

いとはやもなきぬる　鶯はやくも鳴渡る鴈哉露の色さる木木も紅葉せねにさ也萬「けさの朝鴈金咽つ春日山紅葉にけらし我心いたみ万葉に此心の歌たゝし」

日くらしのなく山里のゆふくれは風よりほかにとふ人もなし

はつかりをよめる　在原元方

まつ人にあらぬ物から初鴈のけさなくこゑのめつらしき哉

是貞のみこの家の歌合の歌　とものり

秋風にはつかりかねうきこゆなるたか玉つさをかけてきつらん

題しらす　よみ人しらす

わかかとにいなおほせ鳥のなくなへにけさふくかせにかりはきにけり

いとはやもなきぬる鴈かしら露のいろとる木々紅葉へなくに

春かすみかすみて　春霞に立別ていにし名殘有つる鴈金は、そ秋霧の上になきわたると也眼前の詠なよめり霞の字、つれゝ清てよめるを此歌はかりにこりてよむかすみていにしを清てよめれはといふ說有古き物語に延喜御時朝恒が子の小童をめす時は八月なり繼日戸より參て竹臺の下にさふらふに鴈の渡りたり勅有て歌奉れと有しに春霞ときなふ人々嘲弄の心有に次々いへるを聞てをの〳〵感嘆すとなり父朝恒春霞といひ出るを聞て佳境に入對在山先可表冬山といへり今の歌の詠なり

夜をさむみ衣かりかね　夜寒をわひて衣かりかねの鳴からに萩の下葉も色付たると也なへにはからにといへる詞におなし

秋風にこゑをほに　上句を下句にてことはれる歌也こゑをほにあけては聲をあらはしたかくなくをいふ物の現形するをほにといふ世歌のほにはいとしたかくなくをかよはしていへり此集に「秋の田のほにこそ人の戀さらめと」いふは穂によせたり万葉に「見わたせはあかしのうらにたつる火のほにこそ出めかに戀しも此ほは火也

うき事をたもひつられ　秋の夜なゝうき事を思ひつられて鳴わたる鴈によそへていへり

山さとは秋こそことに　山里はいつはあれと秋は殊に佗しく鹿の鳴音に目を悅してあはれをそふると也

春かすみかすみていにしかりかねは今うなくなる秋霧のうへに

夜をさむみ衣かりかねなくなへに萩のした葉もうつろひにけり

このうたはある人のいはくかきのもとの人丸かなりと

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　藤原菅根朝臣左兵衛督尚子藏人頭

秋風にこゑをほにあけてくる舟はあまのとわたるかりにろ有ける

かりのなきけるを聞てよめる　みつね

うき事をたもひつられてかりかねのなきこゝろわたれ秋のよなゝ

是貞のみこの家の歌合のうた　たゝみね

山さとは秋こそことに佗しけれしかのなくねにめをさましつゝ

紅く山に紅葉ふみ　秋ふかく成て深山の紅葉の散しきしるをふみ分て鹿の打侘なく比の秋は至て悲しきさ也此秋は悲しきは鹿のこゑきく時分の秋也猶丸太夫か歌也秋ふかく成て端山なとはあらはなる比みやまの陰を頼みて鹿はある物也されはこそ山なとよめる也口訣

秋はきにうらひれ　秋萩に物思ひうれへをれは鹿の鳴音山下とよみ鳴さ也うらふれうらひれなし物にもひうれへをれはといへり鹿正もきぬ萩もうりぬさをしかの鳴なる聲もうらふれにけり久しなへうらふれなといふとよみはひゝくといふ也とよみといふ詞歌合にわらはるゝ事也

秋萩をしからみふせて　萩を折ふせて鹿の鳴か目にはみえすし　音のさやかに聞ゆるさ也鹿のしからみは萩の中にねるほとにむすほゝれたると也柵字也鹿の秋を折ふせたるを見せて柵クヤラ　しさもすむともよむ字也鹿のこゑのさやけさは髪のすみきよき心也古語拾遺にあなさやけきといふは竹葉の聲也といへりされはこゑにもかよふ正也正証

あきはきの花さきに　萩の花さけは尾上の鹿は今なくらんと也詩に曉露鹿鳴花始開と有萩を鹿鳴草といひて鹿鳴て花咲といへはかくよめるなり高砂の尾上とは山の尾のうへといへは嶺を云高砂の事序に註す

讀人不知

題しらす

おく山に紅葉ふみわけなくしかのこゑきくときそ秋はかなしき

秋萩をしからみふせてなく鹿のめには見えすてをとのさやけさ

是貞のみこの家の歌合によめる

あきはきの花さきにけり高砂のをのへのしかはいまやなくらん

むかしあひしりて侍ける人の秋の野にてあひて物かたりしける つ

みつね

ねてによめる

秋萩のふるえに咲る　萩の古枝に咲花の本の心を忘れぬことく昔知たる人に今あふかきりるさたさへにいへり萩の中に古枝より春葉のめくみ出て秋花咲有是を木榛さいふ木の部に入たり万葉に荒野のはきはらとよめるを榛原とかけるつれの鴈は草也古枝にさくは木榛にて本あらき也もとあらの木榛とそれをよめり

秋はきのした葉　萩の下葉の色付時分夜寒なれは獨れゝる人の目を合せぬさなりいねかては繁レ殿也ひとりある人とはやもめなとの目を合せぬ心也されは鰥字魚の目をあはせぬ事によりたる字也

なきわたる　鴈のなみたや　物思ふ宿の萩の上の露に鳴わたる鴈の泪やおとしておきつらんといへり鴈の鳴わたるに萩の露を見て思ひ合せていへり古今秀歌十首撰てまいらせよと後鳥羽院より定家に仰出さるゝ時此歌其一也

萩の露玉にぬかんと　萩の露の玉に似たるをつらぬかんとそれはきえゐるに其まゝ見よと人になしゆおりて見はおちそし　萩の露をもくをきて枝たはみなひけるを折て見はおつへけれはえおとてやすらひたるなり詩に　般

鬱折一時情と萩をいへるおなし心なり枝もたはゝとを一二の説をつけたりいつれも露にもく置て枝のたはみなひけるかたち也ふかき心なし万葉に十尾と書後撰に「秋萩の枝もとをゝに成ゆくは白露おもくをけはなりけり

秋萩のふるえに咲る花みれはもとのこゝろはわすれさりけり

よみ人しらす

題しらす

秋はきのした葉色つく今よりやひとりある人のいねかてにする

なきわたる鴈のなみたやおちつらん物おもふやとのはきのうへのつゆ

萩の露玉にぬかんとそれはけぬよし見ん人は枝なから見よ

ある人のいはく此歌はならのみかとの御うたなりと

おりて見はおちうしぬへき秋萩の枝もたはゝにをけるしら露

萩か花ちるらんをの〳〵露霜にぬれてをゆかんさよはふくとも

是貞のみこの家の歌合によめる　文屋あさやす

秋の〳〵にをくしら露はたまなれやつらぬきかくるくもの糸すち

たいしらす　僧正遍昭

名にめて〳〵おれるはかりをみなへしわれにきと人にかたるな

僧正遍昭かもとになら〳〵まかりける時におとこ山にてをみなへし

をみてよめる　ふるのいまみち布留今道従五位下造酒正

是貞のみこの家の歌合のうた　としゆきの朝臣

秋の野にやどりはすへし女郎花なをむつましみたひならなくに

萩か花ちるらんをの〳〵露霜にぬれてをゆかんさよはふくとも　文屋あさやす

秋の〳〵にをくしら露はたまなれやつらぬきかくるくもの糸すち　僧正遍昭

名にめて〳〵おれるはかりをみなへしわれにきと人にかたるな　僧正遍昭

をみてよめる　ふるのいまみち布留今道従五位下造酒正

是貞のみこの家の歌合のうた　としゆきの朝臣

秋の野にやどりはすへし女郎花なをむつましみたひならなくに

「色付あふ秋の露霜な降そも妹か袂なまかぬ此夜は秋の霜を露霜といふ證歌也といへり只露と霜と兩種と知へし

文屋朝康　康秀子延喜三年任大舎人允大膳少進作者部類

秋の〳〵にをく白露　秋野の露は玉なるを蛛の糸筋にてつらぬきかけたりといへり

名にめて〳〵おれる斗　女といふ名にめく〳〵馬よりおりたる斗を我落たると人に語るなといへり出家落墮したるはよからぬ事

なれはたはふれていへり序には詞勇有

をみなへしうしと　男山に女のたてるかよからぬ郡と見つ〳〵そ過行といへり女郎花とかけは女によそへてよめり

秋の野にやどりは　女といふ名のむつましけれは旅なられと秋の野に宿るへきと也

をみなへしおほかる　女の名ある草たほきのへにれたらはかひなくあたの名なをや立んと也

をみなへし秋の〳〵風　秋の野風に女郎花のうちなひきて心を誰によすらんと也

秋ならてあふ事かたき　天河原に女郎花は生ぬ物ゆへ織女のことく秋ならてあふことのありかたくはあるそと也

たか秋にあらぬ物故　人の秋にてもなく上秋にてあるに女郎花の何とて色に出てはやくうつろふそといへり秋を飽によせていへりまたきはやく也逐字也誰秋とは誰か秋たる事らなきにと云へり

つまこふる鹿そ鳴　をのかすむ野に女郎花の有としらす妻こふる鹿の鳴といへり源氏にはさをしかのつまにすめる萩の露にもともいふされと女郎花をなんなによせてよめり

女郎花吹過て　をみなへしの目には見えねと吹くる風に香はしらるゝといへり猶口決

題しらす

をみなへしおほかるのへにやどりせはあやなくあたの名をや立なん　をの〳〵よしき小野美材参議釜守子掃部頭或説篁孫俊生子

寛平法皇亭子院とも號す、朱雀院の女郎花合によみて奉りける　左のおほいまうちきみ本院時平公昭宣公子

をみなへし秋の野風にうちなひきこゝろひとつをたれによすらん　藤原定方朝臣勘修寺高藤子新二條右大臣

秋ならてあふ事かたきをみなへしあまのかはらにおひぬものゆへ　つらゆき

たか秋にあらぬ物ゆへをみなへしなにいろに出てまたきうつろふ　みつね

つまこふる鹿なくなるをみなへしをのかすむ野の花としらすや

女郎花吹過てくる秋風はめには見えねとかころしるけれ

人の見る事やくるし　女郎花の人の見る事やくるしからん秋霧に立かくるゝはと也口訣

ひとりのみなかむる　獨住にうち詠るよりは宿にうへて女郎花を見るへきをといへり口訣

をみなへしうしろめたし　あれたる宿に女郎花の獨たてれは心もとなくみゆるさ也うしろめたくもは心もとなきさ也口訣

花にあかて何歸る　花にあきやらて何歸るらん女郎花のにほひ野にれぬへきものなさを殘をおしみたる也

なに人かきてぬき　いつれの人かきてぬきかけし藤袴にてあるそ秋ことに野へを匂はすと也猶口訣

やとりせし人のかたみ　ふちはかまの忘れかたく匂ふはやとりせし人のかたみかとなり猶口訣

たゝみね

人の見る事やくるしきをみなへし秋霧にのみたちかくるらん

ひとりのみなかむるよりは女郎花わかすむやとにうへて見ましを

物へまかりけるに人の家（イニノ字ナシ可川）にをみなへしうへたりけるを見てよめる

乘覽王（カチ　ミン　チヨウオウ）　惟高親王子宮内卿神祇伯

をみなへしうしろめたくもみゆる哉われたる宿にひとりたてれは

寛平御時藏人所のおのこともさか野に花見んとてまかりたりける時歸るとてみな歌よみけるつゐてによめる

平さたふん　貞文號平仲右中將好風男

花にあかて何歸るらんをみなへしおほかるのへにねなましものを

是貞のみこの家の歌合の歌　としゆきの朝臣

なに人かきてぬきかけし藤はかまくる秋ことにのへをにほはす

藤はかまをよみて人につかはしける　貫之

やとりせし人のかた見かふちはかまわすられかたきかにほひつゝ

ふちはかまをよめる　うせい

ぬししらぬかこそにほへれ秋の野にたかぬきかけしふちはかまそも

たいしらす　平貞文

今よりはうへてたに見し花すゝきほに出る秋はわひしかりけり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　ありはらのむねやな

秋の野の草のたもとか花すゝきほにいでゝまねく袖と見ゆらん

素性法師

われのみやあはれと思はんきり〳〵すなくゆふかけのやまとなてしこ

我のみ哀とおもふへきにあらす誰もきり〳〵すのなく夕景の大和撫子はにはなし心にあるへきさいへり（題注家經朝臣和歌序に鏡愛抽二衆草一故曰二撫子一艷言契二千年一故曰二常夏一とかけり花の姿ちいさやかにうつくしけれはおさなき物にたとへて撫子さいふ又さかり久しけれは常夏さいへりから撫子は色々也やまとなてしこは若紅梅色にて花のすそは分てかはりたり秋の野に一すち〳〵に咲たる是題注略哀と思はんは非二哀憐一也面白き心也

ぬししらぬかこそ匂へれ

主は誰ともなくて秋の野に匂ふは誰ぬきかけし藤はかまそと也ぬしのしりかたきよし也

今よりはうへてたに　秋の（題注氣色いつよりも薄の穂に出てまねく比は佗しき程に今よりはうへて見ましきさいへり穂に出る秋はさは宿しき色の現形したる也たにには心なし只うへて見ト也萬葉に「人はみな萩か秋といふいな我はに花か末を秋とにもはんと賞してよめる歌もあり「吹風を嶋てうらみよ嶋は我やに花に手たにふれたる「忘れ草名をもゆゝしみかりにてもおふてふ宿にゆきてたに見ト手をふれたる也行て見し也いつれもたにの心なし是題注之義但此歌共たにとい上詞口訣）

秋の野の草の秋か　秋の野の草の秋にてあるか湖のほに出てまねく袖と見ゆるはと也薄を尾花といふは白馬の尾に似たる故也源氏に花の物よりことに手らをさしいてゝまねくかさあり物よりはすくれたる心也後鳥羽院定家卿に歌一首のうちに袖とたもとはよむましきかさ勅撰有しに此歌を引出してくるしからすと申されけるとかや新勅撰に雅經歌「花すゝき草のかたをかりそなくなみたの露やをきさころなき此歌をとれり

みどりなるひとつ草　春夏は緑なる一つ草とみえつるか秋は色々の花咲てそれ〳〵の名をあらはすと也六百番歌合定家卿「をそくさくなのかさま〳〵咲花のひとつふた葉の春の若草題若草也此本歌とされる由俊成卿の判に云り

題しらす　よみ人しらす

みどりなるひとつ草とそ春は見し秋はいろ〳〵の花にそありける

もゝ草の花のひもとく秋のゝにねもひたはれん人なとかめる

月草にころもはすらん朝露にぬれてのゝちはうつろひぬとも

もゝ草の花のひも　色々の花のひもとく秋のゝに思ひたはふれむを人なとかめそと云也花の紐とくといふに付て戯んと云花の開くるを紐とくと云基俊歌に「みよしのゝ山ゐのつらゝむすへはや花の下紐をうくとくらん」題註百草とは數多の草と云也

仁和の帝みこにおはしましける時ふるの瀧御らんせんとてれはしましける道に遍昭か母の家にやとり給へりける時に庭を秋のゝにつくりてたほん物語のつねてによみて奉ける　僧正遍昭

月草に衣はすらん　只今見る色のうつくしけれは露にぬれてのゝちはやかてうつろひぬとも月草に衣をすりてきるへきさ也

さとはあれて人はふりにし宿なれはにはもまかきも秋のゝらなる

月草は露草也鴨頭草鴨冠草とも書青きうつくしき色染る花也うつろひやすき花也

さとはあれて人はふり　里は荒果て人は古にし宿にてあれは庭もまかきも秋の野となりしと也のちは野也萬葉に殿ノ草ノラ草ノラさも書まかきは節垣也籬の字まかきともませかきともよむ也

ふくからに秋の草木　吹からに秋の草木のしほるれはむゝ山風をあらしといふらんとはれり山風を嵐と文字につく心にはあらす山風はあらき物なれは嵐ハ荒によせたりむへは宜諧とも書尤と云心也公任卿此歌を九品の下品にいれてわつかに一ふしあるなりといへり

草も木もいろかはれとも　千草萬木は色のかはれとも海の波の花にはいつといふ事のなく不變に見えて秋のなかりけるといへりわたつみと四字に書てもわたつうみと五字によむ也つの字にこるへき也　大海　海若と書ワタツミ也

もみちせぬときはの山は　紅葉せぬ常緑の山なれは吹風の音に秋を聞わたるらんといへり「紅葉せぬときはの山に住鹿はをのれ鳴てや秋をしるらん同作也

霧たちてかりそなく　霧立鴈鳴は朝原は紅葉してそ有らんと也

かみなつき時雨もいまた　神無月の時雨もまたふらぬに神南備の森は早くうつろひたりといへり神南備山は大和に在かみなひの森は山城山崎の南に在

古今和歌集卷第五

秋歌下

是貞のみこの家の歌合のうた　文屋やすひて

ふくからに秋の草木のしほるれはむゝやまかせをあらしといふらん

草も木もいろかはれともわたつ海の波の花にそ秋なかりける

秋の歌合しける時によめる　紀よしもち　淑望中納言長谷雄子大學頭

もみちせぬときはの山はふくかせのをとにや秋をきゝわたるらん

題しらす　よみ人しらす

霧たちてかりそなくなるかた岡のあしたのはらはもみちしぬらん

かみなつき時雨もいまたふらなくにかねてうつろふかみなひのもり

ちはやふる神なひ山の　神南備山の紅葉に思ひの色をそへましきはやくうつろはんするほどにと云ロ訣

ちはやふる神なひ山のもみちはにれもひはかけしうつろふものを

清和天皇　貞觀の御時綾綺殿のまへに梅の木有けりにしのかたにさせりける枝の紅葉うめたりけるをうへにさふらふれのことものよみけるつねてによめる　藤原かちをん　勝臣従五位下肥後介佐生子任越後介藤生子

おなしえをわきてこのはのうつろふはにしてろ秋のはしめなりけれ

おなしえをわきて　同し枝を分て木葉のうつろふは四は秋の方なればといへりうつろふは紅葉したるをいふ萬葉に金風と書西吹風とも秋風をよめり

石山にまうてける時音羽山の紅葉をみてよめる　貫之

秋かせのふきにし日よりをとは山みねのこすゑもいろつきにけり

秋かせのふきにし日より　秋なかは過ゆき風肌寒く吹し時分より音羽山の梢も色付たると也久かたの天の川原に立ゐ日はなしといひし秋風の吹にしに此歌時節こと也可分別ロ訣

是貞のみこの家の歌合によめる　としゆきの朝臣

しら露のいろはひとつをいかにして秋のこのはをちゝにそむらん

しら露のいろはひとつを　いかにして白露の秋葉を色々に染ぬらんと云也

秋のよの露をは露と置てあるに鴈の鳴渡れは其泪にてのへを染らんと也露は夜しけくなく物なれはなりあきの露いろ〳〵ことに　山の木葉の色々にこくうすきあるは露の各別にをくにてそあるらむとなり口訣

秋のよの露をはつゆとをきなからかりのなみたやのへをそむらん

題しらす　壬生忠岑

あきの露いろ〳〵ことにをけはこそ山の木の葉のちくさなるらめ

よみ人しらず

しら露もしくれもいたくもる山は下葉のこらすいろつきにけり

しら露らしくれもいたくもる山は下葉も殘らす色付たると云詞やさしく道理明なる歌也定家卿秀歌十首の内也

雨ふれと露ももらし　笠取の山は雨も露もいらしをいかてか紅葉そめけんと也笠取山山城醍醐の邊也

ちはやふる神のいかき　神の井垣にかゝる葛ならは常盤なるへきか世間のと同しく秋にはこらへす紅葉するとも也あへすは嫌す也こらへす也定家卿歌「思ひあへす秋ないそきそさをしかの妻とふ山の小田の初霜と有思ひあへすは思ひ定すの心也此歌はこゝをしかのつまとよ山のをかへなるを木歌也

雨ふれはかさとり山の　かさす袖なるへし此雨ふれはゝ笠とり山といはんためなり口訣

ちらねともかれてそ　紅葉はゝ今は限りの色と見つれはちらぬさきにおしく思ふと也口訣カリ

近江

もる山のほとりにてよめる　つらゆき

しら露もしくれもいたくもる山は下葉のこらすいろつきにけり

秋の歌とてよめる　ありはらのもとかた

雨ふれと露ももらしをかさとりのやまはいかてかもみちそめけん

神のやしろのあたりをまかりける時にいかきのうちの紅葉を見てよめる　貫之

ちはやふる神のいかきにはふくすも秋にはあへすうつろひにけり

是貞のみこの家の歌合によめる　たゝみね

雨ふれはかさとり山のもみち葉はゆきかふ人の袖さへそてる

寛平御時きさいの宮の歌合の歌　よみ人しらす

ちらねともかれてそおしき紅葉はゝいまはかきりのいろと見つれは

やまとの國にまかりける時さほ山に霧のたてりけるを見てよめる　紀とものり

たかためのにしきなれはか秋霧の佐保のやまへをたちかくすらん

是貞のみこの家の歌合のうた　よみ人しらす

秋きりはけさはなたちろ佐保山のはゝろのもみちよろにてもみん

秋のうたとてよめる　坂上是則（好陰子望城親加賀守田村丸四代）

さほ山のはゝろの色はうすけれと秋はふかくもなりにけるかな

人のせんさいに菊にむすひつけてうへける歌　在原業平朝臣

うへしうへは秋なき時やさかさらん花ころちらめねさへかれめや

寛平御時菊の花をよませ給ふける　としゆきの朝臣

久かたの雲のうへにて見る菊はあまつほしとろあやまたれける

此歌はまた殿上ゆるされさりける時にめしあけられてつかうまつるとなん（れイ）

あらん花はちるとも根はかれましきさいへり秋のあらんかきりは咲へしさいはんより秋のなき時は咲さしきさいふは面白き也萩はちらぬ物なれと此歌にちるとよめれはよむへきにこそ一説御既うふるとうふるならは秋なき年の事はしらす根たにかれすは秋は必さくへきとよめり

久かたの雲のうへにて見る菊は天狗星とあやまつと也久かたの雲の上は殿上を云菊は星に似たり久かたは雲の上さいはんとて也

露なから折てかさゝん　菊は仙家の花なれは露なから折てかさして老せぬ秋の行末久しかるへくさ也露のまに千年をふるなさいへは露なからさ也

うへし時花まちさをに　花見んとてうへし時はさくををそしさ待つるに今かくうつろふ秋にあふへきさは思はさりしさ也

秋風のふきあけに　秋かせの吹上の白菊は花にてあるかあらぬか波のよするかさうたかひ給へるは今花を見るめの奇異なる所をほめんとて也秋風は吹上さいはんため也風をあへしらひて波のよするかさ也（屋正廻注之板）吹上濱いたく吹て濱の眞砂を吹上るか面白きさいへり定家卿古今十首の其一也

ぬれてほす山路の菊の露のまに　仙家の菊を分る人の露に衣のぬれたるをほすまに千年をへたる事のあるへきにいつか千年ゝ我はへたるそさ給にかけるかたの人になりていへる心也又晉王質か木こりに行て仙人の棊をうつをしはし見て郷里に歸るに七世の孫にあひたる也つかへたる斧の朽たる事もありなの〻えのくちたる事をも仙家のかたによめり

露なから折てかさゝん　菊は仙家の花なれは露なから折てかさして老せぬ秋の行末久しかるへくさ也露のまに千年をふるなさいへは露なからさ也

うへし時花まちさをに　花見んとてうへし時はさくををそしさ待つるに今かくうつろふ秋にあふへきさは思はさりしさ也

秋風のふきあけに　秋かせの吹上の白菊は花にてあるかあらぬか波のよするかさうたかひ給へるは今花を見るめの奇異なる所をほめんとて也秋風は吹上さいはんため也風をあへしらひて波のよするかさ也（屋正廻注之板）吹上濱いたく吹て濱の眞砂を吹上るか面白きさいへり定家卿古今十首の其一也

ぬれてほす山路の菊の露のまに　仙家の菊を分る人の露に衣のぬれたるをほすまに千年をへたる事のあるへきにいつか千年ゝ我はへたるそさ給にかけるかたの人になりていへる心也又晉王質か木こりに行て仙人の棊をうつをしはし見て郷里に歸るに七世の孫にあひたる也つかへたる斧の朽たる事もありなの〻えのくちたる事をも仙家のかたによめり

是貞のみこの家の歌合のうた　きのとものり

露なから折てかさゝん菊の花れいせぬ秋の久しかるへく

寛平御時きさいの宮の歌合の歌　大江千里

うへし時花まちをにありし菊うつろふ秋にあはんとや見し

おなし御時せられける菊合にすはまをつくりて菊の花うへたりけるにくはへたりける歌吹上の濱にきくうへたりけるをよめる（紀伊國）　菅原朝臣（北野の御事也）

秋風のふきあけにたてるしら菊は花かあらぬかなみのよするか

仙宮に菊をわけて人のいたれるかたを讃る　素性法師

ぬれてほす山路の菊の露のまにいつかちとせを我はへにけん

菊の花のもとにて人のひと待るかたをよめる　とものり

花見つゝ人まつ時は　菊の
花見つゝ人まつ時はくる
人の白妙の袖かと菊のあ
やまたるゝと点にかける
人になりてよめる也白妙
の袖は白き衣の袖也是は
陶潛といふ人九月九日
に酒なくて籬下に菊をも
てあそびて冷然としてゐ
たるに王弘といふ人の使
白き衣着たるか瓶に酒を
いれてもてきたりし事を
思ひよそへてよめり朗詠
に王弘使立二晩花前一
伊物に「紅に匂ふかうへのしらきくは折ける人の袖かともみゆといふ歌も白衣の容をたもへると見ゆ（伊物此歌之事仮物かたり歌）
ひともとゝ思ひしを池の底にも見ゆれは興してたれかうへたるといへり是も歌に菊さはなし
秋のきく匂ふかきり　世ははかなき習ひなれは菊の匂ふ限はかさして心をなくさめんといへり
心あてにおらはや　菊の咲たるに初霜の白く置まかへるをいつれとも見わかれは推量して折へきと也おらはやたらん
は思ひわつらひたる心也おきまさはさるは置まかへるをいふまさはすまよはす同し菊は霜にほこるさゝへり千草萬木のし
ほみし比さかりを見する花也朗詠に　蘭蕙兆嵐摧レ紫後蓬萊洞月照レ霜中といへり（ランケイチョウランテチ　ライトウノテラス　シモナカ）
いろかはる秋のきくをは　菊はうつろひて紫は色のうつくしけれはひとせにニたひ匂ふさかりをみると也色かはるはうつ
ろふをいふ伊物に神無月つこもりかた菊の花うつろひさかりなるにさ有是はうつろひて二度盛なるにはあらすさかりに又

花見つゝ人まつときはしろたへの袖かとのみうあやまたれける
大澤　嵯峨にあり
おほさはの池のかたに菊うへたるをよめる
ひともとゝれもひし花をおほ澤のいけのうこにもたれかうへけん
世の中のはかなき事を思ひけるゝりに菊の花をみてよめる
つらゆき

秋のきく匂ふかきりはかさしてん花よりさきとしらぬわか身を
しらきくの花をよめる　凡河内躬恒
心あてにおらはやおらん初霜のをきまとはせるしらきくの花
是貞のみこの家の歌合のうた　よみ人しらす
いろかはる秋の菊をはひとゝせにふたゝひにほふ花とこそみるイ
伊物に「紅に匂ふかうへのしらきくは折ける人の袖かともみゆといふ歌も白衣の容をたもへると見ゆ（伊物此歌之事仮物かたり歌）
ひともとゝ思ひしを池の底にも見ゆれは興してたれかうへたるといへり是も歌に菊さはなし
秋のきく匂ふかきり　世ははかなき習ひなれは菊の匂ふ限はかさして心をなくさめんといへり
心あてにおらはや　菊の咲たるに初霜の白く置まかへるをいつれとも見わかれは推量して折へきと也おらはやたらん
は思ひわつらひたる心也おきまさはさるは置まかへるをいふまさはすまよはす同し菊は霜にほこるさゝへり千草萬木のし
ほみし比さかりを見する花也朗詠に　蘭蕙兆嵐摧レ紫後蓬萊洞月照レ霜中といへり（ランケイチョウランテチ　ライトウノテラス　シモナカ）
いろかはる秋のきくをは　菊はうつろひて紫は色のうつくしけれはひとせにニたひ匂ふさかりをみると也色かはるはうつ
ろふをいふ伊物に神無月つこもりかた菊の花うつろひさかりなるにさ有是はうつろひて二度盛なるにはあらすさかりに又

111956

秋を置て時こそ　菊のうつ
ろふまゝに色のまさりて
みゆるは秋より外にも花
の盛の時あると也是は殘
菊さきこゆ秋部に入ると
いへとも秋の歌にはかや
うには詠すへからす口訣
さきうめし宿し　菊の咲そ
めし宿のかはりぬれは色
さへうつろひたると也う
つろひは色のかはるにそ
へて移徙の心也
さほ山のはゝその　紅葉の
散へきを反さへ見よとて
月の照ゝと也へみはへし
といふ今は詠すへからす
おくやまのいはかき　てる
日の光り見ぬらて奥山に
籠りゐて岩垣紅葉のちるへきに我身をたとへていへり（顯正ノ義）岩垣紅葉は山ゝなさに石をつみて垣にしたる所にある紅葉也岩垣沼（ヌノ）
いはかき清水に同し天子を見奉ぬを照日の光みる時なくてといへり
たつた川紅葉　立田川ゝ紅葉のみたれて水のすきまなくなかるゝは錦をしけるかことくみゆるを渡らは中絶なんと也口訣

仁和寺に菊の花めしける時に歌うへて奉れと仰られけれはよみて
奉ける　平貞文
秋をゝきてときこそ有けれ菊の花うつろふからに色のまされは
人の家なりける菊の花をうつしうへたりけるをよめる
つらゆき
さきうめし宿しかはれは菊のはないろさへにこそうつろひにけれ
題しらす　よみ人しらす
さほやまのはゝその紅葉散ぬへみよるさへ見よとてらす月かけ
宮つかへ久しうつかうまつらて山里にこもり侍けるによめる
藤原關雄（眞夏子齋院長官號東山進士禪林寺彼菊宅也）
おくやまのいはかき紅葉ちりぬへしてる日のひかり見るときなくて
題しらす　よみひとしらす
たつた川紅葉みたれて流るめりわたらはにしき中やたえなん

たつた川もみちは流　立田川に紅葉のなかれ出るを見て水上の三室山に時雨ふるらしと也家隆卿三室の山に嵐ふくらしとよみてんといへるを定家卿嵐は心あさかるへし時雨こそ心ふかけれといへり口訣

こひしくは見ても　戀しくは見ても後に忍ふへき落葉をあへなく山下風のかせふきなちらしそと也口訣

秋風にあへすちり　秋風にこらへすちる紅葉の行衛定ぬかことく我身の成たる事の悲さよと也あへすは不堪なり

秋は來ぬもみちは宿に　紅葉は宿にふり敷たる道ふみ分てとふ人はなきに秋はきぬと也問人はなしといふに對して秋は來ぬといふにや此歌口訣

ふみわけてさらにや　紅葉の降かくしたる道と見なから忘かたけれはふみ分ていまさらにとふへきと也

秋の月山へさやかに　おつる紅葉の敷を見よとてにや月の山へなさやかにてらすらんと也

ふく風のいろの千くさ　吹風の色のさま〳〵に見えつるは秋の木葉のちりましれはといふ風は目にみえぬ物なれと物にふれて其いろある也

此うたはある人文武天皇ならのみかとの御歌なりとなん申す

たつた川もみちはなかる神なひのみむろの山にしくれふるらし

又はあすか川紅葉はなかる此歌不レ註二人丸歌一他本又同

こひしくは見てもしのはんもみちはをふきなちらしそ山おろしのかせ

秋風にあへすちりぬるもみちはのゆくゑさためぬわれそかなしき

秋は來ぬ紅葉はやとにふりしきぬみちふみわけてとふ人はなし

ふみわけてさらにやとはん紅葉はの降かくしたるみちと見なから

秋の月山へさやかにてらせるはおつるもみちのかすを見よとか

ふく風のいろのちくさにみえつるは秋の木のはのちれはなりけり

せきを

霜のたて露のぬき　霜のたて露のぬきにて山の錦を織れるがよはけれはにや破れやすきといへり世上の習ひになそらへて此錦もなれはかつちるといへり霜露のたてぬきは紅葉を錦といふに付て也　織レ霜織レ露三秋錦と有

雲林院は淳和天皇の離宮也仁明天皇に處分し奉ちる御養子也次に常康親王に處分し給ふ本堂といふは彼親王の堂也其後御願寺に申なす天暦の御時實性僧都を別當になし給ふ御願寺塔なとたてられけり依レ勅吳竹を植ふ大靈驗千手觀音像あり東西七十三丈南北七十三丈也雲林院は紫野に有舟岡の東からすきかはなの近所うちいといふ所なり

わひ人のわきて立よる世に住侘たる物の立よる木の下は粗む陰なく紅葉のちるとわかたのめる人によせてよめる也託際

なきといふ心なりわひ人は世に住侘たる人也たのむ陰は雨なとにぬれ下とて木陰に立よる心をたのむ陰といふ侘人このみよむへからす「つくはれのこのもかのもにかけはあれと君かみかけにます陰はなし

もみちはのなかれてとまる　波は白き物なれと紅葉のなかれとまるみなとには紅にう波の立らんと也立田川は詞書にゆつりて歌にもてにみえす

ちはやふる神代も聞す　川に散しきたる紅葉の下を水のくゝりてなかるゝなくれなゐにくゝるといへり紅葉とはあらはさす

霜のたて露のぬきころよはからし山のにしきのをれはかつちる

うりんゐんの木のかけにたゝすみてよみける　僧正遍昭

わひ人のわきて立よるこのもとはたのむかけなく紅葉ちりけり

二條后の東宮のみやす所と申ける時に御屏風に龍田川に紅葉なかれたるかたをかけりけるを題にてよめる　ろせい

もみちはのなかれてとまる湊にはくれなゐふかきなみやたつらん　業平朝臣

ちはやふる神代もきかすたつた河からくれなゐに水くゝるとは

して紅に水のくゝるを神代もきかずといへるなり蘆鴨なとの水をかつくなくゝるといふ也潜字也此歌伊物には御子たちせうえうし給ふ所にまうてゝたつた河のほとりにてよめるよし見えたり此集の百書には二條の后の御屏風に立田川に紅葉なかれたるかたかけるを見てとありいつれかまことならん不審口訣　業平歌に

是貞のみこの家の歌合のうた　としゆきのあそん

我きつるかたもしられすくらふ山木々のこのはのちるとまがふに

たゝみね

かみなひのみむろの山を秋ゆけはにしきたちきるこゝちこそすれ

北山に紅葉おらんとてまかれりける時によめる

貫之

見る人もなくてちりぬるたく山のもみちはよるのにしき成けり

秋のうた　かねみの王

たつたひめたむくる神のわれはこそ秋のこのはのぬさとちるらめ

是は心詞かけたる所なき歌也又寛平宮瀧の御幸に在原友于歌に「時雨には立田の川もうみにけりからくれなゐに木葉くゝりて此歌は時雨に立田川を染させ落葉をくゝるとよめり只同事也友于は行平卿息也詞か歌を掠讃り」

我きつるかたもしら　暗部山の木々の紅葉のちりまがふにわかきつるかたもしられすと也口訣

かみなひのみむろの山　三室の山を秋ゆけは紅葉のくれなゐに見ゆれは錦をたちきたる心ちのするとなり神南備三室二の名所大和也

見る人もなくてちり　錦は色のめてたき物なれとよるやみに着たるは曲なき事なれは夜るの錦は曲なき事にいへり本説

朱買臣か身貧にして薪をこりけれとも文を腰にはさみて學問せし也つねに帝にまいりて會稽山の大守になりて故郷に歸るに史記二富貴不レ歸二故郷一着レ錦如二夜行一といへる古事也

たつたひめ手向る　立田姫の手向する神のあれはにや紅葉をぬさと散せると云ぬさとは旅行の時道のほとりの神に手向る物をのといふ所にすみ侍ける時紅葉をみてよめる

つらゆき

秋の山紅葉をぬさとたむくれはすむわれさへろ旅こゝちする

神なひ山を過て立田河をわたりける時に紅葉のなかれけるをよめる

きよはらのふかやふ

神なひの山をすきゆく秋なれはたつた川にろぬさはたむくる

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　藤原のおきかせ

しらなみに秋のこのはのうかへるをあまのなかせる舟かとろ見る

たつた川のほとりにてよめる　坂上是則

紅葉々のなかれさりせはたつた川水の秋をはたれかしらまし

志賀の山こえにてよめる　春道列樹主殿頭新名子壹岐守

紅葉々のなかれさりせは　龍田川に紅葉のなかれすは水の秋を知人あるましきと也

志賀山越　北白川の瀧の傍よりのぼりて如意の嶺越に志賀へ出る道也志賀山越は春にかきらすいつもする事也但堀川院次也色々の染たる紙を切てちらす又金銀米鍍なとをもちらすなり立田姫は秋なつかさる神也道のほとりの神は道祖神ともさへの神とも手向の神ともいへり紹註義　手祭幣とも書この幣みてくらともにきてともいふ

秋の山紅葉をぬさ　暮行秋の山の紅葉をぬさと手向るかことくちらして見ゆれは此山にすむ我さへ旅の心ちすると也

神なひの山を過ゆく　龍田川に紅葉のなかるゝは神なひ山をすきゆく秋の手向るぬさにてあると也もみちともいはて秋のたむくるぬさとはかりいへり例の百書にゆつる也紹註

しらなみに秋の木葉　舟は木の葉の水に浮るを見てつくれるといへりされは木の葉のうけるを舟かとみるといへり此集伊せか七條后にをくれ奉る短歌にいせのあまも舟なかしたる心ちしてといへり禁忌也心得へきなり「眞木くたす丹生の川瀬に秋更て一葉なかるゝ赤のろほ舟

紅葉々のなかれさりせは　龍田川に紅葉のなかれすは水の秋を知人あるましきと也

志賀山越　北白川の瀧の傍よりのぼりて如意の嶺越に志賀へ出る道也志賀山越は春にかきらすいつもする事也但堀川院次

耶百首には巻題に出す其例にて六百番歌合に出せり

山川に風のかけたるしからみはなかれもあへぬもみちなりけり
池のほとりにて紅葉のちるをよめる

みつね

山川に風のかけたる　山川になかれやらぬ紅葉は風のかけたるしからみにてあると也風のかけたるしからみ初てよみ出せる也　口訣

風ふけはおつる紅葉　風ふけは紅葉のちるもちらぬ影も清き水の上なれは底にうつりて見ゆると也

たちとまり見てを　紅葉々は雨とふるとも河の水はまさるましけれは今しはし立とまりて見てわたらんと也見てをのをはやすめ字也公任卿九品の中上に心詞さいこほらすして面白き也さかけり

山田もる秋のかり庵　山田守かり庵はかりの庵也鳴わたる鴈の泪や落つらんの歌のやう也「秋田刈かりほもいまたこほれぬにかりかね寒し霜をきぬとも」かりほを刈穂かさいふ人もあれと山田をもるさいひては借庵也後撰にはかりほのいほさありほに出ぬ山田をもると　いまた穂に出ぬ山田をまもるとて藤衣を着て稲葉の露にぬれぬ日はなしと山賤の作毛のしわさをよめる也藤衣はいやしき者のきる衣也父服者の衣をもいふ蔦葉に汐汲あまの藤衣と讃る

かれる田におふるひつち　かれる田にひつちの穂に出ぬは世をあきはてつるかと詠すひつちは刈田に又おふるいねを云粗穂いつれもよむ字也秋果を世を飽によせたり

紅葉々は袖にこき　紅葉々を袖にこきいれて家つとにして帰ん秋はかきりなりと見ん人のためにと也袖にこきいれて詠すへからす　此歌口訣

立田川紅葉々なかる　前に出し人丸の歌也

みやまよりたちくる　山深き谷川よりたちくる水に紅葉のなかるゝ色をみて秋は限りとしると云水の色さいふに紅葉の心ありとしことに紅葉々　年ことに紅葉々ななかす龍田川のみなとや秋のとまりにて有らんと也　口訣

夕つくよをくらの山　なく鹿の聲のうちに秋のくるゝとは冬に成なは鹿のなくましきと也しかのこゑの絶ぬるにて秋の暮をしれると也　口訣　此夕月夜はをくらさいはんたぬ也夕月夜は月始の月也十日あまりの比まて落天に出る月をよみならはせり九月晦日に月あるへからす此歌はをくらさいはんとてゆふつく夜とはつゝけたり小倉山は大井川ちかけれはよむなり顕昭は夕月夜は西の山のはに夕に見ゆるをいふさいへるを定家卿云山の端にかきらす東山より出す夕陽にかはりてそらに見

北山に僧正遍昭とたけかりにまかれりけるによめる　松茸なさをさる事也

紅葉々は袖にこきいれてもて出なん秋はかきりと見ん人のため　うせい法師

寛平御時ふるき歌奉れと仰られけれは立田河紅葉々なかるといふうたを書て其おなし心をよめりける

興風

みやまよりおちくる水の色みてう秋はかきりとおもひしりぬる
秋のはつる心を龍田川にれもひやりてよめる

つらゆき

としことに紅葉々なかるたつた川みなとや秋のとまりなるらん
なか月のつこもりの日大井にてよめる

夕つくよをくらの山になくしかのこゑのうちにや秋はくるらん

ゆるがいふ也上絃なさま　　紅なしつこめりの日よめる　　みつね
てはまことになくらくほ　　道しらはたつねもゆかん紅葉々をぬさとたむけて秋はいにけり
のか也謂勅
道しらはたつれも　紅葉々をぬさとたむけて秋の旅たちいぬる道を知たらは尋ねてもゆかんとあざなしたひたしみたる也

たつた川にしきをり　神な月の時雨を經緯にして立田川に錦を織かくるとも也前には霜のたて露のぬきといへるを是は時雨一つをたてぬきといふ時雨は一方に降定ずふれはたてぬきに思ひよそへたり　錦をりかくは錦織懸る也

古今和歌集卷第六

冬歌

題しらす　　讀人しらす

たつた川にしきをりかく神な月しくれの雨をたてぬきにして　　源宗于朝臣

冬の歌とてよめる　　讀人しらす

やまさとは冬そさひしさまさりけるひとめも草もかれぬとおもへは

やまさとは冬そさひしさはいつとわかれと春秋は花紅葉の便りもあるに冬は木の葉道を埋て人目も草も枯果て淋には時節ことなりといへり口訣

たいしらす

おほそらの月のひかりしかりしきよけれはかけ見し水ろまつこほりけるゆふされはころもてさむしみよしの〻よしの〻やまにみ雪ふるらしいまよりはつきてふらなんわか宿のす〻きをしなみふれるしら雪

おほそらの月のひかりし　雲もなくさえたる空の月影をうつす水は早く氷ぬると也月は陰精なれは先氷ると云へり
ゆふされはころもて寒し　吉野の山に三雪の降やらん夕は衣手寒きと也夕されはい夕也定家卿云ゆふへにしあれはと也春され秋され是におなし春去かく此去はいぬる雁にあらす來る心也萬葉に「三冬霊春去來」はとよめる心也今は冬されの外は詠すへからすと也然とも三冬つき春されくれはなとよむはくるしからすと也三雪は深雪也深山といふと同し「初三雪ふりにけらしな有乳山こしの旅人そりにのるまて兼昌か歌也此歌の三雪は一年に大雪三たひふるといふ説の心となり
いまよりはつきてふら　我宿の淋をしなひかしふる雪の庭の面白けれは今よりは相綴してふれと也繼疑ふれと云也つ〻きて

絶すふれといふ也万葉「此里はつきて霜をく夏の野に我見し草は紅葉たりけり」同「我宿の押花を露に手ふれわきもこちらまくも見ん」万葉註すゝきをしなみはすゝきをしなひかすゝなり

ふる雪はかつそけぬらし降つもりし雪は且々消ぬらん山の瀧つせ音のまさりて聞ゆるは也山の瀧津瀬はたぎる瀬と云湍といふ字也又瀧をたきつせともいふつはやすめ字也又川の中に殊にたきりておつる所を瀧津瀬といふ小町歌に「おろかなる泪ぞ袖に玉はなすわれはせきあへずたきつせなれば只瀧なればさいはんはたましぬなくや」万葉「岩もとたきり行水」「たきつ心をせきそかれつるなとよめり」註

この川に紅葉々なかる　谷川の岩のはさまなどに紅葉のなかれとまるか今なかるゝは深山の雪けの水のまさるにそあるらしと也雪消水也雪げの雪は雪のふらんする雲也雪氣の空になし」万葉「君がため山田の澤にゑくつむと雪けの水にもすそぬらしつ」註

ふるさとはよしのゝ山し　吉野の山の近き故郷なれは日一日も深く雪のふらぬ日はなしと也此古里はならの京なとより思ひやりてよめる歌なるへし又天武天皇すみ給へは吉野を古里といふへし新盛歌に「古里は春めきにけりみよしのゝみかきかはらを霞こめたりみ雪は深雪とも太雪と書り

わかやとは雪ふりしきて　雪ふりしきたるをふみ分て問人なけれは宿の通路絶たると也

雪ふれは冬こもり　雪ふれは草木の埋れて冬籠せるも春にしられぬ花の咲と也草木の霜雪に埋れたるを冬籠といふ「咲や此花冬こもりよりよみ出したり

ふる雪はかつそけぬらしあし引のやまのたきつせをとまさる也

この川に紅葉々なかるおく山の雪けの水ゐいまゝさるらし

ふるさとはよしのゝ山しちかけれはひとひもみゆきふらぬ日はなし

わかやとは雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しなけれは

冬の歌どてよめる　紀貫之

雪ふれは冬こもりせる草も木も春にしられぬ花ゐさきける

しら雪のところも分す　千草万木ならぬ處にも白雪の降しけは花の咲と見えぬると志賀山越の有さま也

みよしのゝ山のしら雪　吉野郷の寒く成まさるは吉野山に雪の降つもるらしと也

うらちかく降くる雪は　末の松山を波のこすかと浦近く降くる雪は見ゆるは也松山に波のこゆるは契のかはる事によめり此集東歌に「君をゝきてあたし心を我もたはと云歌よりとされこれり

みよしのゝ山の白雪ふみ　雪ふみ分て入にし人の音つれのなきは何となりたるそなと心もとなくもひたるよしなり

しら雪の降てつもれる　雪のふりつもりたる山里を思ひやりて住人もやたもひきゆらんといへり思ひきゆるは思ひたゆる心也思消然といふは消然は愁の貌也たもひたえて愁へたる心なれは思ひのまさるらんといへり

雪ふりて人もかよはぬ　雪に人もかよはぬ道のことく跡もなく思ひきゆらんと也跡はかもなくはかはそへ字なり淵はかも只

志賀の山こえにてよめる　紀秋みね　秋岑未考

しら雪のところもわかすふりしけはいはほにもさく花とこそ見れ

ならの京にまかれりける時にやとりける所にてよめる　坂上是則

みよしのゝ山のしら雪つもるらしふるさとさむくなりまさるなり

寛平御時きさいのみやの歌合のうた　藤原興風

うらちかく降くる雪はしらなみのすゑのまつやまこすかとそみる

壬生忠峯

みよしのゝ山のしら雪ふみわけていりにし人のをとつれもせぬ

しら雪のふりてつもれる山里はすむひとさへやおもひきゆらん

雪のふるを見てよめる　凡河内みつね

雪ふりて人もかよはぬ道なれやあとはかもなくおもひきゆらん

雪のふりけるをよみける　きよはらのふかやぶ

冬なから空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらん

雪の木にふりかゝれりけるをよめる　つらゆき

ふゆこもりおもひかけぬをこのまより花と見るまて雪うふりける

やまとのくにゝまかれりける時に雪のふりけるをみてよめる　坂上是則

あさぼらけあり明の月とみるまてによしの〻さとにふれるしら雪

題しらす　よみ人しらす

けぬかうへに又もふりしけ春かすみたちなはみ雪まれにこそ見め

梅の花それとも見えすひさかたのあまきる雪のなへてふれゝは

濃き也是にはなし跡かたもなき心也今此詞好みよむへからす禁忌にわたる詞也此歌口訣

冬なから空より花雪のあなたは春にあるやらん空より花の散くるを雪を雪ともいはていへり

ふゆこもりおもひかけ　冬ともりて花なと思ひもふちぬに花と見ゆるまて木のまより雪のふると也

あさぼらけ有明の　有明の月かとみるまてに吉野の里に雪の降たるを也うす雪の降たる詠成へし朝開朝期夜のほの〳〵と明る也定家卿古今秀歌十首の内也口訣

けぬかうへに又も降　春霞の立ならはまれにこそ見るへき雪なれは消ぬか上に猶降重れよと也

梅の花それともみえす　空かきくもり雪のなへてふれは梅花にまかひてそれとも見えす色のわきかたきを也是はうす雪なとの花に降ましりていつれとなく面白き心也あまぎるの清濁いつれもくるしからす雨説也天霧ヒ曇空のかきくもる心也

篇一渉のこと君をあひ見てあまきらしふりくる雪は消ぬへくれも時ほゆ同「棚霧合雪もふらぬか梅の花さかぬはかりもうへてたにみん同「うちきらし雪はふりつゝしかすかに我家の園に鶯のなく同「うちなひき春去くれはしかすかにあき雲霧合雪はふりつゝあまきらし　棚霧合　うちきらし　あま雲きりあひいつれも同心也

花の色は雪にましり　花の香をたに匂へ色は雪にましりていつれとも見分すとも人の知へきやうにと也梅といはて花とはかりいふ

梅のかのふりなける　梅の香の色のまかふこと〻く雪にまかはゝ誰かこと〻く分別して折へきそ匂へは花はかくれなくてわかきやすきと也口訣

雪ふれは木こと〻に花　雪のふれは木毎に花の咲てみゆれはいつれを梅と分てはるへきそと也木毎にを梅といふ文字といへと是は自然と見えたり此歌上下かけあひて末代の人よみ出ん事かたかるへし梅字木毎にとよめり俊はいへり口訣

わかまたぬとしは　我待ぬ年は隣ちかくきぬれとかれにし人はをとつれぬと也冬草は枯にしさいはんとて也

あらたまのとしの　年のたはりに雪もわか身もふりまさると年たけたる人は思ふへきとなり此説口訣より

此うたはある人のいはくかきの本の人丸かうたなり

梅の花に雪のふれるをよめる　小野たかむらの朝臣　大弐岑守子

花の色は雪にましりてみえすともかをたにはへひとのしるへく

雪のうちの梅の花をよめる　きのつらゆき

梅のかのふりをける雪にまかひせはたれかとと〻わきておらまし

ゆきのふりけるを見てよめる　紀とものり

雪ふれは木こと〻に花ろ咲にけるいつれを梅とわきてをらまし

物へまかりける人をまちてしはすの晦日によめる　みつね

わかまたぬとしはきぬれと冬草のかれにし人はをとつれもせす

としのはてによめる　在原元方

あらたまのとしのをはりに成ことに雪もわか身もふりまさりつゝ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　よみ人しらす

わかまたぬとしはきぬれとかれにし人はをとつれぬと也冬草は枯にしさいはんとて也

あらたまのとしの　年のたはりに雪もわか身もふりまさると年たけたる人は思ふへきとなり此説口訣より

雪ふりてとしの暮ぬる時にこうつねに紅葉ぬ松も見えけれ　はるみちのつらき

年のはてによめる

きのふといひけふと暮してあすか河なかれてはやき月日なりけり

歌奉れとおほせられし時によみて奉れる　紀つらゆき

ゆく年のおしくもある哉ますかゝみ見るかけさへにくれぬとおもへば

にいひかけて流れて早き月日にてあるとなり一年を昨日今日明日三日にいひなす事玄妙にことはりやすらかにきこえて聞

艶なる歌也

ゆく年のおしくもある　鏡に見ゆる我影さへ老に暮ぬると思へば暮ゆく年のおしくもある哉と也老ゆくさゝに暮ぬる年のお

しくある事のますと示ますかゝみは武登鏡（マスミノカガミ）を略したる也又十寸鏡ともいへり老年の歳暮によせたり

雪ふりてとしの暮ぬる　雪ふりて年暮ぬる時に松はどきはにつねに紅葉せず

猶みどりなるみさをのあらはれ見ゆると也貞松（アラハレノサムキニ）彰（ハエ）歳寒（サムキニ）一忠臣見（ハエ）ニ國危（コキニ）さいふ心なり

きのふさいひけふと　昨日今日と暮し明日を飛鳥河

わかきみはちよにや　君は千世にや千世なかされゝ石の岩保となるまで久しくましませとなり千世にとよみ切てやちよとよむといふ說もありさゝれいしは小石（細石と書）波のすこし立をさゝら波さいひすこしある水をさいれ水さいふいはほと成（十吟抄）てとは砂長爲レ巖（ナガイハオトナレ）さいふ心也苔の生るをむすさよりも巖となるはかりにては巖のたよりなけれは苔のむすとうへたり歌にはかゝる事おほかり此歌拾遺集には安法法師か歌也

わたつ海のはまの眞砂　かきりなき濱の眞砂をかそへて君か千年の數にせんと也（躍正）わたつ海はうみの總名也濱といはんとてなり此「やなか行濱の眞砂と我戀をあにまさらめやおきつしまもりやなかゆくとは八百日行濱と書只濱の眞砂と同事也數おほかる事によめり

しほの山さしての磯に　指出磯にすむ千鳥も君か代を八千世と鳴と也千鳥のなくこゑちよ〳〵となくやうなればいへり鹽の山指出磯皆甲斐國の名所也

わかよはひ君かやちよ　老たる年を君か八千代にとりそへてとゝめ置てもひ出にすへきと也

かくしつゝとにもかく　かくし過しつゝとにもかくにも我もなからへて君かやちよにあはまほしきと也日談

古今和歌集卷第七

賀歌

題しらす　讀人しらす

わかきみはちよにやちよにさゝれ石のいはほとなりてこけのむすまで

わたつ海のはまの眞砂をかろへつゝきみかちとせのありかすにせん

しほの山さしての磯にすむ千鳥きみか御代をはやちよとろなく

わかよはひ君かやちよにとりそへてとゝめをきてはおもひてにせよ

仁和の御時僧正遍昭に七十の賀給ひけるときの御うた

かくしつゝとにもかくにもなからへてきみかやちよにあふよしもかな

ちはやふる神やきり　酌の切けん杖をつく故に千年の坂もこゆへきと也杖をほめんとて神やきりけんと云杖の字背字にゆつる千年の坂も越ぬへら也とは杖をつくといふに付てこえかたき千とせの坂をとゆへきと云たとへはうぬのおく山けふこえてといふことくにちとせを過ん事ありかたけれは年のこゆるによせて坂にたとふる也

ほりかはのたほいきうち君

昭寛公貞観十四年右大臣三十七右大將十七年四十さくらはなちりかひ　春の終んといふ道まかふはかりに櫻花ちりかひかさ曇れと也まかふは紛字也花のちりて老の來る道をきさはせと云也「又と秋と行かふ空とよめるもゆきちかふ空也かにはかりにといふ詞也万葉にかにかれといふ詞いつれも同心也俊成定家此かにといふ詞を賀に詠する其興あるといへり是は自然の邪なり　頭注秘抄文藻

かのの記の山のいはれ　鹿の尾の山の岩間を求てたつる鶴の白玉は君か千代の數にてあると也岩根にしたかひて岩のまゝに頭注

たつるみをめておつると云　死　を書いつくの鶴のたち玉にても平世の數とよむへけれと是は大井にての賀なれにたより

ある上に鹿山といふ名もかたしくよせあれは歌はかやうによめるかよろしとする也

仁和のみかとのみこにたにしましけるときに御おはのやうちの賀にもしろかねをつくれりけるをみてかの御おはにかはりてよめる　管正遠朝臣

ちはやふる神やきりけんつくからに千とせのさかもこえぬへらなり

ほりかはのたほいきうちさみの四十賀九條の家にてしける時によめる　在原業平朝臣

さくらはなちりかひくもれ老らくのこんといふなる道まかふかに

さたときのみこのおはのようちの賀を大井にてしけるによめる　紀これをか　懐紙

かめのおの山のいはねをとめて落るたきのしらたまちよのかすかも

貞保　二品式部卿清和第一號三南宮　母二條后延長二年薨

いたつらにすくる月日　徒に過る月日は何とも覺さるに花見る春はすくなきやうに覺ると也嚴時春日少と云唐春の詩の心同し　頭注

むもほえての時は常に過る月日はむほかるやうに覺えて花みる春の心は月日のすくなきやうに覺るといふ一禪御説むもほえての清濁の義濁説面白くやと也定家卿説も是に同し　頭注秘抄

朔詠には過る月日はむほけれとゝあり

本康　仁明第七一品式部卿號八條宮延喜元年薨世從四位下紀靜子名虎女日記

春くれはやとにまつ咲　宿に早く咲梅の花を君かちとせのかさしとみるとなり

いにしへにありきあら　今君に千年を初めてためしにせんとなり本字をよめり

ふして思ひおきて　我君のためにおきふし万代と祈る事は神そ知給はんと也

つるかめもちとせの　君か代は盛期もなくむもふ心にまかせんと也

さたやすのみこのきさいの宮の五十賀奉りける御屏風に櫻の花のちるしたに人の花見たるかたかけるをよめる　藤原のおきかせ

いたつらにすくる月日はたれかほえて花見てくらす春うすくなき

もとやすのみこの七十賀のうしろの屏風によみて書ける　紀貫之

春くれはやとにまつさく梅の花きみかちとせのかさしとそ見る

いにしへにありきあらすはしらねともちとせのためし君にはしめん　素性法師

ふして思ひおきてかるふる万代はかみうしるらんわかきみのため　藤原三善か六十賀に謂ける　在原しけはる

つるかめもちとせのゝちはしらなくにわかぬこゝろにまかせはてゝん

よろつ代なまつにそ　万代
なまつに君をいはひつる
と云松を待によせたり
内侍のかみ　尚侍滋子内大
臣高藤二女奉レ養二延喜
聖主一延喜十七年従二位
右大將藤原朝臣　大納言右
大將定國延喜六年同年七
月薨四十

春日野にわかなつみ　春日
野に若菜をつみ君を万代
と祝ふ心は神そ知給はん
と也毛詩に頌は世をほめ
て神につくるよし有祝言
なから神祇によせたるを
祝ひ歌と云

山高み雲ゐに見ゆる　心の
ゆきてはるは花をやつさぬ也百般醫折一時情同心也此歌之作者井歌之註口訣
めつらしきこゑならなくに　くりこさに郭公とをのか名をよふこゑの珍しけなきを多年きけともあかねはいかなる事そと云
作者以下口訣

住の江の松を秋風　登うちそふるといへる玄妙也經信卿一興津風吹にけらしな住吉の松のしつ枝をあらふ白波此本歌をよく
とれりといへり打の字いたつらなるが眼の入たる打也口訣

此うたはある人在原のときはるかともいふ

よしみねのつねなりかよろちの賀にむすめにかはりてよみ侍ける

うせい法し

よろつ代をまつにろ君を祝ひつるちとせのかけにすまんと思へは

内侍のかみ右大將藤原朝臣の四十賀しける時に四季のゑかけるう
しろの屏風にかきたりけるうた

春日野にわかなつみつゝよろつよをいはふこゝろは神うしるらん

山高み雲ゐに見ゆるさくらはなこゝろのゆきておらぬ日うなき

夏

めつらしきこゑならなくに郭公こゝろのとしをあかすもある歟

秋

住の江の松を秋風ふくからにこゑうちそふるおきつしらなみ

ちとりなくさほの川霧　千
鳥のなくさほの川きりの
立所分山の木葉もいろま
さるとも也作者口訣

秋くれといろもかはらぬ
ときは山によそのもみ紅葉を
さそひて風のかしつるとも
なり作者口訣

しら雪の降しく　雪のふる
を花と見花のちるを雪と
みる似たれは也口訣

春宮のむまれ　文彦太子保明親王延喜三年誕生四年二月十日立二太子一十六年十月元服廿三年三月薨廿一
みれ高さかすかの　春宮の生れ給へるを春日の山に出る日はさ日にたとへてくもる時なく照すへきさ也口訣

ちとりなくさほの川霧立ぬらし山の木の葉もいろまさりゆく

秋くれといろもかはらぬときはやまよろい紅葉をかせろかしける

冬

しら雪の降しくときはみよしのゝやましたかせに花ちりける

春宮のむまれ給へりける時にまいりてよめる

典侍藤原よるかの朝臣

みねたかきかすかの山にいつる日はくもるときなくてらすへらなり

たちわかれいなばの山の
立別いぬるとも人の待と
きかばやかて歸こんとい
へりわかれていなばとそ
へ峯におふる松を待にい
ひなせり是は因幡國の任
果て上洛の時よめりいな
ばの山は因幡山也丹後に
あればたこの浦武藏にあ
ればむさし野といふかこ
とし俊成卿此歌あまりに
くさり過てよろしからさ
るを今歸りこんといひなかしたる所幽玄也といへり口訣

古今和歌集卷第八

離別歌

題しらす　　在原行平朝臣

たちわかれいなばの山の峰におふるまつとしきかはいまかへりてん
よみ人しらす

すかるなく秋の萩原あさたちて旅ゆくひとをいつとかまたん
かさりなき雲ゐのよそ　限なく遠く別るゝとも人に心をくらすましきと也人を　にをかすつきそひゆく心なり定家卿云身
をのゝちふるかみちの國のすけにまかりける時にはゝのよめる

すかるなく秋の萩原　わかるゝ折しもすかるなく萩原を朝立行旅人をいつ歸らんすると待へきと名殘をしたひいへるなりす
かるは鹿の別名也日本紀に槃瀛須弭歷と書すかるとけさそりといふ蜂也東國には蜂をすかるといふさそ蜂「春されはすか
る鳴野の郭公ほと〳〵妹にあはすきにけり此歌は春といひ郭公といへは鹿の心にかなはす郭公はほと〳〵といはんとて
也秋の萩原になかん鹿うたかひなし堀河院百首思房「色見えて身にもしむ哉すかる鳴小萩か原の秋の夕風「すかるふす野
中の草やふかゝらん行かふ人の笠の見えぬは此二首鹿ときこえたり

かきりなき雲ゐのよそ　限なく遠く別るゝとも人に心をくらすましきと也人を　にをかすつきそひゆく心なり定家卿云身
は野山の末に有なから心に人をくらせぬ心也といへり後の字をくるとよむ此歌大和物語には詞書あり遍昭出家の時山
々寺々にをこなふとてかくれありきし時五條后御使をつかはして待けるにおさなきものとも忘られ待らぬよしなと申て
よめるよし有口訣

たらちねのおやの守り　子の別ゆくを親の守りとあひそふる我心をはせきなとめそと也一禪抽說たらちねは父母に通するなり垂乳根　乳血根口訣

けふわかれあすはあふ　あすは遠身を近江によそへたり露は夜更てしけくをく物なれは袖のぬるゝを露けきといふ

かへる山ありとはきけど　ゆく末に歸山有とは聞けとも立別いなはいかに戀しくあらんすると也卷霞は立といはんため也口訣

おしむから戀しき　名殘おしむから戀しき物を立出たるのちはいかなる心ちのあるへきうと也これも白雲をたつといはん料なり

わかれてはほとをへたつ　別ては程をへたて遠さかると思へはにやかく見なから歸てより戀しきと也かつはかく也

たらちねのおやのまもりとあひうふるこゝろはかりはせきなとゝめり　清生

さたときのみこの家にて藤原きよふかあふみのすけにまかりける時にむまのはなむけしける夜よめる　紀としさた

けふわかれあすはあふみとおもへとも夜やふけぬちん袖の露けき

こしへをかりける人に讀てつかはしける

かへる山ありとはきけとはるかすみたちわかれなはこひしかるへし

人のむまのはなむけにてよめる　紀つらゆき

おしむからこひしき物をしら雲のたちなんのちはなに心ちせん

ともたちの人の國へまかりけるによめる　在原しけはる

わかれてはほとをへたつとおもへはやかつ見なからにかねてこひしき

あつまのかたへまかりける人によみてつかはしける　淳行

いかこのあつのゆき　伊香子

おもへとも身をしわけねはめに見えぬこゝろをきみにたくへてうやる
あふさかにて人をわかれける時によめる　なにはのよろつを　萬雄

あふさかのせきしまさしき物ならはあかすわかるゝきみをとゝめよ
たいしらす　よみ人しらす

からころもたつ日はきかし朝露のおきてしゆけはけぬへきものを
此歌はある人つかさを給はりてあたらしきめにつきて年へてすみける人をすてゝたゝあすなんたつとはかりいひける時にともかうもいはて讃てつかはしける

ひたちへまかりける時に藤原のきみとしによみてつかはしける　寵（デウ）或本無此名　從四位上源精女

あさなけに見へき君としたのまねはおもひたちぬる草まくらなり
きのむねさたかわつまへまかりける時に人のいへにやとりてあか

つき出たつとてまかり申けれは女のよみて出せりける　よみ人しらす

ゑそしらぬいまこゝろみよ命あらはわれやわするゝ人やとはぬと
あひしりて侍ける人のわつまのかたへまかりけるををくるとてよめる　ふかやふ

雲井にもかよふこゝろのをくれねはわかると人に見ゆはかりなり
友のわつまへまかりけるときによめる　よしみねのひてをか　貞岑秀岳　伯清守

しら雲のこなたかなたに立別れ心をぬさとくたく旅かな
みちのくにへまかりける人によみてつかはしける　つらゆき

白雲のやへにかさなるをちにてもおもはん人にこゝろへたつな
ひとをわかれける時によめる

わかれてふことはいろにもあらなくにこゝろにしみてわひしかるらん
まかり申けれは　羈中と書　暇中儀也國司の任におもむく時參内するを云也まかりとはいとまこふをいふ口訣

ゑそしらぬいまこゝろみよ　我忘るゝか人のとはさるへきかえしらす命あらは今に其心見ゆへきと也是は別るゝとて我を忘るへきなといふなたの心はしらす我はわするましきなといへるよし也餘情こもれる歌なり

雲井にもかよふ心の　還くもろひゆく心のたくれれは別るゝ人に見ゆはかり也と也還くもといはむとて雲井にもといへり口訣

しら雲のこなた　白雲を立別といはむため旅にはぬさをちらせは心をくたくにより

白雲の八重にかさなる　しら雲の八重かさなるとも心へたつなと也口訣

わかれてふ事は色にも　別といふ事は色にもあらぬに心にしみて侘しきと也心にしみてといはんとて色にもといへり染の字

をしむさよむゆへ也
かへるやまなにそは　きたりてとゝまるかと思ふにやかてかへれは何そ有てあるかひもなき山の名也と也何そは有ては何そゝ有てと云なり口訣

よそにのみこひやわた　行見るへくもなき身なれはこなたにてのみ戀わたらんと也雲見るを行見るにいひなせり

なとはやまこたかく　君かわかれをおしみて音羽山に郭公のなくによそへよめる

からものゝつかひ　歌の次に註

藤原かねもち　兼茂左中將利基子參議右兵衛督

もろともに鳴て　蕎もろともに鳴てとゝめよ秋の別のおしくあるにと後撰ここをよせてきりくすにいへるなり

から物の使とはむかし唐高麗口濟より調物奉る時勅使をつかはし給ふこれをから物の使といへり神功皇后三韓をたいらけ給ひし後四年八十艘の舟に寶物をつみて奉る尤奉の御代までは奉る其後は絶々になれり聖德太子攝政給ひしより隋朝へ使をつかはし給ふ是を遣隋使と名付其後唐代にうつりて遣唐使の官をゝき給ふ大使副使判官主典なと官を定めをかれたり連々此使を渡し給ふ承和御門唐使歸朝の時建禮門の前に立て百官以下にほしきまゝにこれを給ひけるとそ延喜御時までは高麗より忘れず時々調物を奉るをなし御代に唐の世ほろびしより使をつかはす事たえて其後商船の往來するはかりなりからものゝつかひは延喜までなり

秋霧のともに立出て　立出て別れなは晴ぬ思ひに戀渡らんといはんとて秋霧といふ

いのちたに心にかなふ　命のあるにより てわかれのかなしきと也口訣

神なひのもり　神南備山は大和に有是は山崎の南に同名あり今はかうなひの森とそいふ

人やりの道ならなくに　人やりの道なられは行憂といひていさ歸らんと也人やりの道は心ならて人のやる也左迁せられてゆく道をも人やりの道といふへしいきうしに行憂きなり一説御説に源氏に柏木の衛門督女三宮か戀奉る嗣に人やりならぬ汨に枕もうくはかりとあり我心となす事は背人やりならぬなり汨思歎戀何にても我とする事也いきうしはいまはこのみ歌へからす

秋きりのともにたち出て別れなははれぬおもひに戀やわたらん　平　もとのり元見亞人右衛門尉

源のさねかつくしへゆあみんとてまかりける時に山崎にて別れし　し　ろ　め白女江口遊女大江玉淵女郎

みける所にてよめる

いのちたに心にかなふものならはなにかわかれのかなしからまし

山崎より神なひのもりまて送りに人々まかりてかへりかてにして別おしみけるによめる　源　さ　ね實信濃守右少將參議舒子

人やりの道ならなくにおほかたはいきうしといひていさかへりなん

いまはてれよりかへりねとさねかいひけるおりによみける

藤原かねもち

したはれてきにし心の　名殘おしさにしたはれて來る身なれは歸るさには道もしられすと也口訣有

かつこえてわかれも　かくこえて別れゆけは逢坂といふは人たのめなる名にてこそあれと也むかしはかくなかつとつかへりかつ〳〵にあらすゆくかは行哉なり口訣

きみかゆくこしの白山　越の白山はしられ共雪のひまく〳〵君か跡をたつねんと也雪のまに〳〵は雪の間々の心也

夕くれのまかきは山と　よるはこえしとて人の宿にさまるへきにと名殘をおしめる也

わかれをは山の櫻に　別る人を我力にはとゝめかたけれは花にまかせたらんと也雪口訣

したはれてきにし心の身にしあれはかへるさまには道もしられす

藤原のこれをかゝむさしのすけにまかりける時にをくりに逢坂をこゆとてよみける　つらゆき

かつこえてわかれもゆくか逢さかはひとたのめなるなにこそありけれ

大江千古千里弟　おほえのちふるかこしへまかりけるむまのはなむけによめる　藤原兼輔朝臣利基子號堤中納言

きみかゆくこしの白山しらねとも雪のまに〳〵あとはたつねん

人の花山にまうてきて夕さりつかたかへりなんとしける時によめる　僧正遍昭

夕くれのまかきは山と見えなゝんよるはこえしとやとりとるへく

山にのほりてかへりまうてきて人々わかれけるつゐてによめる　幽仙法師

わかれをは山のさくらにまかせてんとめんとめしは花のまに〳〵

雲林院のみこの舍利會に山にのほりて歸りけるに櫻の花のもとにて讀る　僧正へんせう

山かせに櫻吹まき　山風に櫻吹まきて花をみたせ人の歸かれて立とまるへきにと也是も名殘をおしみていへり口訣

ことならは君とまる　かくのことく句ふならは君とまるへく句へ歸すは花のうきにてあると是も我ちからなくていへる也雪口訣

あかすしてわかるゝ涙　あかすわかるゝ涙の湖にそへは水まさると川下の人にはみゆらんと也

秋萩の花をは雨に　萩の花を雨にぬらすよりゝ君をはまして別れしと思ふといへり

おしむらん人の心を　雨に我を花よりもおしむらん人の心をしらぬまに秋の時雨と身のふりしと也口訣

わかるれとうれしくも　逢見つれはこゝ別るれ逢ぬさきには何を戀しきさもいふへき郡のゆるましけれは此別れはうれしく

山かせに櫻ふきまきみたれなん花のまきれにたちとまるへく　幽仙法師

ことならは君とまるへく勾はなんかへすは花のうきにやはあらぬ

仁和のみかとみこにれはしましける時にふるの瀧御らんしにおはしましてかへり給ひけるによめる　兼藝法師伊勢少掾古次子或城上郡人

あかすしてわかるゝ泪瀧にうふ水まさるとやしもはみゆらん

かんなりのつほにめしたりける日おほみきなとたうへて雨のいたうふりけれは夕さりまて侍てまかり出侍けるおりにさかつきをとりて　貫之

秋萩の花をは雨にぬらせとも　きみをはましてれしとこそ思へ

とよめりける返し　兼覽王

れしむらんひとの心をしらぬまに秋のしくれと身うふりにける

かねみのおほきみにはしめて物かたりしてわかれける時によめる　みつね

わかるれとうれしくもあるか今夜よりあひみぬさきに何を戀まし

あるを也

あかすしてわかるゝ　涙を　もいはて白玉とはかりい　へる是は今も和歌に詠す　へきか

かきりなく思ふ泊に　限なく思ふ泪にぬるゝ袖は又　あはん日までかはくまし　を也

かきくらしことはふり　かきくらすことくはふれ春　雨にぬれきぬきせて君を　とゝめんを也此ぬれきぬ　は春雨にきせてを也一説御説ぬれきぬとはなき名をいふといへを其來臨たしかならす「われきぬを人にはいはん紫のれす　りの衣うは着なりとも和泉式部か歌なり是はたしかになき名をよめるときこゆ　教長卿云ぬれきぬきせてとは空ことをいふ　君をとゝめんとて雨の降にな歸そなといふは水の事にはあらて雨をかこちとりて此人をやらしを也　思是國歌大系口訣

しぬてゆく人をとゝめん　とゝむるにきかすゆく人なれは櫻花道まとふはかりちれと花を頼ていへり

むすふてのしつくに　山井の水清くてむすふ手ににこれはあくはかりのまぬによせてあかても人にわかれぬるとなりあかて　もの詞をいはんとて上句をいひつゝけたり人丸歌「むすふ手のいはまをせはみにくやまのいはかき清水あかすもあるかな　とあるを本にてよめりこれは貫之第一の秀歌といへり

したのをひの道はかたゝ　おびは腰の兩方へわかれて前にて逢へは帶のことくわかるとも行めくりてあはんとよそへたり　たびは束帶にはうへしたにすれは下帶といふ詞書には束とあり歌には帶とよめりゆきめくりの緣なり

たいしらす

わかすしてわかるゝ袖のしら玉はきみかためとつゝみてうゆく

かきりなく思ふなみたにろはちぬる袖はかはかしあはん日までに

かきくらしことはふらなん春雨にぬれきぬきせて君をとゝめん

しぬてゆく人をとゝめんさくら花いつれを道とまとふまてちれ

しかの山こえにていしぬのもとにて物いひける人のわかれける折

つらゆき

むすふてのしつくににこる山のゐのわかても人にわかれぬるかな

道にあへりける人のくるまに物いひつきてわかれけるところにて

よめる　ともの　り

したのをひの道はかたゝわかるとゆきめくりてもあはんとそ思ふ

あまのはらふりさけ　もろこしのそらすみわたりて

月のさし出たるをふりあ

ふきみれは三笠の山に出

しをもかうかひたる也　ふりさけは万葉に振離

ふりさけは万葉に振離　と書振放ともにふりあふ

のきてみるといふ心也さ

けとあけと同韵也此歌な

とや遠情といふ題の心な

らん長高體の歌也

めいしうとかけれとみやう

ゆうとよむと云りされ

とも本のことくよむへき

にや明州と書仲麿は元正

天皇の御宇靈龜二年八月

遣唐使大伴山守に同船

して學問のために入唐す

其性聰明にして其才高く

成にけれは唐朝にとゝまりて高官に至り唐の大曆五年に卒す日本寶龜元年にあたる時にとし七十三もろこしにて朝衡と改

む此集首書にのせたることく歸朝せんとしけるか又思ひとゝまりて つゐに漢土にて卒す入唐は十六五十六年唐に居住す

古今和歌集卷第九

羇旅歌

安倍仲麿　孝元天皇御子大彦命ノ後古傳云中務大輔船守子

もろこしにて月を見て讀ける

あまのはらふりさけみれは春日なるみかさのやまにいてし月かも

此歌はむかしなかまろをもろこしに物ならはしにつかはしたり

けるにあまたの年をへてえかへりまうてこさりけるを此くによ

り又つかひまかりいたりけるにたくひてまうてきなんとて出た

りけるにめいしうといふ所のうみへにてかの國の人むまのはな

むけしけりよるになりて月のいとおもしろくいてたりけるを見

てよめるとなんかたりつたふる

おきの國になかされける時に舟にのりていてたつとて京なる人の

もとにつかはしける　小野たかむら朝臣

わたのはらやそしま　ほとりもしらぬうなはらの波間にかほく見ゆるしま

わたのはらやそしまかけてこぎ出ぬと人にはつけよあまのつりふね

たいしらす　よみ人しらす

みやこいでゝけふ三かの原いつみ川川かせさむし衣かせやま

ほの〳〵とあかしのうらの朝霧にしまかくれゆくふねをしるおもふ

此歌はある人のいはくかきのもとの人丸かなり

あつまのかたへ友とする人ひとりふたりいさなひていきけり三河國八橋といふ所にいたれりけるにろの川のほとりにかきつはたいきさ申てなかされたる也慈覺大師円仁唐の時也と一禪御説也わたのはらは海をいふ八十島といふ所は淡路にも出羽にもあれど篁隠岐國へなかされたれば只おほき島々をいふやそはたほかる心也數のきはまりなやへ霞八重むくらなといふなり

みやこいでゝけふ三日の都出てけふ三日の原いつみ川の風さむければ衣かせ山と名所をいひつゝけたり三かの原を三日にいひなせり（ミカノ）（イツミ）（カヒ）甚原　泉川　鹿背山　山城名所也　此歌の體今はしかるへからす此歌田部福丸かよむ首途の歌也云々

ほの〳〵とあかしのうらほの〳〵とあくる明石の浦の朝霧にこき出したる舟の島かくれゆくか今はいつくにゆくらんとなかめやりて哀に思ふとなりほの〳〵とは後の明ゆく空のおほろにてほのかにさたかならぬ心なりそれをあけほのといふ也（題註）

島かくれゆく舟をしそおもふとは沖の小島を舟の朝霧にかくれゆくか哀に心はそきをおもふといへりある人明石に島なしといふ明石の沖にぶたこ島くらかけしまいへ島なとあるをしらさる也此歌人丸第一の歌といへり種々の説々あれと貫之海路の旅にこの集にいれたりされと我出たる歌とは聞えす人の海路にこき出てゆく舟をはるかに見をくりてよめると見えたり四條大納言公任卿此歌を九品の上品の上に出せり又此歌を下の心は文武の御子高市皇子十九にて崩し給ふ其無常を詠せるといへりさもや侍らん　此歌優なりては知もしらものなるへし

とおもしろくさけりけるを見て木の陰におりゐてかきつはたといふ五もしを句のかしらにすへて旅の心をよまんとて讀る

在原業平朝臣

からころもきつゝなれにしつましあれははる〳〵きぬる旅をしろ思ふ

むさしの國としもつふさの國との中にあるすみた川のほとりにいたりて都のいと戀しうおほえけれはしはし川のほとりにおりゐてれもひやれはかきりなくとをくもきにけるかなと思ひわひて詠めをるにわたしもりはやふねにのれくれぬといひけれは舟にのりて渡らんとするにみな人物わひしくて京に思ふ人なくしもあらすさるおりにしろき鳥のはしとあしとあかき川のほとりにあろひけり京にはみえぬ鳥なりけれは皆人見しらすわたしもりに是は何とりうととひけれはこれなんみやこ鳥といひけるをきゝてよめる

名にしおはゝいさことはんみやこ鳥わかおもふ人はありやなしやと

たいしらす　讀人しらす

北へゆくかりろなくなるつれてこしかすはたらてろかへるへらなる

からころもきつゝ馴　馴にしつまを都にのこしてはるゝ〳〵としらぬ旅の道をきぬる事よとおもふ由なり常の歌ならは衣の縁の字をはくてあしかるへきにこれは杜若を折句にかけはくるしからす末の句いひのことたる歌也一禪御説都の妻をこふる心也伊物にかれ飯の上に涙をとしてほとふるほと皆此歌を用てあはれかりてなきけるとなり

名にしおはゝいさこと　都と名にはふさりならは我れもふ人はありやなしやといさ事とはんあまりに戀しきにといふ旅ノ戀の心也名にしはゝとは名に負といふ只名に付たゝ心也

北へゆくかりとは　北へ行鴈の打花て鳴ことはりやつれてこし數はたらて歸れはといふ是は滋巻甲斐の國に女と下りけ

るか男死て上るさて歸腦のなくか我身に思ひ合てよめる哀なる歌也

此歌はある人男女もろともに人の國へまかりけり男まかりいたりてすなはち身まかりにけれは女ひとり京へかへる道に鴈のなきけるを聞てよめるとなんいふ

あつまのかたより京へまうてくとて道にてよめる　　ね　と

山かくす春の霞うらめしきいつれみやこのさかひなるらん

てしの國へまかりける時しら山を見てよめる　　みつね

きえはつるときしなけれはこしちなるしらやまの名は雪にうありける

あつまへまかりけるとき道にてよめる　　つらゆき

いとによる物ならなくにわかれちのこゝろほそくもたもはゆるかな

かひの國へまかりける時道にてよめる　　みつね

夜をさむみをく初霜をはらひつゝ草のまくらにあまた旅ねぬ

但馬の國のゆへまかりける時にふたみのうらといふ所にとまりてかれいひ　古さまには只物くふなり　ふ乾飯と書は誤　也内裏に朝餉といふ所有此所にて聞召す御膳なは朝かれいと云又旅に立時駄餉といふは馬に餉をかほせて持たる心也又說旅の飯也

夕つく夜おほつか　櫛筥の蓋をしたるほとは内にはつかなき物なれはふたみの浦はあけて見んと夜の明るによせたり夕月夜はたほつかなきといはんため也玉くしけの玉はほぬて上にかける玉櫛玉垣なとのごとし二見の浦をあけて見んとゝはんとていひつゝけたる歌也

夕さりのかれいひたうへけるにともに有ける人々歌よみけるつゐてによめる　　藤原のかねすけ

夕つくよおほつかなきを玉くしけふたみのうらはあけてこうみめ

これたかのみこのともに狩にまかりける時にあまの川といふ所のかはのほとりにおりゐてさけなとのみけるつゐてにみこのいひけらくかりしてあまの河原にいたるといふ心をよみてさかつきはさせといひけれはよめる　　在原業平朝臣

かりくらし七夕つめにやとからんあまのかはらにわれはきにけり

みこ此歌をかへす〳〵よみつゝ返しえせす成にけれはともに侍てよめる　　きのありつね

ひとゝせにひとたひきます君まてはやとかす人もあらしとそおもふ

狩くらし七夕つめに　狩暮して天の河原に來たれは七夕妻に宿をかちんと云奇異なる作意也つめはつま也一説御說樂ならてはかやうに安々と誰人かよみ侍らん神妙の歌也

ひとゝせにひとたひ　年に一度きます彦星か待七夕つめなれは宿かす人もあらしと也一説惟高のみこ玉さかに出給ふなそへていへり

朱雀院は　三條朱雀の御所也おりゐの帝此院におはします寛平法皇の御事也六十二代の朱雀院にはあらず

朱雀院のならにおはしましける時にたむけ山にてよめる　すかはらの朝臣

このたびはぬさも取あへず手向山紅葉のにしき神のまに〳〵

このたびはぬさも取　此度は御幸の御供にいそかはしさに幣も取あへず手向山の紅葉の錦をぬさ奉ると也まに〳〵は万葉に隨意と書隨ばかりもかげりされは神慮にまかすると也又間々なまに〳〵といふもあり「足引の山のまに〳〵たふれたる枯木はひとりふせる成けり」

たむけにはつゝりの袖もきる〳〵きにもみちにあける神やかゝ〳〵さん　たむけにはつゝりの袖も　手向にはつゝりの袖をも切て心さしを致すべきに紅葉の錦にあける神や返し給はんとまへの御詠の返しのやうによめりつゝりの袖は桑門の着物也羅衣なともよめり直綴なといふ心也つゝりの袖はこのみ詠すべからす源覺僧正の夢に柔性か我第一の歌と申けるとそかたり傳へたる

こゝろから花のしつく我心から花の雫にぬれて憂不干と鳥の鳴らんと也霧を隠せりそほつは少ぬれたるを云曾保津と書

くへきほとときすき　來るへき程時過て待佗てあるになくとゝふの人をとよむると也とよむの詞歌合にわらはるゝ也

波のうつ懶みれは　玉のみたるゝをひろふとも袖にたまるましきと也

たもとよりはなれて　袂の外に玉をつゝむへしや是それとうつせ見んと也

あなうめにつれなる　穴憂目に常なるへくも見えぬ花哉戀しからん香は匂ひてと也あなはあゝ也あな戀しなともいふ萬葉二字梅　烏梅なともかけり

かつけとも波のなかには　風ふくことにうきしつむ玉をかつけとも波の中にはさくられぬと也潛字也かにはさくらはかはさ

古今和歌集卷第十

物名

藤原敏行朝臣

うくひす

こゝろから花のしつくにろはちつゝうくひすとのみとりのなくらん

ほとゝきす

くへきほとときすきぬれや待佗てなくなることゝの人をとよむる　在原しけはる

うつせみ

波のうつせみれは玉ろみたれけるひろはゝ袖にはかなからんや　壬生忠岑

返し

たもとよりはなれて玉をつゝまめやこれなんろれとうつせ見んかし　よみ人しらす

うめ

あなうめにつれなるへくもみえぬ哉こひしかるへき香はにほひつゝ　つらゆき

かにはさくら

かつけとも波のなかにはさくられて風ふくことにうきしつむたま

くら也はれ字をにさつかへりかんは櫻也和名に朱櫻と書櫻桃ともかくには櫻ともよめりきぬの色おもて蘇芳にてうらうす色なるなかは櫻といふ花の色すこしあかゝるへきにこそ口訣

いまいくか春しなければ
春の日數なければ鶯も物思ふへきさよせたり物思ふ時はうちなかめらるれは也

あふからもゝのは　別れん事をかれておもへはあふから物は猶かなしきさなり

あしひきの山たち離　行雲の山立はなるゝことくに宿り定ぬ世にてあると世間不定なうき雲にたとへていへり

みよしのゝよしのゝ瀧　吉野の瀧にうかひ出る泡をか玉のきゆると見つらんと也をか玉の木といふ邪說々あり　古今三ケ大事の一なり御授なりては

秋はきぬいまやまかきのきり〳〵すよな〳〵なかん風のさむさに
かくはかりあふひのまれ　かほど逢日のまれに成ゆく人をいかゝつらしと思はて有へきと也

すもゝの花
いまいくか春しなければはうくひすものはなかめておもふへらなり
からもゝの花
あふからもゝのは猶こう悲しけれわかれんことをかねておもへは
たちはな　をのゝしけかけ小野滋蔭掃部頭
ふしひきのやまたちはなれ行雲のやとりさためぬ世にこそ有けれ
をかたまの木　ともの り
みよしのゝよしのゝ瀧にうかひいつるあはをかたまのきゆと見つらん
山かきの木　よみ人しらす
秋はきぬいまやまかきのきり〳〵すよな〳〵なかん風のさむさに
あふひかつら　つらしとおもはさるへき
かくはかりあふひのまれに成る人をいかゝつらしとおもはさるへき

人目ゆへのちに逢日　人目なはゝかりて逢日のなくてほとをへたらは我つちきさひとのれもひなすへきさ也

ちりぬれはのちは　散て後は芥になりぬる花をさある事も思ひしらてきさふ蝶にて有さ也芥の字也題くたには苦丹也山門無動寺に有さいふ蔦の葉のちいさきに似たりさ云源氏の字治につたこたにとかけり是は紅葉する草の蔦のやうにて木にはひつくさいふ前の說同前也一說くたには岩藤也くたんさて紫色に花咲草也雞蘆さ書

われはけさうひにう　花の色を今朝はしめて見つるあたなる物さいふへきさ也さうひは薔薇さ書うひは初也假名つかひはうねも也

しら露を玉にぬく　さいかにの花にも葉にも糸をかけて白露を玉にぬくさ見えたるさ也

朝露をわけそほち　朝露をわけぬれつゝ花見んさ其山を苦經知ぬるさ也今其山一說今そ野山

なくらやまみねたちならし　小倉山に立聞て鳴鹿の年へたる秋の敵を知人なきさ也女郎花を折句によめる也

ひとめゆへのちにあふひのはるけくはわかつらきにや思ひなされん
僧正遍昭
くたに
ちりぬれはのちはわくたになる花をおもひしらすもまとふてふかな
之
さうひ　貫
われはけさうひにう見つる花の色をあたなるものといふへかりけり
をみなへし　とものり
しら露を玉にぬくとやさゝかにの花にも葉にも糸をみなへし
朝つゆをわけそほちつゝ花みんといまそのやまをみなへしりぬる
朱雀院の女郎花合せの時にをみなへしといふ五文字を句のかしら
にをきてよめる　つらゆき
なくらやまみね立ならしなくしかのへにけん秋をしるひとそなき

秋ちかうのはなり　秋近う野はなりて露のをける草葉も色がはり行となり桔梗の花なり菩黄とも

きちかうの花　とものり

秋ちかうのはなりにけり白露のをける草葉もいろかはりゆく

讀人しらず

ふりはへていさ古里の花みんとこしをにほひうつろひにけるしをに

ふりはへていさ古郷の花見んと來しを匂ひのはやくうつろひぬるを也ふりはへては態さいふ詞なり若紫の卷に紫上のうはの尼公詞にかくふりはへさせ給べるさいへる詞態也前の袖ふりはへての歌も袖を畧してふりはへてとも詞ゆ

りうたんの花

わかやどの花ふみしたくとりうたんのはなければやこゝにしもくる

よみ人しらず

題しなには紫死也むなにとつかへる也

おはな

わかやどの花ふみしだくとりうたんのはなければやこゝにしもくるとなり口訣韻瞞花也總一におはなにたしりさく花のさあるを定家卿はりうたんの花やかにさきたるをおはなにましりさく花さいへり

ありと見てたのむるかたき空蟬の世をはなしとやれもひなしてんありと見てたのむ有と見ては頼みかたしうつせみの世をはなしとれもひなすへきにやと也

けにてし

うちつけにこしとや花の色をみんをくしらつゆのろむるはかりをうちつけにこしとやなく露の染る斗をやかてこしとや花の色をみるへきと也こしは濃也題牽牛子也是もむなにとよめり牽牛花は藤生花也槿花は韻府に槿に黄白あり一名日及と云字書に槿は葬也毛詩和訓に呼レ葬曰二朝顔一これにより日本俗槿葬共に牽牛花とすあやまれるにや宋人詩云槿花籬下占二秋事一早有二牽牛上竹架一此詩の心槿葬と牽牛と各別也牽牛花はかたち扁豆のごとし田野人の牽レ牛藥に易れば此名を得たり古語云君子芳桂性春温秋夏繁小人槿花心朝在夕

やたへの名實

不レ存しかるを歌には此分別なく題に槿花をまかきにかゝるなと詠せり同名なれはあやまりきたれるなるべし源氏に朝顔卷に牽牛花の心をよめるはあひかなべり心うへき事也口訣古來朝顔をはしめて槿花牽牛さしてあかちなし

花の木にあらさらめ　此歌題のめさにけつり花古今三種の秘事也さいひて說々あり傳授にあらされば決定しかたき事也此歌の雜木口訣

山たかみつれに嵐の　山高く常にあらしの吹里は匂ふともなく花のちるを也

郭公みれの雲にや　なく郭公の聲はきけと見る事なきは釜の雲にたしりしにやと也やましは山にあるしのれをいふ羊蹄と書

うつせみのからはき　空蟬のからは木ことにとゝまれと魂のゆくゑを見ぬそ悲しきを也唐萩也前後草也口訣

うはたまの夢に何かは　現にたにあかぬを夢には何かは慰へきさ也かはなくさは是亦古今三種の秘事さいへり傳授の上にて決定すへし

二條后春宮のみやすん所と申けるときにめとにけつりはなさせりけるをよませ給ひける　文屋やすひて

花の木にあらさらめとも咲にけりふりにしこのみなるときもかなきのとしさた

しのふくさ

山たかみつねにあらしのふくさとはにほひもあへすはなろちりける

平　あつゆき　篤行與雅王子乘盛父

やまし

郭公みねの雲にやましりにしありとはきけと見るよしもなき

讀人不知

からはき

うつせみのからは木ことにとゝむれとたまのゆくゑを見ぬそかなしき

かはなくさ

うはたまの夢に何かはなくさまん現にたにもあかぬこゝろを

ふかやふ

たかひこのとしはる　高向利春甲斐守

さかりこけ

花のいろはたゝひとさかりてけれともかへす〳〵うつゆはそめける

にかたけ　しけはる

いのちとて露をたのむにかたけれはものわひしらになくのへのむし

かはたけ　かけのりのねはきみ 景式王惟條親王子上野大守

さ夜ふけてなかはたけゆく久方の月ふきかへせ秋のやまかせ

わらひ　具せい法師

けふりたもゆともみえぬ草の葉をたれかわらひとなつけうめけん

さゝまつ　ひは　はせをは　きのめのと 陽成院乳母 説紀朝臣全子源益母

いさゝめにときまつまにろ日はへぬるこゝろはせをは人に見えつゝ

苦の長くしたりたる也或云文選云僻苦有毛丘蔦さいへるは木にさかりたる蔦也さいへり 薜荔とも書

いのちとて露を頼むに　露命頼みかたければ物侘しく野への虫のなくさいへり

さ夜ふけてなかは　夜更て半闌行空の月吹返せ秋の山風と也月吹返せ面白き詞と也かは竹は纏レ皮似レ竿竹也たけゆくは更の闌行也

けふりたちもゆとも　煙の立てもゆるとも見えぬ草を蕘火とは誰名付初たると也

いさゝめにときまつ　かりそめに時待間に日はへぬる心はせをは人に見えたるとなり 顕註密勘 いさゝめはかりそめの心也いさゝかのほとなといふ心也芭蕉葉を心操にゝみかくせり万葉に「眞木柱つくる柏人 密勘 いさゝめにかりほにせんとつくりけめやは 密勘 「いさゝめにおもひし物をたこのうらにさけるゝ藤波一夜れにけり「いさなみに今も見てしか秋萩のしなひにあらん妹かすがたをいさなみ卒爾と云になし心也

あちきなしなけきな　うき

事に逢くる身を捨ぬ物からあちきなく歎きなつみそと也つめそはつみそ也

波のをとのけさから　春のしらへに改るか波の音の今朝からことに聞ゆるとなりからことは備前國の名所也春の調ゝ及調夏は黄鐘七月は一越秋は平調冬は盤涉調也

かちにあたるさほの　梶にあたる波のしつくを春にてあれはいかゝ咲ちる花と見すはあるへきそと也

いかゝさきは河内名所也又近江國竹生島の東にもあり

かのかたにいつから　波路は跡ものこらぬに彼方にはいつからさきにわたりぬるそと也口訣

波の花沖からさきて　水の春とは風のなるか波の花の沖から咲てちりくるそと也

うは玉のわかくろかみや　かゝみの影に降しら雪は我黒髪のかはるにそあるらんと也紙屋川は北野にあり今はかい河と云昔紙を漉たる所也

なし　なつめ　くるみ　兵衛たゝふさかもさに侍ける　忠房妻

あちきなし歎きなつめそうき事にあひくる身をてぬ物からからことゝゝふ所にて春のたちける日よめる　安倍清行朝臣 大納言安仁子 左中弁

波のをとのけさからことに聞ゆるは春のしらへやあらたまるらん

いかゝさき　かねみのおほきみ

かちにあたるさほの事を春なれはいかゝさきちる花と見さらん

からさき　あをのつねみ 阿保経覧主税頭 右京大夫

かのかたにいつからさきにわたりけんなみちはあとものこらさりけり

かみや川　伊勢

波の花おきからさきて散くめり水の春とは風やなるらん

うは玉のわかくろかみやかはるらんかゝみのかけにふれるしら雪

つらゆき

あしひきの山べに　山へに住居れはいかにせよとてか雲の隔る時なきと也

夏草のうへは茂れる　夏草の茂る沼水の行方なきにたとへてやるかたなきわか心と也

秋くれと月の桂の　秋は踏木の實なる時なれと月の桂の實はたらす光りを花のやうにちらすはかりをと也月の桂の事兼名苑に云月中に川あり河上に桂木あり高さ五百丈下にひとりの人有樹をきる是をかつら男と云内典には月中に桂あるにあらす閻浮提地に閻浮樹あり一名波利質多一名龍樹高さ八万四千里樹影月中に現せり換絵うつりたるかたちと云されと月の中のかつらとよみならへるなり口訣

花ことにあかす　花といふ花をあかすちらす風なれはいくはくわがつらしと思ふとつよく風を恨たるよし也幾の字也百和香は五月五日に百草を取て合する香也口訣

春かすみなかし通路　霞の中に通路なからは秋來る鴈は歸るましきと也中しのしの字は例のたられはそへたり時鳥ながなく里の歌の心に汝かし通ひちといふはひか事也すみなかしはすなかし也墨流と書洲長にあらす口訣

よと川

あしひきの山へにをれは白雲のいかにせよとかはるゝ時なきたゝみね

かた野

夏草のうへはしけれるぬま水のゆくかたのなきわか心かな　源ほどこす忠弘子左馬權頭

秋くれと月のかつらのみやはなるひかりを花とちらすはかりをよみ入しらす

百和香

花ことにあかすちらし〻風なれはいくはくわかうしとかは思ふしけはる

すみなかし

春かすみなかしかよひちなかりせは秋くる鴈はかへらさらまし

みやこのよしか百香

をき火

なかれ出るかたに流れ出る方たに見えぬ沼河はなみか河れきひんときやうこはしられん

ちまき

大江千里

のちまきのをくれておふるなへなれとわたにはならぬたのみとうきく

はをはしめるをはてにてなかめをかけて時の歌よめと人のいひけれはよめる口訣

僧正聖寶光仁御末恒蔭王子

はなのなかめにあくやとて分ゆけはこゝろともにちりぬへらなる

蓋「八雲たついつものうらは黒髪のよしの〻川の沖になつそふ此歌は人まそなりよしの〻川出雲國也

のちまきのをくれ　稲を遲くまけは苗のをくれて生れといたつらにはならぬたのみとそ聞と賴を田實に云なせり

はなのなかめにあく　日にあくやとて花の中を分てゆけは心そ花とともにちりぬると也習口訣

郭公なくやさ月の　戀する心のほれ〳〵として綾の文も見わかめといふ也あやめさいはんとてなくやさ月のあやめ草とつゝけたり（歌枕）綾目とは錦織物をはしめ端のこう貝のからまて文なき物はすくなし網の目籠の目綿目布目なといふまて物のいろふし見え分れくらからぬ時は文と目との見わかるゝをくらきやみにもなり心もほれ〳〵しくいひかひなく成ぬれは其物のすかたを見れとあやめもわかれすしらぬをあやめもしらぬとはいふ也夕暮くらくなりはつるを物のあやめもわかぬほとになとふるき物に常に書たる也（源氏物語註）うたに「奥山のゆつりはいかに折つらんあやめもしらす雪のふれゝは」（古今註）或は黒白もしらすといふやうなる事もあり歌にかなへて思合すへし（古今註）

をとにのみきくのしら露よるはおきてひるはおもひにあへすけぬへし　紀貫之

吉野川いは波たかくゆく水のはやくうひとをおもひうめてし　藤原勝臣

しら波のあとなきかたに行舟も風うたよりのしるへなりける

なせりあへすは不雖なり又不敢の心もあるへし（口訣）

吉野川いは波たかく　岩波たかく行水は早き物なれはは（ハヤク）やくより人を思ひ初つる也はやくはもとより也（ハヤク）とかく

しら波のあとなき　ゆくゑもしらぬ波路をゆく舟も風をたよりにすること思ふ人にいひよらんと也しるへは指南の儀也此歌は舟ものもの一字にて戀の歌になれり定家卿云是はいまた見すしらぬ人に文をもやり物をもいひうむるかつゝましかるへきをしろたよりあろ人に傳へて跡なきかたにゆく舟の風にふかれたるやうにもとしらすともいひよらんさいへる心とう（歌枕）

をとは山音に聞　思ふ人を音に聞つゝあはて年をふるを也音羽山はをとにきくといはんため逢坂の關

のこなたに年をふるはあはさる心也

たちかへり哀とそ　人に心をかけたるによそになしてしらぬ事のつらきをなけくも立かへりてあはれとも思ふと也源氏につらきもあはれといふこそまことなりけれと有人のつらきはいかにもつらかるへきか歸りて哀なるといふ心也定家卿云よそのの思ひにてさそたにしらぬ事を歎きをしかへし思へはそれも哀にたにほゆさるへき契有てやなとにもひいれたるよしにや人に心をおきつしら波とは心をかけたりとよめるとこそきゝ侍しか奥の歌になそ世中の玉たすきなるといへるも中〳〵にかけたる由の同心とそ申されし（歌枕口訣）

世の中はかくこそ　吹風のことくに目に見ぬ人も戀しきは世の中の習ひにてあると也文集にやらん魚不レ見レ水人不レ見レ風（チ）さあり

右近のむまはのひをり　馬場かなにてもきなにてもむまはとはをにこりてしむ右近馬場は北野の前也（口訣）ひをりの日とは五月五日に隨身すゝめ小弓の的ほとなるを立て射る（有其時隨身のかちのしりを引たりけるほとにひをりの日とはいひける也禊は裝束なり餝案抄に有近馬場のひをりの日とは弓の弦手結（アラヅツカヒ）に舍人とりのきさしく禊に引たりてきたるをひをりといはんたかはすきこゆ（荒手結）結にも同し姿なれゝ荒手結はかたのやうにて弦手結をむれとしたれは此事あたりてきこゆさい

をとは山音にきゝつゝあふさかのせきのこなたにとしをふるかな　在原元方

たちかへり哀とそ思ふよろにてもひとに心をおきつしらなみ　つらゆき

世の中はかくこそ有けれふく風のめに見ぬ人もこひしかりけり

右近のむまはのひをりの日むかひにたてたりける車のしたすたれより女のかほのほのかに見えけれはよみてつかはしける　在原業平朝臣

古今和歌集卷第十一

戀歌一

題しらす　よみ人しらす

郭公なくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ戀もする　素性法師

へり

見すもあらすみも　そさみし人の戀しくはあちきなく今日や詠くらさんと也三句はほのかに見たる心也戀しくは見初て哀と思ふ心の猶切になりゆかはの心也あやなくはかひなくは也又あちきなくといふ也密口訣

しるしらぬ何かあや　しるさもしらぬさも何かあちなくわきていはん思ひこうしろへにてあれと也心さしによるへきと也此歌伊勢物語に有やまと物かたりには「見も見すもたれとしりてか戀らるゝたほつかなみのけふのなかめやさあり其後しるしらぬの返しあり

すかの〳〵雪まを　雪間の若草にたとへてけふほのかに見えし君か面影忘られすと也口訣有　祭春なれは雪間の若草に思ひよそへり草のはつかに見えしはけふほのかに見たる心也君かもは君かといふ詞に文字をそへたり此歌の心君かと尋たる心也

人の花つみ　花摘と書

山さくら霞のまより　ほのかに見てし人の戀しきたとへに山さくら霞の間よりといへり口訣

たよりにもあらぬ　人に心を付るはかくる也常にことなるなあやしきといふ奇と解此歌口訣

見すもあらすみも せぬ人の戀しくはあやなくけふやなかめくらさん

返し　よみ人しらす

しるしらぬ何かあやなくわきていはんおもひいみころしるへなりけれ

かすかの祭にまかれりける時に物見に出たりける女のもとに家を遣しける　みふのたゝみね

たつねてつかはしける

かすかの〳〵雪まをわけてれひ出くる草のはつかに見えしきみかも

人の花つみしける所にまかりてうこなりける人のもとに後に讃て遣しける　つらゆき

山さくら霞のまより　題しらす　ほのかにも見てし人こそ戀しかりけれ　もとかた

たよりにもあらぬ思ひのあやしきはこゝろを人につくるなりけり

はつかりのはつかに　そと聲を聞しよりなか空に物を思ふさも初鴈によそへなか空に物思ふさ云半天に成さは天へも地へも付ぬさいふ事也

あふ事は雲ゐはるか　逢事は遠く成て思ふ人を音に聞つゝ戀わたるさ也

かたいとをこなたかなたに　思ふ人にあはすは何を命にせんといはんとてかた糸よはき物なれはよりあはせれはつよき緒にならぬによせたる也玉の緒を命にそへて也玉のをといふに三の心有しはしといふ心玉の緒命をいふ萬葉「中〳〵に人とあらすは桑子にそならましものを玉のをはかりしましも 伊「逢事は玉のをはかりにもほえてつらき心のなかくみゆらんもはしと玉の緒の条 新古「玉のをよたえなはたえねながらへはしのふる事のよはりもそする命也

夕くれは雲のはたて　天津空なる人を戀て夕暮はつきせぬ物を思ふさなり雲はつきせぬ物なれはたとへていへり雲の旗手は日入ぬる山に光のすちすち立のほりたるやうに見ゆる雲の旗の手に似たるをいふ順か假名序にも思ふ心雲のはたてにある物からおり立ていはんかたなしさかけりる雲はたりぬる物なれはそれにそへて空に浮たる事か思ひておりたちていはんかたなしさかけるにや　萬葉「わたつ海の豊旗雲に入日さしこよひの月夜すみあかくこそ　雲也此雲の旗手に同し心なるへし愚案云題註の義也相傳の説異之

かりこもの思ひみたれ　思ひ亂て我戀さ妹はよもしらし告る人なくはさ也刈菰はみたれやすき物なれは思ひみたれてさいはんため也さいへり　桑題註の義也密口訣

はつかりのはつかに　凡河内みつね

はつかりのはつかにこゑをきゝしよりなかろらにのみ物をおもふかな　つらゆき

あふ事は雲ゐはるかになるかみのをとにきゝつゝこひわたるかな　よみ人しらす

かたいとをこなたかなたによりかけてあはすはなにをたまのをにせん

夕くれは雲のはたてに物ろ思ふあまつろらなる人をこふとて　つ

かりこもの思ひみたれて我こふとひもしるらめや人しつけすは

つれもなき人をやねたく白露のねくとはなけきぬとはしのはん　口訣

ちはやふるかものやしろのゆふたすきひと日もきみをかけぬ日はなし

ちはやふるかもの社　一日も君を思ひかけぬ日はなしといはんとてかもの社のゆふたすきと云木綿たすきはかくる物なれは也　定家卿云久かた足引玉ほこちはやふるかやうのつくる事は空さも山とも道とも神とも又空といふに付て日ともあめとも神といふにつきて賀茂とも平野ともつくると斗心得て此上を足を引ちはやをふる岩を打わるさまては潛ひ侍らす　密勘　水綿（ユフタスキ）　禊はゆふをたすきにするを云ゆふしては木綿に四手をかけたり孫姫式に「長月の背つゝら鏡にやきりいれて一日も君をかけぬ日はなし」末句同也　聞註

わかこひはむなしき空にみちぬらしおもひやれともゆくかたもなし

わかこひはむなしき　我戀はほとりもなきそらにみちたるか思ひやれとも心くるしさのゆくかたもなしと也むなしきそらは虛空也　口訣

するかなるたこのうら波たゝぬ日はあれともきみをこひぬ日はなし

するかなるたこの　田子の浦は風常に吹て波たえす立所といへは也　聞註

ゆふつく夜さすやをかへの松の葉のいつともわかぬこひもするかな

ゆふつく夜さすや　夕の月の影さす松の葉のいつとも分す色もかはらぬやうに戀をすると也夕月夜は夕陽にかはりて空に見ゆるをいふ上絃なとまてはまことにをくらくほのか也さすやのやは助字也「朝かしはゐるや川邊の篠目のおもひてゐれは夢に見えくる」なくや五月「咲や此花とも讃り　聞註

あしひきの山下水のこかくれてたきつこゝろをせきうかねつる

あしひきの山下水　思ひの瀧津心をせきかれたると也たきつ心とは切なる心也　湲（ヌキル）の字也　口訣

よしの川岩さりをしゆく水のをとにはたてしこひはしぬとも

よしの川岩さりをしゆく　河水の岩にさはりてなかるゝ音の高きやうに音にはたてし戀死ぬとも忍ひてあらんと也岩さりをしゆく水は川中の岩にさはりてよこきれなかるゝ水をいふ　聞註　口訣

たきつ瀬のなかにもよとはありてふをなぞわかこひのふちせともなき

たきつ瀬のなかにも　たきりておつる水の中にたによとみは有といふをなと我戀の淵瀬のかにりめもなきそと也瀧津瀬はたきりて落る水也淀はよとみをいふ　口訣

やまたかみ下ゆく水のしたにのみなかれてこひんこひはしぬとも

やき高み下行水の　人戀るとはしられすにしたにならへて戀んせく戀死ともとなり

おもひ出るときはの山のいはつゝしいはねはこうれこひしきものを

おもひ出るときは　思ひ出る時に戀しき物なかくともいはねこゝろ苦しきと也思ひ出る時はといはんとて常盤の山といひいはれはといはんとて岩つゝしといひつゝけよめり　聞註

人しれすおもへはくるしくれなゐのすそつむはなのいろにいてなん

人しれすおもへは苦し　人しれす物思へは心苦しきに紅のことく色に出なんと也くれなゐは末より花さけは末よりつむされは末摘花といへり万葉二　外　耳見　戀牽　紅　乃末摘花乃色不出友　聞註

秋の野のわけはなとましりさく花のいろにやこひんあふよしをなみ

秋の野のわけはなと　ましりさく　花のいろにやこひんあふよしをなみとも定めかたし　おほくの花にこそあらめ思ひ草にかきろとはみえす　家卿は　聞　にましる花色を　おほく侍らん秋の瀧さそなの糸をくりかけたるさかりは夏に千草の花もこきませ侍らん猶此歌は同し事なれと秋の野のさかり過心ほそけなる長月の霜の中に尾花はかりのこりたる中に龍膽の花やかに咲いてたる尾花にましりさく花とはいふなり紫の色のゆかりを思へるにやとそ申人侍し「道のへの尾花　かもとの思ひ草　今夏になそ物　は思ほえん思ひ草は思ひの名にあらす只草をいふ　口訣

わかそのゝ梅のほつえ　れに鳴ぬへきさいはんとて園の梅の梢に鶯のとまへる也　俳諧抄　ほつえこつえ同し事也梅の末枝也ほつえはつほめる枝をいふといふ説あ有萬葉に梢にもほつえとよめり同し事凡十二月によめる歌也　俳諧抄物のはつさいふはは梅也ほとは五音通也萬葉に「妹かため末枝（ホツエ）の梅を手折とて下枝の露にぬれにける」　聞

あしひきの山郭公　山郭公も我ごとく物思ひてはれかたくなくかと也

夏なれはやどにふすふる蚊遣火によせていつまて思ひに我身下もえをせんと也「夏くれは田田のくろになく蚊火のいつまて我身下もえにせん」此歌似たる也山田の畔は人家にてもなきに蚊遣火不審也是はかひやが下にたつる煙也「朝霧かひやが下になく蛙壁たにきかは我戀めやは田をもる人の離居して山中に住居する間蛙を隔て別居の戀めにせる心也かひやといふは彼庭の下に火をくゆらかし煙をおほからしめて蚊もしは鹿を去しむ朝かすみの山の服をめくるにことならすと也

こひせしとみたらし河　今より戀せしとみたらし河に秘せしかと神はうけすもあるか猶戀しきと也伊物には成にける哉とあり物手洗川神山よりなかれ出て賀茂の御社の貴布禰片岡の森の中よりとなれる小河なり他社の前になかるゝをも御手洗川と詠する歌有

あはれてふことたに　人の哀ともいはすは何を思亂るゝ戀のつかれをにせんと也亂たる物をさりあつめてゆふを〜束稭と云おもふには忍ふる事そ　いかに忍はんとおもへとも思ふ心がかつゝきはえしのはぬ也されはしのふはさけて色に出たると也伊物に下句「あふにしかへはさもあらはあれ逢事にかへは名も何とも思ふましきをさもあらはあれといひ捨たる也我こひを人しるらめや　わか戀る事を人はよもしらし枕はかりしらはしるへきと也數妙は枕さいはんため也あさちふのをの〜　忍ふとも思ふ人はよもしらしいふ人なけれはとうち佗たるよし也一二句は忍ふといはんためあさ茅生は茅のみしかく生たるをいふ小野の篠原はしの〜生たるせはき野也

あしひきの山はとしきすわかことやきみにこひつゝいねかてにする
夏なれはやどにふすふるかやりひのいつまてわか身したもえにせん
こひせしとみたらし川にせし御秘かみはうけすもなりにけらしも
あはれてふことたになくは何をかはこひのみたれのつかねをにせん
おもふには忍ふる事うまけにけるいろにはいてしとおもひし物を
我こひを人しるらめやしきたへのまくらのみころしらはしるらめ
あさちふのをの〜しのはら忍ふともひとしるらめやいふ人なしに

人しれぬおもひや　人しれぬ思ひや何そ問近くあれとも逢事のなきと也蘆垣間ちかくあめる物なれはよせてよめり「津の國のこやとも人をいふへきに頃こそなけれあしのやへふき蘆の八重ふきも隙なき事によりなそとのと文字たすけ也古歌にはたらぬ所に文字を加へおもふともこふとも　思ふとも戀とも逢ましき物をゆふてもたゆく下紐のとくると也人に戀らるゝには下紐のとくると云「戀しとはさらにもいはし下ひものとけんを人はそれとしらなんと伊物に有物なれやは逢ましき物をといふ也「めつらしき人を見んとやしかもせぬ我したひものとけわたるらん珍しき人をみんとてとくると也「こま錦紐のむすひめときあけていはひてまてとしるしなきかも是は態きて待にしるしなきと歌也いて我を人なとかめそ　大船の波にゆられてとかくたゆたふ野馬也「手心ゆたのたゆたにうきぬなはへにもおきにもよりやかれまし此歌もうきぬなはたはたゆたふ也たゆたふは煩ふ也「手心ゆたのたゆたにうきぬなはへにもおきにもよりやかれまし此歌もうきぬなはの波にゆられたゆたふときこゆとかくたゆたひて物おもふよしなりいては萬葉に乞の字をいてとよめり又さてもなといふ心にかなへるうたもあるなりゆたのたゆたは波にゆられたゆたふ也萬葉に湯谷絕谷とかく又寬多と書多預と書てたゆたふとよめりやすらふ心也源氏にいみしくたほしたゆたひつゝとあり煩ふ心也口訣

伊勢のうみにつり　釣する蜑のうけのことく忍ふあいたはとやせましかくやせましなと思はぬかたなく思へは我心ひとつを定めかねつると也釣の浮子水にひかれて一所にも定らぬ物なれはたとへいへり「住吉の津守のあまのうけのなのうかひやゆかん戀つゝあにすに「源氏繪と書」いせの海のあまのつりなは　イホ蜑のたくなはと有持繩たくる總は打はへてくる物なれは苦しといはんとて也たくなはは綱に付たるなはなたくる也「北條氏口訣」

なみた川なにみなかみ　物思ふ時の我身より出る涙川を河水上をよそにたつねつるそと也泪河伊勢の國にあり口訣

たれしあれは岩にも松は　稱あれは土くなき岩にも松の生ることくに戀をして戀たらは逢かたき中なりともあはてあるへきかと也口訣

あさな〳〵たつ河霧　毎朝に立河霧にそへて心空にうか〳〵とたもひのあるとなり

わすらるゝ時しなければ　人を忘らるゝ時なく思ひ亂れてれを嘶と也蘆田鶴註いへるはみたれてれをなくといはんとて也蘆註の中にたてる鶴をあしたつといふあし鶴といふも同心蘆の中の鶴也

からころも日も夕暮に　日も夕くれになれは人の返す〳〵戀しくあると也日もゆふくれといはんとてから衣を紐のあれはひもはゆふものなれは日もゆふくれとはいへり口訣

よひ〳〵に枕さためん　逢事かたきまゝ思佗てうちねる中に見えつる夢み頼めと今は夢さへうとくなれはいかにねし夜か夢に見えつると皆々に枕を定般つると也

こひしきにいのちを　命ほとおしき物はなけれと戀しきにかふる物ならは死ぬるはやすく有へきと也

人の身もならはし物を　戀しぬるか人の身も習はし物なれはあはすしていさ心見んと也つれなきあまりにいへり口訣

忍ふれはくるしき物を　人しれす思ふといふ邪を誰に語り慰むへき忍ふは苦しき物をと也

なみた川なにみなかみをたつねけんものおもふときのわか身なりけり

たねしあれは岩にも松はれひにけりこひをしこひはわはさらめやも

あさな〳〵たつ河霧のうちにのみうきてれもひのあるよなりけり

わすらるゝ時しなければ蘆たつのおもひみたれてねをのみうなく

からころも日もゆふくれになる時はかへす〳〵ろひとはこひしき

よひ〳〵に枕さためんかたもなしいかにねし夜かゆめに見えけん

こひしきにいのちをかふる物ならはしにはやすくろあるへかりける

人の身もならはし物をあはすしていさこゝろ見んこひやしぬると

忍ふれはくるしき物を人しれすおもふてふこと誰にかたらん

こん世にもはやなり　來世に早くなれかし目の前に難問人を苦有つる人と思はんと也あまりにつらきまゝにいへり

つれもなき人をこふとて　雜面人を戀るとて山彦の答るまてれに高くたてゝなけきつると也口訣

ゆく水にかすかく　思はぬ人に戀註ちふは行水に數かくよりもはかなき邪也とたとへいへり蕉案「水の上に數かくことは我命亦如レ畫レ水隨レ書隨合此文は水にふかくにしたかひてうすする邪也蕉註

人をおもふこゝろは我にあらねはや身のまとふたにしられさるらん

おもひやるさかいはるかになりやするまとふ夢路にあふ人のなき

夢の中にあひみん事を頼みつゝくらせるよひはねんかたもなし

こひしねとするわさならしひは玉のよるはすからに夢に見えつゝ

こん世にもはやなりなゝんめのまへにつれなき人をむかしとおもはん

つれもなき人をこふとてやまひこのこたへするまてなけきつるかな

ゆく水にかすかくよりもはかなきはれもはぬ人をおもふなりけり

人をおもふこゝろは我にあらねはや身のまとふたにしられさるらん

おもひやるさかいはるかになりやするまとふ夢路にあふ人のなき

夢の中にあひみん事を頼みつゝくらせるよひはねんかたもなし

こひしねとするわさならしひは玉のよるはすからに夢に見えつゝ

也夜をとをす心也むは玉の夜は古式に夜をはぬはたまといふ髮をはむは玉といふとあれと蕉案にはむはたまの夜ともぬは玉の夜ともよめりしかゝを天德の歌合に「たは玉のよるの夢たにまさしくは我おもふ邪を人に見せはやとあるを夜をはぬは玉とこそいへむは玉は別の物なりとて頂て侍れはやむ無なき御歌合の判なれは末代のをろかなる心にとかく申かたしと頂昭いへり烏羽玉はからすは黑き物に數多つかへるにや夜は黑けれは云

なみた川枕なかるゝ　枕なかるゝ泪川の浮ねには夢もさたかにみえぬと也哉流す泪川なれと旅の夢なとのやうによめり真の字をさたかとよめり

こひすれは我身は影　戀にやせたるを影となるといふ影は身にうふ物なれとおもふ人にそはぬとなり

かゝり火にあらぬ我身　鵜川の篝火の水にうつりてもゆるによせていへる也なそもかくはなにかく也　燎　篝とも　かゝりひの影となる　燎火の水に影のうつりてみゆるごとくに下に思ひのもゆるとそへたり口訣

はやき瀬にみるめ　我袖の泪河の早きに早き瀬にみるめ生る物ならはうゆへき物なと也人をみる事のなけれは海松和布をうへたきと也

おきへにもよらぬ玉も　沖にも游濱にもよらぬ玉藻の波にたゝよふことくに亂て戀渡らんかと也玉藻は亂る物也玉はほむる詞也

あしかものさはく入江　かくのことく人ん戀へきさは思知さりきと也口訣

人しれぬおもひを常に　思ひを常にするといふ事をそへてするかなる富士の山のことく我身のもゆるとなり

とふ鳥のこゑもきこえぬ　我戀のふかき心を人しれかしと也人は知なんはしれといふ下知のなん也あまりに深き山には鳥もなかぬ也

なみた川枕なかるゝうきねには夢もさたかにみえすろ有けるこひすれは我身はかけとなりにけりさりとて人にろはぬものゆへかゝり火にあらぬ我身のなろもかくなみたの川にうきてもゆらんかゝりひの影となる身の佗しきはなかれてしたにもゆる成けりはやき瀬にみるめひせは我袖のなみたの川にうへましものをおきへにもよらぬ玉もの波の上にみたれてのみやこひわたりなんあしかものさはく入江のしら波のしらすや人をかくこひんとは人しれぬおもひをつねにするかなるふしのやまろわか身なりけれとふ鳥のこゑもきこえぬおくやまのふかきこゝろを人はしらなん

あふさかのゆふつけ　ゆふつけ鳥も我ことく人の戀しけれはれをやなくらん　題註　と也世中さはかしき時君の御いのりに四境の祭といふ秘あり鶏に四手をつけて陰陽師にあしき事を祈り付させて四境の關にはなさるゝ也されはゆふつけ鳥といふ逢坂は此平安城にては東方の關四境の一也雞の下にたかみそき木綿付鳥かとよめり立田は平城の四方の關なれはゆふつけ鳥をよめり　題註　一禮御說今は四所の關ならすともよむへきとそ

あふさかのせきに　逢ぬ中のかくともえいはて心に物を思ふと也石清水は石より流出る水也いはてといはんために云

うき草のうへは茂れる　浮草の茂る淵の底見えぬことく我思ひの深き心を人知ぬと也

うちわひてよはゝん　山彦によせて打侘てよはゝんにこたえぬ人はあらしと也此歌口訣

心かへするものにもか　我は人をたもふに人の我を思はれは我心を人の心にかふるものにもかな我心くるしさを人にしらせんと也心を人に替る物にもかなと也かた戀は獨戀とかく片思ひといふかことし　題註　「ますらをやかた戀せんと歎けともなこのまうすらを猶戀にけり」圖註

よそにして戀れは　よそにて戀すれは苦しきにいれひものことくによりあふて同し心にいさ契りをむすはんと也又裝束に入紐は雌紐雄紐とて二つあるを取合せてさす物なれはおなし心にむすはんといへりとぞうむすひのやうなりめひもに紐ひもをさし入てむすへはいれひもといふ也

春たてはきゆる氷の　春はきゆる氷のことく君か心は我にうちとけよといへり

あけたてはせみの折は〻鳴くらしよるはほたるのもえこうわたれ
夏むしの身をいたつらになす事もひとつれもひによりてなりけり
ゆふくれはいと〻ひかたき我袖に秋のつゆさへをきろはりつゝ
いつとても戀しからすはあらねとも秋のゆふへはあやしかりけり
秋の田のほにころ入をこひさらめなとかこゝろにわすれしもせん
あきのたのほの上をてらす稲妻のひかりのまにも我や忘るゝ
ひとめもる我かはあやな花すゝきなとかほに出て戀すしもあらん
あは雪のたまれはかてにくたけつゝわかものおもひのしけきころかな

あけたてはせみの折は〻鳴くらしよるはほたるのもえこうわたれは蟬の如く鳴暮してよるは螢のごとくあるを也

夏むしの身をいたつら　夏虫の火に入て死する事も一つ思ひによりての事なれはわれもかはるましきを也なす事もの字にて我事になれり（聞注）夏むしは夏夜灯に飛入て火をとらんとするやうにて死する虫也

此虫にたとへて我も其ごとく思ひの火に身をこがして身をいたつらになすを也（聞注）世俗には玉虫の火を取來たらん虫にあはんといひけれは螢虫火に入て死すと云又飛蛾とて燭にたつるあり此歌は此心也蟬をも螢をも夏虫とよめり歌によりて知へしゆふくれはいと〻ひかた　人の戀しさに夕はいと〻袖のひかたきに秋はかなしき折にて露さへ泪に盃そはりたるを也

いつとても戀しからすは　いつも人の戀しからすはあられとも秋の夕は物悲しさのそひてあやしき迄忍ひかたしさ也あやし（聞注）とは常にことなる也文集云大江四時心物苦驚レ中（シダロメテ）驚レ聞是秋天といへり（是迄聞注）

秋の田のほにこそ人　顯れては人を戀れといかて心に忘るへきさ也秋の田はほにさいはんため也ほとはあらはれてといふ「穂を」ほに上て「立る火のほにこそ出れ同

あきのたのほのうへを　稲妻のひかりのまにも我人を忘ぬと也口訣

ひとめもる我かは　人目をまもる我にもあらすかひなくなと花薄のごとくほに出てこひぬそと也

あは雪のたまれはかて　雪のたまれはかつほろ〳〵とこほるゝごとくに我ものにもひのくたけてしけき頃にてあるとなりかてにはたまれはかつくたけつゝと云心也（聞注）かては且なり且落る心也淡雪は春も冬も消やすき雪をいふ「梅かえに鳴てうつろふ鶯のはれ自妙にあはに雪

そふる萬葉に「しはすに

はあは雪ふるとしらぬかも（梅の花さくあらでふゝみてあらてふゝみてはつほみてあらて也ふゝみては含て也淡雪は雪の性（世柳管抄）

あはけれはなりかてに（雅永自筆の御本にてもとにこりてあり尤用ゆへし）ヨミクセ口訣

紀く山の菅の根　奥山の菅の根わけてふる雪のごとく消ぬるとかいはん我戀のしけきにと也すかのねは菅根也菅をすか桃すが莚なといふしのきは茂也波をしのく霰をしのく雪をしのくなといへりわくる心也菅の根といふは戀を泥（コヒヂ）の心に思ひよそへて根といふ也源氏に六條御息所の歌「袖ぬらすこひちとかつはしりながらおりたつたこのみつからそうきといふも戀路を泥（コヒヂ）によせたり顯昭説しのくは凌雲（レウウンダイ）臺といふも高くて雲ををかす心歟すかの根は土中にこそあれ是はすかの葉を菅たかへたるかといへり「いはせのに秋萩しのき駒なめて初鹿狩（ハツトガリ）だにせてやみなん萬葉　後撰「奥山の槇の葉しのきふる雪のいつとくへしとしらぬ君哉（是迄聞注）此おく山のすかのねしのきのうた（是迄清菱）

おくやまのすかのねしのきふる雪のけぬとかいはんこひのしけきに

たゝひつゝぬれはや　戀しく思ひつゝぬれはや人のみえけん夢としりたちはさめましき物をさも名殘をしたひてはかなきいひ事也

うたたねに戀しき人　かりねの枕に戀しき人を見初てより後暮る夜毎に夢といふ物はたのまれねるさも也假寢さ書

いとせめて戀しき時は　尤戀しき時はせめて夢にも見んさて夜の衣を返してきるさも也衣を返してぬれは戀しき人を夢に見るさいふ事むかしより袖をかへすさいふも同し事也　言葉「白紗の袖ぬりかへしこふれはか妹がすかたの夢にし見ゆるいとせめてさけ最貴さかく殊に悲しき時さいへり口訣

秋かせの身にさむけれは　秋風の夜寒なる頃我心になすらへて思へは人も物さひしくたはえて淫面き心もよはりもそするさたのむなり人を戀しきなさ常ならはいふへきを人をそたのむさいへる千金の字也此うたは「身に寒く秋のさよ風ふくなへにふりにし人の夢に見えつゝ此歌なさや讀うつしたるらん小夜寒くれさめがちに物かなしきに古人の夢に見えつゝ夢うつゝさもわかぬさも也書き裝なさにてもやあるへき此秋恩の歌抄口訣

しもついつもてらに　下出雲寺さは上御靈下御靈さてあり是は下御靈也人のわさしけるさは道雪也又新御靈さ云人も侍にや橘逸勢の舊跡の由御室記にかけるさかやいつくにても也

古今和歌集卷第十二

戀歌二

題しらす　　小野小町

おもひつゝぬれはや人の見えつらんゆめさしりせはさめさらましを

うたたねに戀しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき

いとせめて戀しき時はむは玉のよるのころもをかへしてそきる　　素性法師

秋かせの身にさむけれはつれもなき人をうたのむ暮る夜ことに

しもついつもてらに人のわさしける日眞せい法しのたうしにてい

見んさて夜の衣を返してきるさも也衣を返してぬれは戀しき人を夢に見るさいふ事むかしより袖をかへすさいふも同し事也　言葉「白紗の袖ぬりかへしこふれはか妹がすかたの夢にし見ゆるいとせめてさけ最貴さかく殊に悲しき時さいへり口訣

つゝめさも袖にたまらぬ　包めさも袖にたまらすこほるゝ白玉は人を逢見ぬ目の涙にてあるさも也是は法華經五百弟子品の文に以無價寶珠繫其衣裏ささけるを讀談しけるを戀の歌によせたる也

をろかなる泪こそ袖にたまらぬ　をろそかなる泪こそ袖にたまらぬ白玉さは見ゆらめ我はせかれぬ瀧津瀬のごさくなれはさも也贈答の本さいへり口訣

こひわひて打ぬる　戀侘て寢る中に君に行かよふさ見る夢を現になれかしされかふ心也現にはかよひかたきに夢路の如く安くかよはせよさ也狹衣に例ならぬたゝちにまよひ侍てさ有荒葉に夢直路さ書口訣

すみの江のきしに　よるの夢のかよひちさへ人目をよくるさ也よるさへやさいはんさて岸による波さいへり書口訣

我こひはみ山かくれの　深山霞の草のごさく戀のしけさまされさ知人なきさ也み山かくれなれは知人なきさよせたり

よひのまもはかなく　宵の螢の光のはいなく消やすけに見えて飛ありくよりも我戀にまさふ心は猶まさるさ也

つゝめとも袖にたまらぬ
へりけることはを歌によみてをのゝこまちかもとにつかはしける　　あへのきよゆさの朝臣安倍清行大納言安世子日寛平七

つゝめとも袖にたまらぬしらたまは人を見ぬめのなみたなりけり

返し　　こまち

をろかなるなみたり袖に玉はなすわれはせきあへすたきつせなれは

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた　　藤原のとしゆきの朝臣

こひわひてうちぬるなかに行かよふゆめのたゝちはうつゝならなん

すみの江のきしによる波よるさへやゆめのかよひちひとめよくらん

をのゝよしき

我こひはみやまかくれの草なれやしけさまされとしるひとのなき　　紀友則

よひのまもはかなく見ゆる夏むしにまとひまされるこひもするかな

夕されは螢よりけに　夕は螢よりまさりて思ひにもゆれとも　ひかり見れはこそ人のつれなくあるらめと也定家卿云夕されは春されはの詞巻在はと萬葉に書たり春にしあれは也夕されは是にたなしけにとはそれよりまさるといふ心也勝の字をかくけをすみてよむ又まことにさりけりといふ事をけにとつかふは現にと云是はけをにこるへし

夕されは螢よりけにもゆれともひかりみねはや人のつれなき

さゝのはにをく霜よりも獨ぬるわかころも手そさえまさりける

我やとの菊のかきねにをく霜のきえかへりてうこひしかりける

河の瀬になひく玉ものみかくれてひとにしられぬ戀もするかな

みふのたゝみね

かきくらしふるしら雪の下きえにきえて物おもふころにもある哉

藤原れきかせ

さゝのはにをく霜　篠の葉に霜のさゆるよりも獨れの衣手は猶寒しと也

我やとの菊の垣れ　消かへりて人の戀しきさいはんとて上句をまうけたる歌也きえかへりて戀しきさはふかく思ふかたち也

霜口訣

河の瀬になひく　玉藻のこさくみかくれて人に知れぬ戀すると也みかくれては水隠と霄みこもりといふも水霜也俊頼歌「とへかしな玉くしの葉にみかくれて鴨の草くきめちならすともとめる櫛の葉に身隠てとはしめてよめり其證歌むほつかなきよしいへるに俊惠證歌なくてはよもよましといひけり又奈良花林院にて歌合に「雪ふれは霄葉の山もみかくれてときはの名をやけさはかくさんとよめるを基俊云みかくれてとは水に隠れてと云也萬葉に水隠とそかけるしかれは彼の下草蛙なとそみかくれてとはよめる山をみかくれてとよめるは未曾聞と云俊頼へらぬなりに又詠する歌猶蛙たるへしと八雲御抄註し玉へり口訣

かきくらしふる白雪と　人のつらさを歎てきえ入はかりもの思ふ頃にて有と也口訣

きみこふるなみたの　君戀る泪河のふかき底なれはみをつくしと我は成たると也みをつくしは江川の水の淵深ゝ知んために水を立るをいふ萬葉に水尾靈とも書國史に澁波江に始て澪標を立る由註せり其所をみをつくしといふよし貫之か土佐日記にかけり

しぬる命いきもや　人のつれなくあはぬ故死ぬる命なれは心見に命の生るか玉のをはかりあはんといはんと也此玉のをはかりはしはしのほと也いのちを玉の緒といふにそへて也命を玉のをと云け玉ひぬれはしぬて　つれなきに思ひ侘ぬれはしぬて忘れんと思へとも夢といふ物のみえてさすかに人をたのむると也わりなくもれても　たきぶしわりなく戀しき哉我心をいつくへやりたらは忘れんすらんと也物思ひの心苦しさにせめて忘たきよし也無破とかくさりかたき儀也

きみこふるなみたの床にみちぬれは身をつくしとそわれはなりける

しぬる命いきもやすると心見にたまのをはかりあはむといはなん

わひぬれはしぬて忘れんと思へとも夢といふものそ人たのめなる

よみ人しらす

わりなくもねても覺ても戀しきかこいろをいつちやらはむすれん

戀しきにわひてたましねはとひなはむなしきからの名にやのこちん

きのつらゆき

きみこふるなみたしなくはから衣むねのあたりは色もえなまし

題しらす

夜とゝもになかれてそゆく泪川名もこほらぬみなはなりけり

戀しきにわひて　戀侘て魂のまとひ出たらはむなしく成たる身の名にやのこるへきと也口訣

きみこふるなみたし　思ひに胸をこかすに君戀る泪にぬるれはこそあれさもなくは衣のむねのあたりはちゆへきと也

夜とゝもになかれて　常に我なかす涙川は冬も氷らぬ水のあはにてあると也水の沫はうきて氷やすき物なれとこほらぬさい

へり萬葉に「此川のみなはさかまきゆく水のごとあはぬ人ぞ常住と書てよさゝもさよむ也

夢路にも露やをくらん夜もすがらかよへる袖のひちてかはかぬ　素性法師

夢路にも露やをくらんかよもすからかよへる袖のひちてかはかぬ

はかなくて夢にも人を見つるよはあしたのところをきうかりける　藤原たゝふさ忠房川位少將信濃拾遺組子

はかなくて夢にも人を見つるよはあしたのところをきうかりける

はかなくて夢にも夢の見えてもはかなくさめつる夜は名殘のしたはれて朝の床のおきうきさ也

いつはりのなみたなりせはからころもしのひにうてはしほらさらまし　大江千里

いつはりのなみたなりせはからころもしのひにうてはしほらさらまし

伸か涙のたくひあれは我泪のさなきよしなへり

しほりのほ濡てよむ　新三ノ七

ねになきてひちにしかとも春雨にぬれにし袖をとはゝこたへん　としゆきの朝臣

ねになきてひちにし袖をとはゝこたへんとしゆきの朝臣

わかことく物やかなしき郭公ときうともなくよたゝなくらん　つらゆき

わかことく物やかなしき郭公ときうともなくよたゝなくらん　つらゆき

さ月山こすゑを高み　口訣

さ月山こすゑをたかみほとゝきすなくねうらなるこひもするかな　凡河内みつね

さ月山こすゑをたかみほとゝきすなくねうらなるこひもするかな

秋きりのはるゝ時なきこゝろにはたちゐのうらもおもほえなくに

秋きりのはるゝ時　物思ふ心は秋霧の晴る時なきかごとくなれは我立居の空も覺ねと也口訣

わかことく物やかなしき郭公ときうともなくよたゝなくらん

わかことく物や悲きと也時そともなくはいつともなく也

よたゝなくは夜さはかしくなく也

さ月山こすゑを高み　口訣

秋きりのはるゝ時　物思ふ心は秋霧の晴る時なきかごとくなれは我立居の空も覺ねと也口訣

虫のゑとゑにたて　虫のゑとくなくとはなけれと忍ひに泪はなかるゝと也

秋なれは山とよむ　物思ひて獨ねるよは鹿にもなくれたとるましきと也秋なれは人の飽によせたりとよむは響なり

秋のゝにみたれて　野花の亂てさくゑとく樣々物思ふ頃にて有と也口訣

ひとりして物を　獨して物を思ふにさそといひてとふ人のなきと恨たるよし也そよとはさそと云心にもいへり口訣

人をおもふ心はかりに　雲ねに鳴わたるといはんとて人を思ふ心は鴈にあられとゝいへり口訣

秋風にかきなす　秋風にかきならす琴のゑにさへはかなく人の戀しくなると也かきなすはかきならすと也「時もりのうちなすつゝみゑきけは時ゑそうつれ君はたそくて是も打ならすと云秋の調子は平調うれへのゑなり秋風にかきなす琴は文集に第一第二絃索々秋風拂レ松蹤韻落とあり口訣

虫のことゝゑにたてゝはなかねともなみたのみこうしたになかるれ

清原ふかやふ

虫のことゝゑにたてゝはなかねともなみたのみこうしたになかるれ

これさたのみこの家の歌合のうた　よみ人しらす

秋なれは山とよむまてなく鹿にわれをとらめやひとりねるよは　貫之

秋なれは山とよむまてなく鹿にわれをとらめやひとりねるよは

題しらす

秋のゝにみたれてさける花の色のちくさに物をおもふころかな　みつね

秋のゝにみたれてさける花の色のちくさに物をおもふころかな

ひとりして物を思へは秋の田のいなはのうよといふ人のなき　ふかやふ

ひとりして物を思へは秋の田のいなはのうよといふ人のなき

人をおもふ心はかりにわらねとも雲ねにのみもなきわたる哉　たゝみね

人をおもふ心はかりにわらねとも雲ねにのみもなきわたる哉

秋風にかきなす琴の聲にさへはかなく人のこひしかるらん　つらゆき

秋風にかきなす琴の聲にさへはかなく人のこひしかるらん

きふもかるよとの　つれよ　さこもかるよとの浮水雨ふれはつねよりことにささるわかこひ
りふとにささるわかふひ　やさとに侍ける人につかはしける
を泥にそへていはんと
てよめる上句也
きえぬさはよしの丶　吉野　てをぬさはよしの丶山のさくらはなひとつてにのみきゝわたるかな
の山を越ぬさは我おもふ　やよひはかりに物のたうひける人のもとに又人さかりてせううて
人を人傳に聞わたると也　すときゝてよみてつかはしける
そへ歌也おもては戀のう
たに聞えす口訣
露ならぬ心を花に　露にも　露ならぬ心を花にをきうめて風ふくことに物おもひうつく
あらぬ心を花にたき初て　題しらす　坂上これのり
風の傳りを聞さとに物思
をすると花に人をよそへ
たり口訣
我戀にくらふの山の　わか　わかこひにくらふの山のさくらはなくちるともかすはささらし
戀にくらふに山の櫻は　むねをかのれはよりて
まなくちるとも數はまさ
らしと也閑部の山をくら
ふるによせたり
冬川のうへは氷れる　冬川の上は氷り下に流るにはせてしたに戀わたると也
瀧津瀬に根さし　瀧津瀬に根さしとゝめぬ萍のゝとく浮て行衛いつくとよるへき方も知ぬ戀すると也
よひ〳〵にぬれてわか　我心に戀て思ぬ時の間もなしといはんとて夜々れるとてぬける衣を衣架にかけてをくにふせたり

冬川のうへは氷れる我なれやしたになかれて戀わたるらん　たゝみね

瀧つせにねさしとゝめぬ浮草のうきたるこひもわれはするかな　ともの〻り

よひ〳〵にぬきてわかぬるかり衣かけておもはぬときのきもなし

あつまちのさやの中山　中〳〵にかくつれなくは何しにか人を思初つるそと也さやの中山は中〳〵に　嘱註　といはんため也前中納言師仲卿おほやけのかしふまりにて下野國に流され下りし時其道にて土民に問れけれは是はさよの中山と申せしかは其定によれたりしを聞て五條三品入道よまれてのち人々あまたさよの中山と讃り又源三位頼政は父仲正か下野守にて下りける時に土民さやの長山と申といふに四行も其定にてしもの詞を長くとそ申ける此集に「かひかれをさやにも見しかけゝれなくよふほりふせるさやの中山と有さやは遠江國の郡の名也さよといふへからす腰の句に中〳〵にとよめり長山といふへからすおくに「布留の中道中〳〵にといふ歌に思合すへしと顕昭いへるに定家卿云亡父卿さよの中山と詠する時人不甘心と聞侍き師仲卿の說は聞もやしけんさも申され侍ら
す同五音なれはやとよとおなしと侍めるあさなけあさにけあかつきあかときなとあけてかそふへからす夜の字をよとよみたるに至り〳〵師仲卿に付にあらす「日数ゆく草の枕をかそふれは露をきそふるさよの中山此さよの中山はきはめて要なる所なれは詞の字のふふと訓とをかくつかひたる迹に難侍らすとそ申されしさやの說をうしなひてよと了簡しなしたるにはあらす少年の時さよの中山といふ歌よみて侍しかは夜の字要なく只さやとよむへしとそ侍し近年聞侍さ「關の戸をさそひし人は出やらてあり明の月のさ夜の中山忠岑かさやの中山さやかにもといへらんかさよと斗にはいかてかよみなし侍らん中を長とよむ事も侍るとそ聞侍しか寂遊はふるの中道なも長道と申とそ申侍し書抄

わかこひはしらぬ山路にあらなくにまとふこゝろわひしかりける　つらゆき

くれなゐのふも出てなく涙にはたもとのみこそいろまさりけれ

しきたへのまくらのしたに海はあれと人を見るめはれひすうありける

としをへてきえぬ思ひは有なからよるのたもとはなを氷りけり

しきたへの枕の下に　枕の下の海には人をみるめは生すあると也口訣
としをへてきえぬ　年へて思ひの火は消す有なからよるの袂は猶氷てひかたきと也汨ともいはて稍ふほるといへり
わかふひはしらぬ山　旅行なとにしらぬ山路をまとふ心作しき物なれはよせていへり
くれなゐのふり出て　紅のふり出夏の部に註せり

しら玉と見えし泪も　年へてくれなゐの色に成たると也

夏むしを何かいひけん　夏虫を何か火に入とはいひけん雖面人をしたふ心から我も思ひにもゆる物をと也

風ふけはみねにわかるゝ　口訣

月かけにわか身を　雖面人も月は面白く見るへけれは我身をかへは哀と見られん物をと也

戀しなはたか名はたゝし　君を戀死なは世中の常なき習ひと云なし賜ふともたか名はたゝし君ゆへとおそ人はいはめと也口訣

津の國のなにはの　我戀はしけきを人はしらしと也兼盛か歌に「難波江に茂れる蘆のめもはるにおほくの世をは君にとそおもふ蘆によふしおほけれはおほくの世をはとそへたり「紫の色ふさ時はめもはるに野なる草木そわかれさりける此歌は目も遥なる也萬之土佐日記に松原目もはるゝとかけるとおなし紹麻竹蓋とて茂き草也

手もふれて月日　手もふれす久しく置たる弓は節おきなとしてくせのいてくるふとくに我も物を思ひていれられぬと也いふそれられれも弓の緣也　萬葉緩宿

しら玉と見えしなみたも年へ　ふれはからくれなゐにうつろひにけり　　みつね

夏むしをなにかひけん心から　われもたもひにもえぬへらなり　　たゝみね

風ふけはみねにわかるゝしら雲の　たえてつれなき君かこゝろか　　ふかやふ

月かけにわか身をかふる物ならは　つれなきひともあはれとやみん　　つらゆき

戀しなはたか名はたゝし世中の　つねなき物といひはなすとも　　ふかやふ

つの國のなにはのあしのめもはるに　しけきわか戀人しるらめや　　ふかやふ

手もふれて月日へにける白真弓　おきふしよるはいころねられぬ　　ふかやふ

人しれぬおもひのみ　人しれぬ思ひほとわひしき物はなし我なけきをは我のみしれはと也君にもしられすかひなき心也

ふとに出ていはぬ　水なき河といへと下に流れかよふかふとく詞に出ていはぬはかりそや下には戀しき物をと也

きみをのみ思ひねに　君を思ひねにしての夢なれは君か心のかよひたるにはあらし我心からみゆる也と了簡したる也

いのちにもまさりて　見果ぬ夢の覺る名殘は命にもまさりておしき物也と也

あつさ弓ひけは本末　弓はひけは本末か我方による物なるをいひかけてよるふそ人の戀しさはまされと也わかふひは行衛も知す　逢まて戀ふとの心なるへし

我のみそかなしかり　年に一夜を契る彦牛織女もあはて過す年なけれは我斗そ物を思ひてかなしきと也

人しれぬ思ひのみこそ佗しけれ　我なけきをは我のみそしる　　ともの り

ことに出ていはぬはかりそみなせ河　したにかよひて戀しきものを　　みつね

きみをのみ思ひねにねし夢なれは　わかこゝろから見つるなりけり　　たゝみね

いのちにもまさりてをしく有物は　見はてぬ夢のさめる成けり　　はるみちのつらき

あつさ弓ひけはもと末わかかたに　よるこそまされこひのこゝろは　　みつね

わかこひは行衛もしらす果もなし　あふをかきりとおもふはかりそ　　ふかやふ

我のみそかなしかりける彦星も　あはてすくせる年しなけれは　　ふかやふ

いまはは や戀しなましを逢みんとたのめしことろ命なりける
　　みつね

たのめつゝあはて年ふるいつはりにてりぬこゝろを人はしらなん
　　とものり

いのちやはなにゝは露のあた物をあふにしかへはおしからなくに

いまはは や戀しなましを　今は戀死ねへかりしをあひみんとたのめたる夜の命にて猶なからふると也

たのめつゝあはて　あはんといひてあはす年をふる儀にもありす報わか頼み戀る心を人はしれと也あさく思ふ心ならはありて思ひやむへきにと也

いのちやは何そは露の　命やはか何そ露ふときのあた物を逢にかゆるならはおしくもあるましきと也何そはなんそ也

おきもせすねもせて　おきてもねられすねるもねられすして夜を明しては春の物さて詠め暮しつとは春の習ひとてなり霞雨をはなかめさよむ春雨は久しく降物なれはなかめを春の物さよめりなか雨を詠によせたり物思ふ春の雨のつれ〳〵くらしかたき由なり三日以後ふるを霖といへはいつふるをもなかめといふへし春雨五月雨なとに限るといふは不甘心一禪御説雨そほふるはそとふる雨をいふ世俗にそほぬれてといふかふとし口訣

つれ〳〵のなかめに　しつかに心のうつるかたなく人をおもひゐる折の長雨に涙川の水ましり袖はかりぬれて逢事のなきと也長雨の心に詠をよせたる也

あさみこそ袖はひつちめ　涙河の淺みなれはこそ袖のみはぬるらめ身も流るときかはふかく思ふとは頼むへきと也贈答の本

といへり

よるへなみ身をこそ　立より頼みよる方もなく身をは遠く隔てつれとも心は君にそひて影のふとくあると也　こゝろへとは頼む

古今和歌集卷第十三

戀歌三

やよひついたちより忍ひに人に物をいひて後にあめのふりけるによみてつかはしける　なりひらの朝臣

おきもせすねもせてよるを明してはは るのもいとてなかめくらしつ

業平朝臣の家に侍ける女のもとによみてつかはしける　ごゝゆきの朝臣

つれ〳〵のなかめにまさる涙川袖のみぬれてあふよしもなし　なりひらの朝臣

かの女にかはりて返しによめる

あさみこそ袖はひつちめなみた河身さへなかるときかはたのまん

題しらす　讀人不知

よるへなみ身をこそ遠くへたてつれこゝろはきみか影となりにき

緣あるあたりを云也緣の字をよるとよむ定家卿云よるへさはたとへは立より頼む緣なとあるあたりを云也無緣にさしはなれたるをよるへなしといふなり

いたつらにゆきては　おもふ人をあひ見まくほしさの心にさそはれ出ていたつらにあはぬ物故にゆきてはかへり〳〵すると也あはぬよのふる白雪と　我さへ副の字也「橘はみさへ花さへ其葉さへは實も花も葉もといふさへ也然はさへはもの心にかよふなり

秋の〻にさ〻わけし朝の　秋の野に笹分し朝といひて露ともいはれともなのつからある也不逢歸戀也伊勢物語にあはてぬる夜とあり朝のはとの釋也

見るめなきわか身を　我を見るめのなき男の我身をうらめしとも思はすかれなてあきの足たゆく來ると水逸によせてよめりみるめなさとは女の男に見えぬ事也是は女の男に我身をうらめしと思へといふ歌也我身をうらとは我身をうらめしとしちぬかといへり　是顯註之義口訣

あはすしてこよひあけなは　今夜逢すして明るならは長く人をつらしと思ふへきと也口訣

いたつらにゆきてはきぬる物ゆへに見まくほしさにいさなはれつ〻あはぬよのふる白雪とつもりなはわれさへともにけぬへきものを

此歌はある人のいはくかきのもとの人丸か歌なり　なりひらの朝臣

秋の〻にさ〻わけしあさの袖よりもあはてこし夜ひちまさりける　小野小町

見るめなさわか身をうらとしらねはやかれなてあきのあしたゆく來ら　源宗于朝臣

あはすしてこよひあけなは春の日のなかくや人をつらしとおもはん　みふのたゝみね

ありあけの雛面く　人のつれなかりしより曉ほとうき物はなしと也はかりは程といふ心也顯昭說女のもとより我は明ぬとて歸るに有明の月は明るもしらすつれなく見えし其時より曉ほうくおほゆとよめり　口訣　定家卿云つれなく見えしは此心にかそ侍らめ此詞つ〻きを見るに及すえんに面白くもよみて侍る哉是ほとの歌ひとつよみ出たらんかの世のおもひ出に侍るへしと也一禪御說後鳥羽院より定家家隆兩人もとへ八代集の中に面白き歌は取分いつれそと勅問有しかは有明のつれなくの歌を兩人同心に申されしと也何やらんに記錄したるを御覽有しと也又定家卿古今集秀歌十首の其一也

あふことのなさにしよる波　なれはうらみてのみうたちかへりけるかねてより風にさき立波　なれやあふ事なきにまたき立らんみちのくにありといふなる名とり河　なき名とりてはくるしかりけりあやなくてまたきなきなの立田河わたらてやまん物ならなくに

ありあけのつれなくみえし別よりあかつきはかりうき物はなし　ありはらのもとかた

あふことのなさにしよる波なれはうらみてのみうたちかへりけるよみ人しらす

みちのくにありといふなる名とり河なき名とりてはくるしかりけり　みはるのありすけ　御春有助河內國人左衛門尉

あやなくてまたきなきなの立田河わたらてやまん物ならなくに　もとかた

さきたつなみと名のたつをいへり

みちのくにありと　口訣

あやなくてまたき　かひなくて早くなき名のたてとも逢すしてやむへき物ならすと也立田河わたらてやまんとはあはてはやむましさと也あやなくてはかひなくて也あちきなきを也云也またきは早也　速字なり

人はいさ我はなきなの　人はしらす我はなき名のたつかおしけれはむかしもいまもしらすとをいはんましらすといふへきと也いさは不知也下句にしらすと有之歌に「人はいさ心もしらすといへり此うたにおなし否やなといふ心也

おりすまに又も　無名たつはなけかしく思ひたれとも人にくからぬ世にすめはおりすゝ又名は立へしよしく〳〵とおもふ人にいひたるよし也おりすまはおりすなり人にくからぬとはやはらかになつかしき

人をいふ無名立て歎かせける人の又なつかしく物語なとしけるに前の事を思出てよめる也中〳〵念なき中よりは心とこりて哀に覺え侍けんかし

ひんかしの五條　染殿の后五條に住給へは五條后共申二條后も此對に住給ふ染殿とはいとゝ也

人しれぬわかかよひち　人しれぬ我通路なれと今は守れは關守夜ふとにうちもれよとなり番口詞

しのふれと戀しき　人に忍ふれと戀しさに出てくると也山より月のは出てくるといはんとて也

ひとはいさ我はなき名のおしけれはむかしもいまもしらすとをいはん

よみ人しらす

てりすまに又もなき名は立ぬへし人にくからぬ世にしすまへは

ひんかしの五條わたりに人をしりをきてまかりかよひけり忍ひなる所なりけれはかとよりしもえいらてかきのくつれよりかよひけるをたひかさなりけれはあるし聞付てかのみちに夜ことに人をふせてまもらすれはいきけれとえあはてのみ歸りてよみてやりける

なりひらの朝臣

人しれぬわかかよひちの關もりはよひ〳〵ことにうちもねなゝん

つらゆき

しのふれと戀しき時はあしひきの山より月のいてゝころくれ

よみ人しらす

おひ〳〵てまれに今夜　數々心なつくして玉ずかに今夜逢夜なれは木綿付鳥別を告すあれと也

秋のよも名のみ成けり　秋の夜も名のみにて長くもあらす逢といへは何事をいひいたしたる事もなきにやかて明ぬる物をと也

獨ぬるとは短夜も長く覺え逢夜は長きょもみしかく覺る事物おもふ人の習ひなりおとそともなくは何事ともなくなり新古今「逢とみておとそともなくあけにけりはかなの夢の忘れかたみや

なかしともおもひそ　秋の夜なれと長しとも思はす昔より今に至るまて逢人によりて短くも長くも覺る習ひなれはと也

しのゝめのほから〳〵と　夜のほからかにあけゆけは別のきぬ〳〵となるか悲しきと也曙をしのゝめともいなの目ともいへりほから〳〵とは明を翌していふ今は詠すへからす

あけぬとて今はの心　夜の明ぬるとて今は歸らんとおもふ心のつくからに此別の心のいひも習はす思ひもならはぬほさにおしくかなしき心也

明ぬとて歸る道には　夜の明るとてたち別歸る道にはかきたれて雨も泪も降て袖ぬるゝと也おきたれてはかきたれて也おと

こひ〳〵てまれに今夜うあふさかのゆふつけとりはなかすなあらなん

をのゝこまち

秋のよも名のみ成けりあふといへはことゝもなくあけぬる物を

凡河内躬恒

なかしともおもひそはてぬむかしよりあふ人からの秋のよなれば

よみ人しらす

しのゝめのほから〳〵とあけゆけはをのかきぬ〳〵なるろかなしき

藤原國經朝臣

あけぬとて今はの心つくからになといひしらぬおもひろふらん

宮平御時きさいの宮の歌合のうた　とゝしゆきの朝臣

明ぬとてかへるみちにはこきたれて雨もなみたもふりろほちつゝ

かさ五音也
しのゝめのわかれを篠目の衣々の名殘おしさに鳥より前に鳴初めつると也
郭公ゆめかうつゝか　郭公に曉の別の聽しさは夢か現にてあるかいかにとかたらひたるよし也折ふし時鳥なけは也
玉くしけあけは君か名　口訣
けさはしもおきけん　朝おきわかれて心そらに出ぬるかたもしらさりしに今おもひ出るそきえいるはかり聽しきと也今朝は霜也此霜てにはのやうにをけり面白し
ねぬるよの夢を　人にほのかにあひたるか夢のふとくはかなけれはあかぬ名殘をしたひて若誠の夢にやみゆると打まとろむに夢もみえぬをいやはかなにも成まさると也
齋宮なりける人に　伊物に此事委みえたり齋宮は文德の御むすめ清和の御妹也貞觀元年に齋宮に立給ふ

題しらす　　寵　一說ウツク　一說チョウ用之

しのゝめのわかれをおしみ我うまつ烏よりさきになきはしめつる　　よみ人しらす

郭公ゆめかうつゝかあさつゆのおきてわかれしあかつきのこゑ

玉くしけあけは君か名たちぬへみ夜ゝかくこしを人見けんかも　　大江千里

けさはしもおきけんかたも知さりつおもひいつるうきえてかなしき人にあひてあしたによみてつかはしける　　なりひらの朝臣

ねぬるよの夢をはかなみまとろめはいやはかなにもなりまさるかな

業平朝臣のいせの國にまかりたりける時齋宮なりける人にいとみろかにあひて又のあしたに人やるすへなくて思ひをりけるあいたに女のもとよりをこせたりける　　よみ人しらす

きみやふし我や　君や來つる我や行けん知す夢か現かれての事か覺ての事にてあるかさ也口訣
かきくらす心のやみに　かき暮す心の闇にまとひて夢とも現とも我はえ定むましけれは世の人定めよさ也伊物には今宵さためよさ有齋宮に今夜來りて定めよといふ心也一說世人さはよます後宇多院の御詞也口訣
むはたまのやみの現は　やみのくらきに逢たる現は誠なる夢にいかほともまさらぬさなり口訣
さ夜ふけてあまのさ　口訣
きみか名も我名も　たかひに名のたゝん事のつゝましけれは人もみつともいふな我もあひにきさもいはしと口かためをしたるよし也雜波に三津といふ所あれは人を見つさそへたりあまの網子也網を引をあひきさいへと是は只人にあひまいらしきさもいふましきさ斗也萬葉に「大宮のうちまてきふゆあひきすさあふさゝ」のふる歌のよひふる是は網引をよめり連註拾初之抄
なとり川瀨々の　あらはれはいかにせんさて我は逢見初けるそと世のつゝましさを思ひつゝけせんかたなき事を歎きたる也
埋木は水にも土にも年久しくうつもれたる木也「杉板もてふける板間のあはさらはいかにせんさか我れそめけん同し心也
かれは古き歌にて直に是は艷によめり密勅之抄定家卿古今集愛歌十首の其一なり
よしの川水の心は　吉野河の水のふとくに我心は切なりさもたかく音はたてしさおもふさ也

戀しくはしたにを思へ　戀しくは下におもへ（紫の根すりの衣のふとく色にゆめ〳〵出なと也紫の根にてすれる衣をいふ色にいつなといはんとて紫の衣にとりよれり萬葉に「つくま野に生る紫きぬそめはいまた著すして色にでにけり同し心也後拾遺「人しれてれたさもれたし紫のねすりの衣うはきにやせん返し和泉式部「ねれきぬと人にはいはん紫のねすりの衣うはきなりとも是は下に思へ色に出なといひし衣をいまはれたし上にきんといへるを和泉式部只ねれきぬとおそいはめ上にきるともといへるはをとり川の心をえあらかはて只おとはりなきぬれ衣といひなさんとよめり花すゝきほにいでゝ　ほにあらはれて戀れは名のおしさに下に思ひむすほゝる〻と也花すゝきほにに出てといはんためしたゆふひもはむすほゝれつゝといはんため也下紐は下裳の腰をゆふ也うは裳といふはゆらきぬのうへにかくる物を云也裳のふしは其きぬの上に引かくる裳の腰也おもふさちひとり〳〵　忍ふ中にひとり〳〵戀しなは誰故とてか藤衣をはさるへきそと也藤衣は服衣也いやゝきものゝきものをもいふ口訣なきおふるなみたに　戀るなみだに袖のぬるゝならはぬきかへてよる藤衣をきるへきと也女の誰によそへて藤衣をきるへきと問

戀しくはしたにを思へむらさきのねすりの衣いろにいつなゆめ
をの〳〵はるかせ小野春風右少將宰寛平

花すゝきほにいでゝこひは名をれしみしたゆふひものむすほゝれつゝ
たちはなのきよきかしのひにあひしれりける女のもとよりをこせたりける
よみ人しらす

おもふとちひとり〳〵かこひしなはたれによりへて藤ころもきん
返し
たちはなのきよき

なきこふる涙に袖のぬほちなはぬきかへてらよるころはきめ
題しらす
こまち

へは人のしらぬやうに夜きよと也
うつゝにはさもこそ　現に人目をつゝみまもるはさもあるへきに夢にさへ人めを忍ふとみるか佗しきと也
かきりなき思ひのまゝ　忍ひかよふを人の見とかむるか佗しきに夢路をだのめてよるもとひたんそれをは人のせかしと也口訣
ゆめちにはあしも　人を思ひれにする故に夢路にはしけくかよふとも現に一目も見る事はなきと佗たるよし也
おもへとも人目づゝみの　戀しく思へとも人目をつゝむ事のふかけれはそことは見やれともえゆかぬ心つくしなると也人目つゝみを堤によせ堤の高きは河のふかき故にえわたらぬさよそへたり
たきつ瀬のはやき　瀬川の水の早きことく我心のたきりたるを何にか人目つゝみのせきとゝむるそとなり
くれなゐのいろには　人目を忍ふ心つくしに戀死ぬとも色には出ましきと也隱沼の下に通ひては下にかよふ心によせて也
冬の池にすむ鳥鴨　池の鳥鴨のつれなくそこにかよふとさくかよふ心はありとも人にしらすなさみつから云也
さゝの葉になく初霜の　笹に霜のしみつきても色に出ぬことくふかき思ひにしみつくともいろに出しと也しみつくいまは歌

うつゝにはさもこうあらぬ夢にさへ人めをもると見るかわひしさ
かきりなきたもひのまゝによるもこん夢路をさへに人はとかめし
ゆめちにはあしもやすめす通へともうつゝにひとめ見しことはわらす
よみ人しらす

たきつ瀬のはやき心をなにしかも人めつゝみのせきとゝむらん
寛平御時きさいの宮の歌合のうた　きのとものり

くれなゐのいろにはいてしかくれぬのしたにかよひてこひはしぬとも
題しらす
みつね

冬の池にすむには鳥のつれもなくそこにかよふと人にしらすな
さゝの葉になく初霜の夜を寒みしみはつくともいろにいてめや

すへからす
山しなのをとはの　口歌
みつしほのなかれひる　壺
間の逢かたけれは夜を待
と也鹽の波干（カレヒ）を壺にい
ひかけ海松めの浦による
を夜によす
しら川のしらすとも　心の
そこ清く人の間はしりた
るをしらすともいはしな
からへて世々に契りすま
んとおもへはと也
したにのみこふれは　下に
戀れは苦しきにあらはれ
てみたれんに人なとかめそと也玉の緒のは絶てみたれんさいはんため也
我こひを忍ひかねては　忍ふほとそあれ忍ひかねてあれは山橘のことく色に出へしとなり山たちはなは世俗に藪柑子といふ草なり實の赤き物也髪りきの時山菅にうふる草也
おほかたは我名も　人の難面くてみる事のすくなけれは大かたは忍ふも苦しきに我名もあらはれ出なんと浜邊によせていへり舟とも（群書抄）いはて湊こき出なんといへり一説海のほとりは見るめすくなけれは湊をこき出なん沖には定てたほからん心をそへたり定家卿云此歌をは只我名も湊こき出なん世を海邊たにみるめすくなしとよみて中と申さるゝ事なかりしかは海のほとりたに見るめすくなけれは湊へこき出なんとよめると思ひて侍き顕昭法師後撰に「何せんにへたのみろめを思ひけん沖津玉藻をかつく身にしてといふ歌を了簡して海へたにと申けることはりかなひてさり出して侍けりされと歌ならぬ詞に

山しなのをとはの山のをとにたに人のしるへく我こひめかも
　此うたはある人あふみのうねめのとなん申す
　　きよはらのふかやふ

みつしほのなかれひるををわひかたみ見るめのうらによるをころまて
　　平　貞　文

しら川のしらすともいはし底清みなかれてよゝにすまんと思へは
　　とものり

したにのみこふれはくるし玉のをのたえてみたれん人なとかめそ
我こひをしのひかねては足引の山たちはなの色に出ぬへし
　　よみ人しらす

おほかたは我名も湊こきいてなん世をうみへたにみるめすくなし
　　よみ人しらす

もへたといふ事つかはまうけれは猶海邊たにとて侍なんや但萬葉十二「あは海のへたは人しる沖津浪君をゝきてはしる人もなし是も海のへたさはきこえたり清輔朝臣（顕昭）此歌をかき出しなから北鄙なし以往の人皆うみへたにと存する歟一説御説此歌我名もみなとは我名もさもにのかれんといふ也
萬葉に海濱と書てへたとよめり
まくらより又しる人も　我戀を枕ならては知人もなきゑ涙せきとゝめられすしてもらしつると也人にもらすによせたり口歌
風ふけは波うつきしの　波うつ岸の松のことくれにあらはれてなきぬへしと也根に音をそへたり
池にすむ名をおし鳥　名をおしみて隠れ忍さすれとあらはれしとなけく心を池の鏡の淺みに隠れかれたるによそへてよめり
名を惜さそへて也
あふことはたまのを斗　逢事はしほしのほさにてあるに我名のたつはよしの川の瀧津瀬のことくをひたゝしくきこゆると也
むら鳥のたちにし　我名の立にしを今さらに事なしさまにいひなすともしるしあるましきと也村鳥は立さいはんため也事なしさまにいふともといふ心也（顕証）
きみにより我名は　君故に我名は花にかすみの野にも山にも立みちたるかことくに有て人のゝてあつかひたると也こと〳〵しく名のたちたるさいはんとて野にも山にも立みちたるかことくに有て人のゝてあつかひたると也こと〳〵

まくらより又しる人もなき戀をなみたせきあへすもらしつる哉
　　平　貞　文

風ふけは波うつきしの松なれやねにあらはれてなきぬへらなり
　　よみ人しらす

池にすむ名をおし鳥のこのうたはある人のいはくかきのもとのひとまろか也
あふことはたまのをはかり名のたつはよしのゝ川の瀧津瀬のこと
むら鳥のたちにし我名いまさらにことなしふともしるしあらめや
きみにより我名は花にそかすみ野にもやまにもたちみちにけり

しるといへは枕たに　戀を
枕のしるといへは枕たに
せてねしものを我名のた
うし事さなけく也屋は立やすき物なれはいふ

伊勢

しるといへは枕たにせてねしものをちりならぬ名のうちにたつらん

古今和歌集卷第十四

戀歌四

題しらす　　よみ人しらす

みちのくのあさかの沼の花かつみかつみる人にこひやわたらん
あひ見すは戀しき事もなからましをとにう人をきくへかりける

みちのくのあさかの　かつ
見る人にさいはんとて花
かつみさいひつゝけたり
安積にかつみよみならはせり花かつみは菖蒲草に花の咲たるをいふ花類花橘さいふかことしかゝる物の名さころにしたかふ伊勢には蘆をは濱荻さいひ

菖蒲註

蒲をかつみさいふかつみふきさて五月五日にもかつみをふくさそ陸奥に菖蒲なしされはかつみを端午にふくなりさ後賴抄に有しかるに都芳門院の根合に藤原孝善歌に「あやめ草ひくてもたゆくなかき根のいかてあさかのぬまにおひけん此歌金葉集にいれられたり如何但彼歌合にはあさかのぬまにあやめなしさいふ雜は侍らすあさかのぬまのあやめにや此歌合にもてのほらは日數久しくして其根枯て見所あらしさかやうにこそこさはられ侍れされはかつみふきさいふ事は五月五日にふく事にあらすやうある事にこそ異說註　菖蒲　みちのくの習ひにてあやめなかりけり寶方中將かの守になりて下られたるに五月五日にいかにあやめはふかぬそさ尋るに國にさふらはすさ申すさてあるへきならすあさかの沼のかつみなかりてふくへしさてふかせられたりける後五日にかつみをふく也さ中古の人かたり傳へけり六條右府子息皇后宮亮信雅朝臣陸奥の守になりて下りて京に歸りて此事空事也あやめこよなく侍ける彼中將の後にや出來けん又かつみふく事やひか事ならんしらす其人はわささ物を愛なくいひなすやうなりしか室八島いかならん所なるさおもひしに無下に見さころなゝ煙なさかたりてまこさに鹽竈の浦こそ我らか歌よまぬ心にもせんかたなく面白く聞しにも過て覺れさ申されしに故あるよし先人のいはれんよりも信せられしさそかたられ侍しうちこくふれのつなてかなしもさよめるもこさはりに侍るへし異說註

あひみすはこひしき事も　見れはこそ戀しくわすれかたけれは中々見たる事を後悔して音にそ人をきゝて有へき物をさ也

いそのかみふるの中道　中〳〵に見すは戀しき心もあるましきれ見て物思ふと也石上ふるとつゝくる　亜蘆引の山なとのことし君といへは見まれ見す　君といへは見もせよ見てもあれふしのれのいつも煙のたつことくたもひにもゆるとなり君てへはとかける木もあり見まれ見すまれは見もせよ見すもあれなり

ゆめにたにみゆとは　朝な〳〵我かゝみのかけのよくもあらぬ月なれは現はいふに及はす夢にたに人に見ゆるとは見えましきと也

いしまゆく水の白波　石間ゆく水の白波のことく立かへり〳〵人を見れともあかぬと也

いせのあまのあさな　朝夕におもふ人を見てあくまてあらまほしきと也朝な夕なはあさ夕也　つくとは海に入てあまの海藻魚貝をもとるをいふ也

春かすみたなひく山の　霞たつ山櫻を見れともあかぬかことくの君と也

いそのかみふるの中道中〳〵に見すはこひしとおもはましやは

つらゆき

君といへは見まれ見すまれふしのねのめつらしけなくもゆる我こひ

藤原たゝゆき　忠行前選江守有貞子

ゆめにたにみゆとは見えし朝な〳〵わかたもかけにはつる身なれは

伊勢

いしまゆく水のしらなみたちかへりかくころは見めあかすもあるかな

よみ人しらす

いせのあまのあさな夕なにかつくてふみるめに人をあくよしもかな

とものり

春かすみたなひく山のさくらはな見れともあかぬきみにもある哉

ふかやふ

心をそわりなき物と　かつみる〳〵人の戀しく覺れは心ほそわりなき物はなしとおもひねると也

かれはてんの君ちをは　枯果る事もあらん後をはしらて夏草のことく深く人を思ふかはかなき事を歎思したる心也

あすか川ふちは瀬に　飛鳥川の淵は瀬にかはる世なりとも我思ひそめたる人は忘へましきと也

おもふてふ言の葉斗は　思ふといふ言の葉斗は秋をへて同し色なるか人の心はかはり果たると也秋を飽によせたり

さむしろに衣かたしき　せはき莚に衣一片敷て今夜もや宇治の橋姫もやといふに夜をかさねし心有橋姫とは宇治橋のもとに姫大明神とてはする神をいふ其御もとへ宇治はしの北にたはする離宮と申神のかよひ玉ふ事と也又隆縁といふ歌よみは住吉の大明神のうちの橋姫にかよひ玉ふといへりいつれにてもあるへし又橋姫物語といふ物もあり定家卿云かくのことき古き物かたりは只歌に付て古歌を今のうたによまするさたなりたる事也不可用之　書陵伊一物語には戀しき人にあはてのみねんと下句をとりかへて有

君やとん我やゆかんの　君や來るへき我やゆかんとたにふやすらひに門をもさゝすねたると也いさよひはやすらふ心也いさ

心をそわりなきものと思ひぬる見るものからやこひしかるへき

ねふしかうちのみつね

かれはてん後をはしらて夏草のふかくも人のおもほゆるかな

よみ人しらす

あすか川ふちはせになる世なりともおもひろめてん人はわすれし

寛平御時きさいの宮の歌合の歌

たもふてふことの葉のみや秋をへていろもかはらぬ物にはあるらん

題しらす

さむしろに衣かたしきこよひもやわれをまつらん宇治のはしひめ

又はうちのたまひめ

きみやこん我やゆかんのいさよひにまきの板戸もさゝすねにけり